
宴の夜に舞い降りる。

津森太壱。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宴の夜に舞い降りる。

【Zコード】

Z22360

【作者名】

津森太壱。

【あらすじ】

狩人で在り続けるその人は、とても強くて、そして弱い人だった。怖いくせに、悲しくせに、寂しくせに、つらいくせに、狩人なのだ。その身体をいつも傷だらけにしながら、彼はヒョウジュのところに帰つてくる。ただいま、と言つてもらえることが、ヒョウジュにはなによりも幸せなことだった。

〇〇：ただいま、おかえり。（前書き）

はじめまして、じんじんちば。

よひにやおいでくださいました。

楽しんでいただければ幸いです。

ひよ、と呼んでくれる人がいる。

今まで誰も、そんなふうに呼んでくれる人はいなくて。

今まで誰も、そんなふうに笑顔を見せてくれる人はいなくて。

いつも、いつも、この髪のせいで不気味がられてばかりだった。

「ただいま、ひよ

怖がりもせず、恐れもせず、彼はいつも朗らかな笑みを見せてくれる。その笑みで話しかけてくれる。

「おかえりなさい、イザヤ」

手を差し伸べれば、にこにことしながら手を差し伸べてくれる、とても温かい人。その傍らにはいつも、黒い犬を連れていた。

二十年ほど前だったろうか。

英雄になることを拒み、若くして死した騎士がいた。

今日の前にいる彼は、その騎士の魂を持っているという。

その騎士が連れていたという黒犬と、片刃の双剣を操り、彼はその騎士と同じように害獸を駆除する狩人だ。

「ひよ？　どうした？」

「……無事に帰つてきてくれて、よかつた」

「あー……うん。今回も、無事だつた

言い方に疑問を感じた。だから、もしかして、と思つ。

慌てて着ていた服に手を伸ばして、捲ろうとしたら、真っ赤な顔をして逃げられた。

やはりそうだ。

この人はまた、痛いくせに痩せ我慢して、怪我を放置したまま帰つてきたらしい。

「どうして手当てをしないの」

「や、や、や、帰りがけだつたからー。」

「逃げないで」

「女の子に襲われるなんて嬉し過ぎて恥ずかしいー。」

「ばかなこと言つてないで、傷を診せて」

走つて逃げる彼を追いかけ回して、けつぎよく捕まえられないから黒犬にお願いする。

「ギル、捕まえて。手当てしたいの」

「いいけど……ひよ、汚れるぞ」

「イザヤの怪我が心配なの」

「……わかった」

黒犬は賢い。天恵という、天から恵まれた力を持つ魔の生きものだから、言葉も感情も理解できる。

その身体は大きく、また俊敏で、彼を捕まえるのはあつといつまたつた。

「ギルの裏切り者ーつ」

「イーサがひよを心配させるからだろ」

彼を下敷きにした黒犬の言葉から、彼が怪我を隠そうと思つたらしくことに気づいて、ため息がこぼれた。

「どうしていつも隠そうとするの。無駄なことでじょう」「だつて……」

ぶつくりと頬を膨らませ、不服そうな顔をした彼は、治療されることを諦めてくれたようで、黒犬を背中から退けると起き上がり、自分からその上着を脱いだ。

「触るなよ、ひよ。ひよが、穢れる」

脱いだ上着を受け取ろうとしたら、彼はそれを黒犬に放り投げた。それは彼の気遣いで、優しさだった。

害獣から受けた傷や、傷からの血は、それが僅かなものでも、穢れになる。害獣というものが、世界の濁みや塵であるから、生きているものを穢れさせるのだ。

「わたしは穢れにあてられない。そういう天恵を持つていると、教えたでしょう?」

「それでも」

彼は頑固に、穢れから護るうとしてくれる。

こんなふうに護られるのは、とても「そばゆい」とても嬉しいことだった。

なぜなら、穢れにあてられない天恵を持つていて、誰よりも身近に穢れを見てきていたから。その天恵が、異質な髪色をもたらしていたから。

誰もが不気味がるこの髪の色は、白。

穢れを拒絶し、穢れを浄化させる、白。

天恵によるものだと知らない者たちは、この白を、色を失くしたものだと捉えて不気味がる。恐れる。怖がる。

だから、穢れを弾くのに、それを心配してくれる彼の気持ちが、とても嬉しい。

「ギル、それ……燃やしてきて」

「わかつた」

穢れてしまつたものは、火をくべて燃やしてしまつのが一番いい。だから彼は、黒犬にそれを頼んだ。

「ひよは、触っちゃだめ、だぞ」

彼は肩に、怪我をしていた。出血はひどく見えるが、それももう止まつて、再生が始まつてゐる。

「……だいじょうぶそうね」

再生が始まつてゐるなら、穢れに蝕まれる心配はない。自然の治癒力が穢れを上回れば、穢れは消えていくものなのだ。

それでも、彼の細い肩に、その傷は痛々しい。

怪我なんてしないで、と本当は言いたい。言えないのは、以前そう言つたときに、彼が微笑んだからだ。おれは狩人だから、と。その微笑みには、勝てなかつた。

「傷は深くなさそうね」

「掠つた程度だから」

「そうみたい。穢れも消えているわ」

「そ？ ならよかつた」

にか、と笑う彼が、可愛い。

この笑みが向けられていることを、たまらなく幸せに思つ。

「ひよ」

「なあに？」

「うん……ただいま、ひよ」

彼に、ただいま、と言わせてやれる自分が、嬉しかつた。

「おかえりなさい」

〇〇：ただいま、おかげ。 (後書き)

誤字脱字、怪文書があつましたら、ひとつそりひつそり優しく、『指
摘くださつますよつお願い申し上げます。

*『黒犬と宴の夜。』がイザヤの話となつてありますので、よひし
ければお立ち寄りくださいませ。

ヒョウジュは昔から、白い髪の持ち主だった。それはふたりの兄とも、両親とも、祖父母とも違う色で、國の中でも異質な色だった。空色の瞳はふたりの兄と父と同じなのに、髪だけが白いから、なにも知らない人たちからは色を失くした者として見られていた。髪が白いのは、天恵という、天から恵まれた恩寵の力ゆえのことであるだけなのに。

だからヒョウジュは、産まれたときから、不気味そうな目で見られる目に慣れている。恐れられ、怖がられる目で見られることに、慣れている。

「また部屋に籠もつて……ヒョウジュ、ダメだらつ、こんなに天気がいいんだから、たまには外に出ないと」

「おれらとお茶でもしようつ」

長兄のアオヅキと、次兄のナガクモの声に、ヒョウジュはふと顔を上げる。優しい兄ふたりは、いつも部屋に籠もりがちなヒョウジュを心配して、こうしてよく部屋を訪れてくれていた。

そのとき兄たちを見たのは久しぶりだった。少し前に、遠くに行つていた祖父母が無事に帰国し、その宴やら祝いで数日ほど忙しかつたこともあり、ヒョウジュよりもやることがたくさんある兄たちは振り回されていたのだ。やることがないほうが多いヒョウジュも気疲れしたほどで、しかし無事帰国した祖父母との宴は楽しかったと憶えている。

「ほら、外に行こう？」

「天気がいいから、空気がおいしいぞ」

兄たちはそう誘ってくれるが、ヒョウジュは首を左右に振る。祖父母の帰国という喜ばしいことがあったために、まるでついでにばかりに、降りかかってきたものがあるのだ。

「耳が痛いの」

そう言つと、兄たちの顔が曇る。先にため息をついたのは、次兄のナガクモだった。

「また父上か……」

その呟きは当たりだった。

「ヒョウジュを可愛がるのはいいけど、どうしてこいつ、もつと気持ちを汲んでやれないかなあ……なあアオ、父上のこと殴つていい？」
「ナガ、物騒なことを言つな」

「でも、ヒョウジュが外に出たくなるほどだぞ？」

「仕方ないだろ？ ヒョウジュも来年には成人だ。婚約を固めてしまいたい父上の気持ちは、わからなくもない」
「口ク家のシズトだろ？ いい男ではあるけど……」

ヒョウジュの耳を痛める以下の問題は、来年には成人するというのに決まらない婚約だ。ただでさえ外見のせいで疎まれがちであるに、父の過保護の結果だ。

しかしヒョウジュは、誰とも結婚するつもりがなかった。この外

見だ。どうしたって、人はヒョウジュを不気味に思う。
だからこのまま、死ぬまで、ひつそりと生きていたかった。

「兄さま方、わたしのことはどうが、捨て置いてくださいませ
「……ヒョウジュ、そんな寂しい」と言つた

眉をひそめたナガクモが、ヒョウジュに視線を合わせて屈む。その両手を取られて、ぎゅっと握られた。

「おまえのことを捨て置くなんて、できるわけないだり

ナガクモの田は、長兄のアオヅキと同じように、優しい。

「わたしはこのままでよこのです

「ヒョウジュ……」

「この離宮で生きることを、お許しくださいませ」

ヒョウジュは、結婚しないなら、しなくてもいい立場にある。兄ふたりとは違う。

長兄はこの国、リョクリョウ国の中太子、次兄は第一王子だ。いずれは長兄が国王である父の跡を継ぎ、次兄がそれを支える。それならヒョウジュも兄たちを支えられるようだ、とは思うのだが、この外見は兄たちのために使えないのだ。

それに、このところの害獣被害が増加傾向にあるせいか、ヒョウジュの外見を不気味に思う者たちの田は、田に田にひどくなつている。こんな自分が、兄と父に護られてばかりの自分が、国のためになるわけもない。

ヒョウジュが兄や父のためにできることは、一十年ほど前に起きた害獣襲撃のときのように城まで燃やさないよう、天恵を駆使する

ことだけだ。

「お許しくだれこ、兄さま方」

ヒョウジュは兄たちから逃げるように、握られていた手を離すと身を翻した。ヒョウジュ、と兄たちが呼んでいたけれども、ひとりでいたい気持ちが強かった。

「姫さま……」

「お願い、ひとつにして」

兄たちから逃げたヒョウジュは、追いかけてくる侍女や近衛兵を振り切り、離宮の片隅にある温室へと足を向ける。

温室とはいっても、厚い硝子に囲われているだけの狭いところであるから、栽培されている花の数は少なく、暖かいわけでもない。外に比べれば暖かいというだけで、寒い季節が長いリョクリョウ国を皮肉つている庭の休憩室だ。

ひとりになつて、ヒョウジュは詰まりそうになる息を長く吐き出した。

「このままでは……いられないのね」

いくら穢れを弾く天恵を持つても、それで城を護つても、ヒョウジュは城に、王宮に留まり続けることなどできない。降嫁しなくとも、いざれは街に降りて暮らすことになる。

「……受け入れて、もうかるかしら」

長椅子に腰かけて俯くと、結えてもない白い髪が、さらりと落

ちてくる。Jの白い髪を疎ましいと思つたことは、あまりない。な
いけれども、好きにもなれない。みんな恐れるから、怖がるから、
不気味がるから、悲しくなるのだ。

兄たちや父のように、暖かい夕陽の色であれば。

母のように、優しい大地の色であれば。

こんなに悲しく、寂しい思いをせずに済んだだろつか。

ほんやつと、ヒョウジュは考える。

これからのことと、どうやって父を説得するかを、どうやって街
で暮らしていくかを。

「ひとりで、生きていけるかしら……」

そう呟きがこぼれたとき、ヒョウジュは全身に、ぴしりぴしりといやなものを感じた。

ハッと、顔を上げる。

見上げる空は晴れて、綺麗だ。雲一つない、清々しい空。

それなのに、いやな感じがする。

こんなに、はつきりとわかるいやなものは、初めてだ。こんなに
大きく、深いものを感じたことなど今までにない。

「どうして……穢れ、なの？」

ヒョウジュはふりりと立ちあがると、温室を出た。

穢れは、肌で感じるものではない。心で感じるものではない。む
しろ、感じられるものではない。穢れに蝕まれている当人でもない
限り、他者は感じられないものだ。

もしかしたら害獣に侵入されたのかもしれない。

次第にヒョウジュの足は早まり、きょろきょろと周りを見ながらそれを捜す。

「姫さま、姫さま、いかがなされたのです」

「わからない……わからないの。いやなものを感じるのに、わからないのよ」

途中で自分の侍女や、つけられている近衛兵を見つけたが、今感じているものを説明するのももどかしく、とにかくいやなものを捜し続けた。

離宮を抜け、後宮を抜け、表の王宮まで出てきたところで、出仕している貴族のさまざまな視線が一気にヒョウジュを射る。いつもならいやな気分になるが、今はそれどころではない。

「姫さま、それ以上は……」

正面の出入口付近まで来たとき、侍女にそう止められたが、ヒョウジュの焦燥も募つていくばかりで、足を止められなかつた。

しかし。

ふと目が、駆け込むようにして王宮に入ってきた一段に、吸い込まれる。

「シスイー！」

先頭を切つている青年に見憶えがあつたヒョウジュは、咄嗟にその青年を、シスイを呼び止めた。ヒョウジュに気づいたシスイは、立ち止まって振り返つてくれる。

とたん、ヒョウジュは瞪田した。

「姫さん、なんだ、どうした、こんなところまで。悪いが今は「シスイ、その人」

「あ？ ああ、怪我人だ。害獸に襲われたんだよ」

だから悪いが、と立ち去りつとしたシスイの腕には、小柄な少年が、いや、青年が横抱きされていた。

彼だ。

彼からいやなものを感じる。

「だめ……だめよ

声が震えた。

なんで、どうして、こんなこと。

「こんな……だめよ」

穢れだ。

穢れが、ひどく彼を、蝕んでいる。この青年の命を。一刻も早く、この穢れを彼から取り除かなければ。

「姫さん、すまねえが行くぞ」

蒼褪めるヒョウジュに、シスイはやう声をかけ、足早に立ち去る。それを田で追いかけ、続くようヒョウジュは再び駆け出していた。

「姫さま、お待ちください！」

なにかを捜して歩き回るのではなく、シスイを追いかけ始めたヒョウジュを、侍女が追いかける。

ぞろぞろと続いたその集団に、出仕していた貴族たちが目を丸くして見ていたことを、ヒョウジュは知らない。

害獣に襲われ、穢れに蝕まれた青年を、その素性もわからないまま、ヒョウジュは治療にあたつた医師と共に診た。

ヒョウジュ自らの行動に戸惑う者もいたが、それを気にしてはいられない。穢れは青年の命を蝕む一方であり、またその穢れはヒョウジュの天恵を刺激し、城内の空気を狂わせているのだ。

ヒョウジュはとにかく、青年の治療に専念した。浄化の天恵を駆使した。

青年、名をイザヤというらしい彼の事情を聞いたのは、彼の意識がぼんやりと戻る少し前のことになる。

イザヤは、害獣を駆除した際に、或いは駆除する際に開かれる宴に呼び寄せられ、だが帰られなかつた迷子で、そして二十年ほど前に死した騎士の魂を持つという。

それらのことには、帰国したばかりの祖父母が関係していた。父が迷子を捜しているというのは、祖父母が帰国した際に開かれた宴で聞いている。ゆえに、イザヤの情報を求めて祖父母の許を訪れた

ヒョウジュは、イザヤが城に運び込まれたそれまでのことを、祖父母から直接聞くことができた。

「ねえ、ヒョウジュ……わたくしは間違っていたかしら？」

傷を負い、穢れに蝕まれたイザヤのことについて、祖母はそう訊いてきた。肖像画でしか祖父母のことを憶えていないヒョウジュだったが、両親から話はよく聞いていたので、祖父母の、先王夫妻のその落ち込んだ姿には、驚かせられた。

「なにをお間違いになられたと、思うのですか？」

「この国に、この世界に、連れて來たことよ」

「なぜ？」

「また……あの子を傷つけたわ」

後悔しているのだろうか。いや、迷っているのかもしれない。祖父母は、英雄になることを拒んで死んだ騎士を、義弟と呼んでいたのだ。優しく穏やかな人だったと聞く。国を護るために、祖父母を護るために、狩人であつた騎士は死ぬときまで狩人で在り続け、死してのちに騎士となつた人だ。英雄と呼ばれることはあるか、騎士となることも、その騎士は生前受け入れなかつたのだ。

祖父母が、自分たちがやつたことを迷うのも、わからなくはなかつた。

だが、決めつけてはいけないことがある。

「彼はそのときのことを……騎士であつたことを、憶えているのですか？」

「……憶えていないと思うわ

「でしたらおばあさま、勘違ひなさらないほうがよろしいかと思いま

ます

「勘違い？」

「彼はイザヤです。イザヨイさまではあります

彼は、イザヤは、かの騎士の魂を確かに持っているのかも知れない。けれども、今の彼は、イザヤだ。かの騎士ではない。だから、決めつけてはいけない。

イザヤはかの騎士、イザヨイではないのだから。

「彼を幸せにしたいと思うのなら、それだけで、よろしいのではありますか？」

後悔などしている場合ではない。なんのために連れ戻したのかを、忘れてはならない。

「想いを大切にしてくださいませ、おばあさま、おじいさま」

悔いる気持ちがあるなら、一度と悔いのことがないよう、努力するしかないのだ。

ヒョウジュは祖父母にそれを伝えると、席を離れた。

部屋を辞す際に、「ヒョウジュ」と呼ばれて振り返る。

「イザヨイ……いえ、イザヤを、頼めるかしら」

穢れのことだらうかと思いながら、ヒョウジュは頷く。ほっとしたような顔を見せた祖母と、そしてにこりと微笑んだ祖父に、ヒョウジュは最後に礼をして、その場を辞した。

その足で、イザヤがいる部屋に向かつ。初めは王宮の客室に運ばれたイザヤだが、翌日には祖父母が住まう離宮に移された。ヒョウ

ジユが住まつ離宮は、その隣にある。

本来なら、穢れの浄化が済めばイザヤのところへ行く必要はない。だが、穢れが入り込んだ傷の場所は胸だった。心の蔵に近い。様態が急変しないとも限らないので、ヒョウジユはほとんどの時間をイザヤの部屋で過ごしていた。

ちなみにこのことは祖父母しか知らず、両親や兄たちには知られていない。イザヤのことヒョウジユが動いたのは知っているが、初日だけのことだと思っている。いつもついて歩く侍女や近衛兵があまりいい顔をしない行為ではあるが、気になるのだから仕方ないと、諦めてもらっていた。

イザヤがいる部屋の前に来ると、シスイがちょうど出でてきたところだった。

「おう、姫さん。また来たか」

「ええ。わたしにできる」と、やりたいと思つから

「ん、お人形さんも卒業だな」

シスイは兄たちに剣を教えた師で、ヒョウジユも少しだけこのシスイに剣を教わったので顔馴染みだ。宰相ロク・シエンの弟なので、貴族ではあるのだが、彼は害獸を駆除する狩人で、貴族らしいところが一つもない変わった人だった。

「イザヤの熱な、もう少し続くらしい。田え覚めたら、もうだいじょうぶだと判断すればいいとさ」

「魔されていても?」

「起きる気があるんだ。起いすべきだろ」

「……そうね」

「じゃ、おれはカジユ村に戻る。なにかあつたら知らせてくれ」

「わかった。気をつけて」

大規模な害獣駆除が行われようとしているという村に戻るシスイを見送ると、ヒョウジュは扉を軽く叩いて、部屋に入る。

とたんに目に入る、イザヤの姿に、目を細めた。

そばに歩み寄り、寝台の端に腰かけると、床を搔くイザヤの手を握る。

熱に魘され、痛みに苦しみ、それから逃れようとするイザヤの姿は、とても痛々しい。

「だめよ。動かしてはだめ。今はおとなしくして」

穢れが入り込んだ胸の傷は、骨のおかげで深くはない。けれども場所が場所だけに、確実にイザヤを蝕んだ。痛みは長引くだろう。薬があつても、ヒョウジュの天恵があつても、イザヤの苦しみは終わらない。

「はな、せ……つ」

初めて聞いたイザヤの声は、苦しそうといつよりも、寂しそうで。

「落ち着きのない人……だめと言つていいだしよう
「いやだ……つ……はなせ、よ」

悶える腕に力はなく、必死になにかを求めているように、ヒョウジュには感じられた。

熱い息を吐くイザヤに水を飲ませ、もつと、とせがまれて微笑みながら水をさらに飲ませる。すると、薄く目が開かれて、焦げ茶色の瞳が彷徨つた。

「……だ、れ？」

ヒョウジコは身を屈める。

「ヒョウジコ」

「？ ひょ、じゅ？」

「ヒョウジコ。」ヒーリーのは内緒

「ひょ、ないしょ？」

「あら、いいわね。そう、わたしは、ひょ」

聞き取れなかつたのか、イザヤに「ひょ」と呼ばれて、そのくすぐつたさに微笑んだ。

そんなふうに呼ばれたことも、呼んでくれた人も、今までいなかつたから。

「ひょ……みえ、な……い」

「だいじょうぶ。今は熱があるだけ。熱が引いたら、見えるよ！」

なる

頬を撫でると、イザヤの苦しげな顔がいくらか和らぐ。男らしいところによつも中性的な容姿をした人だと、思った。

「ひょ……ひょ、くるしい」

「だいじょうぶ。少しの辛抱よ」

侍女を呼んで濡れた布を用意してもらい、額の汗を拭つてやる。すると眉間の皺が伸ばされ、ふつと、微笑えられた。

「ひょ……」

「ひょ」とした。

なんて顔をする人だろうと思つた。

そんな顔で、そんなふうに呼ばれたら、胸が苦しくなる。

「……なあに?」

「ありがと……ひよ

やんわりと、柔らかに微笑んだイザヤは、そのまま瞼を閉じて眠つた。

ヒュー・ジューの胸に、くすぐつたくも暖かい、焦がれるような熱が生れた、あのとき。

イザヤへ想いが傾き始めた、その出逢い。

この人のそばにいたいと、泣きたくなるような苦しそうを持つようになるまで、そう時間はからなかつた。

イザヤは穢やかな人だ。いつも仄かに笑って、仄かふわふわとしている。だから狩人だということが信じられないくらい、剣も似合わない。

けれども、イザヤは狩人で、片刃の双剣を自分の身体のじとく自由に操り、害獸を駆除する。

そんなイザヤが剣を握っていないときは、ふだん以上にほんわかと微笑んでいることが多かつた。

「ひいよ？」

珍しく暖かい日、どこにも行かず住んでいる邸の庭で、相棒の黒犬ギルと一緒に転寝しているイザヤを見つけたヒョウジュは、そつと歩み寄ってそばに座り、文字の読み書きを練習しているイザヤのための教材を作ろうと紙を広げた。

「起きていたの……？」

「ん……まだ、眠い」

「なら、眠つて。このままそばにいてもいい？」

「うん。いて」

「うん、ヒョウジュのほうに転がってきたイザヤは、どこか寝ぼけているようすで、ヒョウジュの膝を枕にしてきた。

「眠いのね、イザヤ」

「ひよ、ふわふわ……あつたかい」

ふにやつと微笑むイザヤのまゝが、ふわふわしている。まるでどこかに、ふつと消えてしまったかのようだ。

イザヤは、たまにこうしてヒョウジュに甘えてくることがある。けれども、それは眠そうにしているときだけで、それ以外はこんなふうに擦り寄つてくることはない。顔を真っ赤にして、ヒョウジュから逃げ回つていることのほうが多い。どうやら免疫が皆無らしく、といふのはシスイから聞いたが、なんの免疫かは教えていないので、ヒョウジュはイザヤのその正反対な行動の意味がよくわからなかつた。

ただ、嫌われているわけではないといふことだけは、まつきりとしている。ヒョウジュの外見を不気味がることも、恐れることもないイザヤは、ヒョウジュにやんわりと微笑むのだ。嘘に塗り固められた者たちの態度を見慣れているせいか、それがイザヤの心からの笑みであると、ヒョウジュは感じている。

「……触つてもいい？」

「うん……ひよは、あつたかいから」

瞼を閉じたイザヤの、黒というより鈍い灰色の髪をむりつと梳き、ゆつくりと頭を撫でる。見た感じは硬質そうなのに柔らかくて、すぐ寝癖がつく髪は、ヒョウジュの手を楽しませてくれる。

しばらくそつこつとイザヤの頭を撫でていると、寝そべっていた黒犬ギルが、唐突に身体を起こした。

「ギル？」

「おれも」

のそりと立つて、ゆつたりとヒョウジュに歩み寄つて背中に回つてきたギルは、イザヤに熱を奪われている分を『えてくれるかのよう』に、寄り添つてくれる。出かけてから帰つてくるとすぐにギルは洗われるので、ふよふよとなびく黒毛は柔らかく、暖かだ。

「ありがとう、ギル」

「ん」

イザヤもそうだが、ギルも、害獸を駆除して帰つてきて、また害獸を駆除するために出かけるまで、ほとんどこつして転寝している。たまに起きているかと思えばイザヤはヒョウジュから逃げ回り、しかしヒョウジュに頼まれたギルが捕まえてくる。剣の稽古をしているときは逃げない。眠気が勝つているときは今のよつに甘えてきて、ヒョウジュのそばから離れない。ヒョウジュを枕にする。

気が向けば、文字が書けないイザヤは、読み書きの勉強をした。気が向いたときにしか勉強しないせいで、イザヤは未だ自分の名前すらきちんと書けない。短時間なら人型にもなれる賢いギルのほうが、読み書きができた。

「……ひよ」

陽光に暖められた風を頬に感じたとき、ふつとイザヤの両目が開かれた。

「眠らないの？」
「誰か……来た」

来訪者を感じたらしい。ヒョウジュの背にいるギルも、僅かに身じろぎする。

「リツエツが帰ってきたのかしら……」

カク・リツエツは、イザヤの養父となつた人で、このリョクリョウ國の王、つまりヒョウジュの父を補佐する王佐だ。だからイザヤが帰つてくるこの邸はリツエツの家で、ヒョウジュがイザヤに逢うために訪れる場所だつた。

しかしながら、もつとも王のそばにいるリツエツが邸に帰つてくることは少なく、またこんな昼間に帰つてくることもない。なにかあつたのだろうかと、振り向いたとき。

「ヒョウジュ！」

大きな呼び声に、身が竦む。びくりと震えた身体は、素早く起きたイザヤに抱きしめられ、ギルに護られた。

「おま……ヒョウジュから離れる！」

イザヤにしがみつきながら見た、大きな声を上げた人物は、イザヤと出逢つてからは久しく逢つていなかつた兄たちだつた。その後ろでは、呆れた顔をしている王佐リツエツもいる。

「知り合い？」

「兄のアオヅキとナガクモよ」

「へえ……いたんだ」

そういえば逢つたことはなかつただろうか。まだどこか眠そうな顔をしたイザヤの体温が離れていくのを寂しく思いながら、しかし

握った腕は離さず、ヒョウジュは怒りの形相で歩んでくる次兄ナガクモと、困惑気味な顔をした長兄アオヅキを見やつた。

だが、ナガクモの視線も、アオヅキの視線も、ヒョウジュにはない。

「おまえ、なに者だ！　おれたちのヒョウジュになんてことしていやがる！」

「……眠い」

「ああつ？」

「ひよ、おれ、眠つてるから」

怒鳴っていたのはヒョウジュではなく、イザヤのほうだったのだが、イザヤはそれらをばつさりと切り捨てる、再びヒョウジュの膝を枕に寝転がる。

とんだ自由気儘なイザヤの態度を、もちろんナガクモが許すはずもない。

「人の話を聞け！」

「まあ落ち着け、ナガ」

「ふざけろ！　なんだ、この男はつ！」

イザヤを蹴のりとしたナガクモを、アオヅキがため息をつきながら押さえる。

ナガクモが激昂し、アオヅキが表現し難い顔つきをしている理由がなんとなくわかっているヒョウジュは、さてどうしたものかと考えながらも、周りを無視したイザヤの頭を撫でた。

「おいヒョウジュ！　おまえ当事者だぞ！」

そんなことを言われても、と思う。

「……考へてゐる最中です」

「うすればいいだらう。」

「ヒョウジュ、落ち着き過ぎだよ」

「そう言われても、と思つ。」

落ち着いているわけではない。かといって焦つてゐるわけでもないのだが、状況に困つてることとは確かだ。

「……どうしてここが、おわかりになりましたの？」

「リツエツに聞いた！」

それならヒョウジュが改めて説明する必要はないだらう。

怒つてゐるナガクモ、小難しい顔をしたアオヅキ、そっぽを向いて呆れてくるリツエツを流し見て、ヒョウジュは目を硬く瞑つたイザヤに視線を落とすとことわらやつくり頭を撫でた。

ヒョウジュがイザヤのところに通つてこることを、兄たちには知らせていない。とくに知らせる必要があるものでもない。祖父母からも、両親からも、好きにしていいと言われていることだ。ヒョウジュが思うように行動していくと、その自由を得たものだ。だからヒョウジュは、イザヤがいるときははずつとそのそばにしようと、心が感じるままここを訪れている。

「リツエツに聞いたのなら、もうよろしいでしょう？」「よくない！ なにを考えてこの男の許に通つているー！」

怒鳴るナガクモの声に、イザヤの眉がぴくりと動いた。ギルの耳

もピンと弾かれた。

「ああ、邪魔になってしまっている。

申し訳なく思いながら、ヒョウジュはイザヤの耳に手のひらを当てることで、それを護つた。

「どうしてそんなに、怒るのですか……以前はよく外に出ると、おっしゃつておられたではありますんか」

「それとこれとは別だ！」

「……ナガクモ兄さま、声をお控えください。イザヤが眠れません」

「起こせ！ そもそもおれは、その男に話があるんだ！」

「イザヤのことはもうじ存知でしょうに……」

祖父母が頼み、父が捜していた迷子。それがイザヤだ。城にいて、父や祖父母と直接関わりがある者なら、誰でもそれを知っている。イザヤがイザヨイという騎士の魂を宿していると、それを知っている者たちは少ないだろうが、イザヤの存在はべつに隠されているわけではないのだ。

「ヒョウジュ、彼がなに者か、おまえはちゃんと分かっているのかい？」

アオヅキにそう問われ、もちろんだと、ヒョウジュは頷く。

「本当に？ 本当に彼で、いいのかい？」

「なにをおっしゃりたいのですか、アオヅキ兄さま」

「おれはヒョウジュに幸せになつてもらいたいだけだよ。ナガと同じようにね。だが彼は、かりびと狩人だ。おれは心配だよ」

アオヅキが言いたいのは、イザヤが迷子だということのほうではなく、ヒョウジュがこうしてそばにいることの真意らしい。祖父母

から、その話を聞いたのだ。

「……わたしはイザヤと一緒にいます」

「その決意は固い？」

「はい」

まっすぐとアオヅキを見つめれば、アオヅキもまっすぐにヒョウジュを見つめ返してくる。

ふつと息をついたアオヅキは、押されていたナガクモを引っ張りながら踵を返した。

「ちょ、アオ！ おれはまだ奴に……っ」

「ナガ、あとにしよう。父上から話を聞いてからだ

「けど、ヒョウジュが……っ」

「だいじょうぶ。おれも認めたわけじゃない」

立ち止まり、ちらりと振り返ったアオヅキが、ヒョウジュの膝で眠るイザヤを睨む。

「おれは狩人が嫌いだ。認める」となんか、できないからね

「アオ……？」

「そういうことだからヒョウジュ、忘れないようにね」

意地悪気に笑ったアオヅキは、ナガクモをずるずると引っ張りながら、来た道を戻つていく。

その後ろ姿をぼんやりと見送りながら、ヒョウジュは、厄介な人を敵に回してしまったかもしれない、と思った。後悔はしないけれども。

「お邪魔して申し訳ありません、殿下」

「……いいのよ、リッシュ。それより、兄たちに会つて帰ってきたわけではないのでしょうか？ 用件はなにかしら？」

残ったリッシュは、律儀に礼をするとそばに歩み寄ってきて、背中を向かっているイザヤの肩をぽんと撫でた。

「仕事ですよ、イザヤ。詳細は紙に。書類にあります。田を通じて、明日、向かってください」

やはりそうか、ヒュウジュは肩を落とす。リッシュがこうして家に帰つてくるとき、その大抵はイザヤの仕事を携えているのだ。イザヤは返事をせず、またリッシュも返事を聞くことなくヒュウジュに頭を下げると立ち去つた。イザヤが身動きしたのは、リッシュの気配が完全に消えてからだ。

「行くの……？」

「まだ。もう少し眠る」

ぼそぼそと小さな声で、イザヤは擦り寄つてきながら答えてくれた。

「ひよ、眠れる薬ちょうだい」

「……また？」

「怖くて眠れない」

ヒュウジュの腹部にぴたりと額をくつつけたイザヤが、身体を丸める。

やめればいいのに、と思つた。

そんなに怖いなら、狩人なんてやめてしまえばいいのに。

「……用意しておくれ

「うん……ありがとう、ひよ」

ヒョウジュの膝で眠るイザヤは、けっして寝台の上では眠らない。狩人として片刃の双剣を握るようになつてから、イザヤが寝台で眠つている姿を見なくなつた。ヒョウジュが出逢つたあのとき以来、長椅子の上や庭先、屋根の上、木の上、ヒョウジュの膝で、イザヤは眠つている。

どうして、と訊いたことがある。

眠れない、とイザヤは言つた。だから眠れる薬をちょうどだい、と。イザヤは寝台では眠らない。それ以外の場所でも、転寝はしているけれどもなにかの気配を感じればすぐに目を覚ますし、ヒョウジュの膝でも深く眠ることはない。

安眠を得られないほど怖いなら、狩人なんてやめてしまえばいい。そう、幾度思つたことか。

けつときよく、「狩人だから」と微笑まれることだから、思つだけで言つたことはなく、頼まれた薬を用意してしまつ。

「ねえ、イザヤ」

「んん?」

わたしを連れて行つて。
とは、言えなくて。
けれども。

「帰つてきて」

イザヤの頭を抱いて、ヒョウジュはお願いする。

「帰ってきて、イザヤ」

「ひよ……」

「お願^いい」

ヒヨウジュは知^つてしまつた。

ひよ、と呼ばれることの嬉^{うれ}しかた。

ひよ、と呼ばれないことの悲^{くさ}しかた。

ひよ、と呼ぶ声のある喜びを。

ひよ、と呼ぶ声のない寂^{さび}しさを。

だから。

わたしをひとつにしないで、と。

思つよつになつてしまつた。

「ひよ。ひよ、顔上げて」

「……イザヤ」

「ひよ、来る?」

「え……?」

「おれと来る?」

ゆつくつヒヨウジュから離れたイザヤが、淡く微笑みながら小首を傾げる。

「おれと行^いうか、ひよ」

その言葉は、信じられないもので。

「いーの……?」

「うそ。まやまやしてると、邪魔^{あつだ}いだ」

「邪魔^{あつだ}?」

「あ、や、それは^いうかの話。とにかく、今回はおれと行^いうか、

「ひよ

行こう、トイザヤの手のひらが、ヒョウジュの頬をくすぐる。
行こう、と言つてもられたことが思いのほか嬉しくて、ヒョウジ
ユは目を瞬かせた。

「いいの？ 本当に？」

「いいよ。ただ、おれ馬には乗れねえから、歩くことになるナゾ」

そんなことはどうでもいい。イザヤが、連れて行く、と言つてくれたことが、重要なのだ。

「行こうか、ひよ

うそ、ヒョウジュは微笑みながら頷いた。

頬を朱に染めたイザヤが、ヒョウジコの手を引いて、田み始めたばかりの窓の下を歩く。吐く息は白く、握った手のひらは暖かい。

「疲れたら、言えよ、ひよ」

「ええ」

「寒くとも、言つただぞ」

「だいじゅうぶ」

「つらくなつたら、やつ言わないとダメだからな」

「平氣」

「帰りたくなつたら、ちゃんと言つて」

「イザヤが一緒なら、帰るわ」

ぴたりと歩が止まり、イザヤが振り向く。

「ほんと?」

「ほんと」

ぎゅっと手のひらを握ると、イザヤは微笑んだ。

「行いつか、ひよ」

くん、と弓つ張りされて、また歩き始める。

イザヤがヒョウジュを迎えたのは、早朝も早朝だった。夜も明けきらないうちに、とんとん、と露台の窓を叩いてヒョウジュを起したのだ。出かける準備をしていたヒョウジュは、そんなところから現われたイザヤに驚きはしたもの、本当に連れて行つてくれるらしいということに舞い上がり、あつといつまに支度を整えた。街に降りて暮らす日々が来るだろうといつのは幼い頃からわかつていたことだったので、支度には手間取らなかつたのが幸いだ。

あつといつまに支度を終わらせたヒョウジュに、イザヤが「急がなくていいのに」と苦笑し、手のひらを差し出した。迷わず手を述べて握つた。そうしたら引き寄せられて、「ちょっと待つてな」と言つたイザヤが自分の荷物を漁り、真つ白な耳当てを取り出すと、それをヒョウジュの頭にかぶせてきた。ふわっと感じたぬくもりに驚いたら、「贈りもの」と言つてイザヤは照れくさそうに笑つた。嬉しくて、ヒョウジュも笑つた。ありがとうと、お礼を言つた。

だから、握つてゐる手のひらも、耳も、夜明けの寒さを感じない。城を抜け出して、いつして寒い中をふたりきりで歩いていく。

「どこまで行くの？」

「キルナイつていう村。馬で半日、だつたかな？ 歩くと丸一日」

近いといつだ。だから一緒に連れて行つてくれるのだろう。

「これ、読んでくんね？ リツのやつ、おれ読めねえよつて言つてんのに、毎回いつやつて指示書寄こすんだよ」

そう言つて渡されたのは、リツヒツの字で書かれたイザヤへの書獸駆除依頼の紙だつた。簡単な文字ならからうじて読めるイザヤのために、大雑把な単語がいくつか並んでいる。

「これくらくなら読めるでしょう？」

「読めねえな」

「もう……教え甲斐のない人」

気が向いたときにしか勉強してくれないせいもあるが、こんなに簡略的に書かれた文字すら読めないなんて、教えているヒョウジュの技量が疑われる。

「キルナイ村つて、書いてあるんだろう?」

「ギルに読んでもらつたのね」

「うん。だつてギルのほうが読めるし」

教えても覚える気がないなら、いくら教えても無駄かもしねい。改めてそう思つたけれども、覚えて損はない。むしろ必要だ。

「お。ギル、上手い」とやつてくれたな
「なあに?」

あれ、とイザヤが前方を指差す。受け取つた紙を荷物にしまつてから、ヒョウジュはそちらを見た。

「行商?」

「そう。キルナイ村を通る商隊がねえか、ギルに搜してもらつてた。あつたらおれたちを乗せてつてくれるよに頼むことも」

田の前には、荷車を引く一頭の馬がいた。人型になつているギルと、荷車の持ち主らしい行商人夫妻もいる。

疲れたら言えとか、つらくなつたら言えとか、そう言つていたくせに、イザヤはヒョウジュの足を考へてくれていたようだ。イザヤのそばにギルがいないのを不思議に思つていたが、こういふことだつたわけだ。

「……足手まといね、わたし」

「え？ なんで？」

「だつて……」

ヒョウジュの足では、丸一日歩き続けることなどできない。それを申し訳なく思つたら、イザヤの手のひらがふつと、ヒョウジュの頬を撫でた。

「おれ、一つもああやつて、移動するべ？」

「……そうなの？」

「だつて馬に乗れねえもの」

「それは……」

イザヤは馬との相性が悪い。イザヤを見た馬は、それがどんな暴れ馬でも、じつと見つめて動かなくなつてしまつたのだ。どうやら馬にはイザヤに対する興味が強過ぎるということ、長年世話をしている厩舎長が言つていた。

だからイザヤは、馬に乗れない。その細い身体では操れないどうといふこともあるが、イザヤを見た馬が動かないのでは乗つても移動ができないのだ。

「面倒なときは、ギルが背中に乗せてくれるし……まあそういうことだから、気にしなくていいんだぞ？」

ペチペチ、と頬を軽く叩かれる。だいじょうぶだ、ヒョウジュは足手まといではない、と、イザヤは言つてくれている。

「わたし、頑張る」

「はは。そんな気張るなよ。ほり、行こうつ？」

手を引かれて、待つているギルと行商人夫妻の許へと急ぐ。

夫妻は気のいい人たちで、イザヤが挨拶をすると笑顔で返事をしてくれる。道中の護衛と交換に、乗せもらえることになった。

交渉が済んで、ギルが人型から黒犬の姿に戻ったときは夫妻も驚いていたが、魔だと説明すると珍しげにギルを撫でていた。

「人里で魔を見たのは初めてだなあ」

「え、ほかで見たことあんの？」

「一度だけ、ちらつとな。ああでも、灰色だったな。瞳が黒かった。魔じやないかもしれないなあ」

「毛が灰色で目が黒……まるでおまえの逆だな、ギル」

ギルは黒毛で、灰色の瞳の魔だ。

大抵は温厚な性格の魔は、ときには人助けもしてくれて、リヨクリヨウ国では貴重種として珍しい生きものだ。ただ、この大陸の半分以上の領土を持つ三大国の一つ、聖国とも呼ばれるヴァリアス帝国では魔の印象が悪い。リヨクリヨウ国は聖国の属国であるが、魔よりも害獸のほうに意識が向けられるため、貴重種として見られているのだ。

「黒いところがあれば、それは魔だ。ほとんどは毛の色で判断されるけど……でも灰色の魔で魔はいない」

「あれ、そうなの？」

「そいつはたぶん、記録者だ」

「記録者……なんだそれ」

「おれもよく知らない」

「知らねえのにわかんのかよ」

「そういう生きものがいるって、聞いたことあるだけ」「適当だなあ」

イザヤと黒犬のそんな話を聞きながら、行商人夫妻に促されて荷車に乗せてもうひとつ、奥さんのほうに柔らかい大きな枕を渡された。ぐらぐらと揺れる荷車に長く乗つていると、けつこう身体が疲れるらしいのだ。それを軽減させるためだといつ。

「ありがとう」

「いいのよ。こんなに可愛いお嬢さんと一緒になんだもの」

にこにこと微笑む奥さんは田那さんと回りじょとに御者印に乗り、荷馬車は動きだした。

がたがたと揺れる荷車を身体に感じながら、ふと横を見ればイザヤの横顔がある。ああ、本当に連れて行つてくれるのだと、今さらながら実感した。

「ひいよ？」

じつと見つめていたら、視線に気づいたイザヤが「ん？」と田を丸くして振り向いた。

「…………ありがとう、イザヤ」

「え、なにが？」

「連れて来てくれて」

「あー…………うん、まあ、半分は自分の都合なんだけど」

「都合?」

首を傾げると、イザヤが視線を彷徨わせて、赤くした頬を指先で搔く。

「ばあちゃんの教えで、これだつて思ったものには素直になれて、

「言われてんだよね」

「……おばあさま？」

「あ、ひょこひょこして本郷のばあひやさんだな。ええと、コキちゃん

だ

「イザヤにひとひてもおばあさまはおばあさまよ」

「うん。でも、血に繋がってねえし」

イザヤはこじとほ違う世界から、ヒョウジュの祖母ユキイエと祖父ツヅクモに、世界を渡る方法はそれ違つていたが、連れて来られたようなものだ。そちらの世界で、イザヤはヒョウジュの祖父母を「ばあちやん、じこちやん」と呼び、祖父母として慕つて育つていた。だが、ヒョウジュのように血縁にあるわけではないと聞いている。

「おれは、わ……コキちゃんとツクモさまに、助けられたんだ。そのときまでおれが生きてたといひは、生きてゐつて言えるといひじやなかつたから」

ふとイザヤが、過去を話してくれる。それは初めてのことだ。

「おれもよくわからんねえんだけど……コキちゃんとツクモさまに捨てられたときは、ガリガリのボロボロで、自分の状態すら理解できねえようなガキで、言葉もろくに喋れなくて……今思えば、コキちゃんもツクモさまもかなり大変だつただろうなあつて感じじるよ」

平和に生きていたわけではないだつて、とにかく、イザヤの様子を終始見ていれば感じるものがある。いつも仄かに笑んでいるから、どうすればこんなふうになれるのだろうと、不思議に思つていた。

「……どうして、そんなふうに、言えるの？」

「わかんねえから」

「なにが、わからないの？」

「なにが苦しくて、なにが悲しくて、なにがつらかったのか、……今でもおれ、わかんねえもの」

困ったように苦笑したイザヤに、嘘は見えなかつた。それは、本当にそれらがわからなこと、やつこいつことだ。

「ユキちゃんとツクモをまに出逢つまで、それが当たり前だつたら……それがおれつてこつガキだつたから、本当のところはよくわかんねえの」

おれ、ばかだから。

そう言つたイザヤは、笑つている。

ああだから彼は、笑うのか。

わからないことを、わかるつと思つても、どうしてともわからないから、笑つて誤魔化そうとしているのか。

「こんなおれだから、ユキちゃんは言つたと思つんだよね。これだつて思つたものには、素直になれて。じやないと後悔するからつて」

イザヤには常に素直であつて欲しい。祖父母はそう思つたのだろう。自分のことすらよくわからないうつな言動に出るイザヤだから、本能とも呼べるその直感を大事にして欲しいと、思つたに違ひない。ヒュウジュだつて、今の話を聞けばそう思つ。

「やつしたほうがっこ。後悔のなによつ」

「……うん」

「……」と笑んだイザヤが、ギュウッと手のひらを強く握られた。

「だからおれ、ひよを攫つてきた」

「……え？」

「昨日はやつぱつ、怖くて眠れなかつた。あんな思いをするへりこなら、こいつや……」

とん、ヒュウジュの肩に頭を乗せたイザヤが、両瞼を開じる。

「イザヤ……？」

「ひよは……あつたかい」

急に肩のその重みが増した。ずるずると、イザヤがヒュウジュのほうに倒れ込んでくる。

「イザヤ」

「ねむ……い……ひ、よ」

慌ててイザヤを支えて、両腕になんとか抱えて、いつものように膝を枕にしてみると、すぐにイザヤの寝息が聞こえてきた。話の途中だったのに、と思ったが、寝台では眠らないイザヤのことを考へると、じょめるのは苦笑だった。

「ギル、おいで」

少し離れたところで寝そべっているギルも近くに寄せて、ヒュウジュはイザヤの寝顔を眺める。

真つ赤になつて逃げ回つてゐる顔が、ただただ微笑んでゐる顔が、

転寝している顔しか見たことがない。

いつになつたらほかの顔を見させてくれるだろつ。

いつになつたらヒョウジュを、婚約者として見てくれるだりつ。

「あらあら、狩人さんは眠つてしまつたのかい？」

「……ええ

振り向いた行商人夫妻に、ヒョウジュは肩を竦めて笑つた。

「ふふ、お嬢さんは狩人さんに愛されてるねえ」

「え……？」

「だつてそうだろう？ そんな穏やかな顔で、狩人さんを眠らせてやれるんだから」

羨ましいねえ、と言つた奥さんに、ヒョウジュは幾度か瞬きをして、田線をイザヤに戻した。

寝台で眠らないイザヤ。

眠れる薬を欲しがるイザヤ。

ヒョウジュの膝で、寝息を立てるイザヤ。

嫌われているわけではないとわかつてはいるが、それなら、少しでも好かれていると、期待してもいいのだろうか。その愛を与えてくれようとしていると、思つてもいいのだろうか。

「イザヤ……わたし」

出逢つた頃よりも伸びたイザヤの髪を梳きながら、ヒョウジュは胸を高鳴らせた。

キルナイ村に着いたのは、夕刻に差しかかる時間だった。寂しさを感じるその時間にキルナイ村に入り、すぐ隣の街に行くという行商人夫妻にお礼を述べる。別れ際、無事に夫妻が隣街へ行けるよう、イザヤは途中までギルに護衛を頼んだ。

「夜は危ねえから、頼む」

「そんなことしてもらわなくていいよ、狩人さん」

「隣街は近いっていつても、それでも怖いから」

「……心配してくれるのかい」

「おれは狩人だから」

「そうかい……ありがとう、狩人さん」

ギルに護衛されることを了承した行商人夫妻を見送り、その姿が見えなくなつてから、イザヤはヒヨウジュの手を握つた。

「宿に行こうか」

「もう?」

「だつてヒヨウジュ、疲れただろ? おれはその……たっぷり眠らせてもらつたし」

「だいじょうぶよ」

「ん、でもな」

「だいじょうぶ」

足手まといにはなりたくない。その一心で握った手のひらを強く握り返したら、ふふ、とイザヤは笑った。

「強情なお姫さまだ

「今のわたしは、ただのひよ。姫じゃない」

「でもなあ……ここまで連れて来ておいてなんだけど、ひよに怖い思いはさせたくないねえから」

「だいじょうぶ」

「まいったな……シスイを連れてくればよかつた」

どうしよう、と言いながら歩き始めたイザヤに、その方向が宿屋でないことを祈りながら、ヒョウジュは引っ張られつつ歩く。

ここまで来て宿屋に置き去りにされるのは、いやだつた。足手まといにはなりたくないけれども、だからといってひとりで待たされるのも、いやなのだ。

俯いて抗議しながら、ヒョウジュはイザヤに引っ張られて歩く。

村はまだ農耕に賑わっていて、防寒対策が行われていた。これら季節は、寒い土地だからこそ実を生す果物や野菜の栽培が始まる。王都が近いクルナイ村は、需要が多い野菜を主に生産しているが、狩人の情報交換の詰所としても機能しているので、宿屋や酒場は充実していた。

「おう、イーサじやねえか

と、イザヤを見かけて声をかけてくる狩人は、多くなかつた。その狩人は大柄で、シスイのような体躯でこちらを圧迫する。華奢なイザヤがさらに華奢に見えた。

「相変わらず小せえなあ、イーサは

「うるせえな。そつちは相変わらず無駄にでけえくせに」「はん。ガキのてめえには羨ましいだろ。つて、おー、生意氣に女連れかよ」

イザヤに声をかけた狩人が、ヒョウジュに気づいてずいと顔を近づけてくる。すぐにイザヤが壁となってくれたが、驚いた。

「おいおい、おめえ、こつや……姫さんじやねえか?」

どきつとした。真っ白な耳当では、ヒョウジュの珍しい白い髪を隠してくれているが、それでも足りなくて外套をすっぽりと頭から被っている。白く見えるものが耳当であると、そう誤魔化されくれなかつた狩人に、自分の正体が知られたことに、ヒョウジュは少し焦つた。

今さらだが、ヒョウジュは王女だ。城を抜け出して、イザヤと一緒にいる。そのことをどう説明すればいいのだろうと、頭がぐるぐるとした。

しかし、イザヤの態度は変わらない。

「それがどうした」

「どうやつて攫つてきたんだよ?」

「あんたには関係ねえだろ。それより、今ここにあんた以外の狩人はいんのか?」

「つれねえなあ」

「いんのか、いねえのか、どつちだよ」

引かないイザヤに、折れたのは狩人だつた。

「……ふたり、いるぜ。詰所で田撃された害獣の検討会だ」「あんたを合わせると二、か……多いな」

「目撃されたのは一体じゃねえからな」「てえと？」

「一体だ。あとから四体。小せえのはそのさうに倍だ」

「ふうん……やけに集中してんな」

「二十年くれえ前にも、集中した時期がある。今じゃ珍しくもねえけどな」

ふむ、トイザヤが考え素ぶりを見せたのは、一瞬だけだった。

「…………わかった。目撲された場所は？」

「北の外れだが……おい、おめえまさか、またひとりでやる気がよ？」

「ひとりじやねえよ。ギルがいる」

「魔犬ギルギディッシュがおめえに懷いてるからって……つうか、姫さん攫つてきといて駆除なんかしてられんのかよ」

「あんたには関係ねえことだ。行こう、ひよ」

「あ、おい、イーサ…………っ」

行こう、トイザヤは、狩人が呼び止めるのも無視して、ヒョウジュを引っ張つて再び歩き始める。方向から、それが北であり、害獣が目撲された場所に向かおうとしているのがわかる。

ヒョウジュは、握られている手のひらに、視線を落とした。震えている。

「…………ひとりで行かなければいいのに」

「…………うん」

「ほかの狩人と協力してもいいのに」

「…………うん」

「ギルを待つてもいいのに」

「…………うん」

イザヤは前を向いたまま、ヒョウジュを見ない。けれども鮮明に伝わってくる、手の震え。

怖がりなくせに、どうしてこの人は、狩人なのだろう。

「……ひよ

「なあに？」

「怖い」

立ち止まつたイザヤはヒョウジュを振り向き、叫びているもつて方の手も握ると、じつん、と額を叩わせてきた。

「怖いけど……ひよを、護る」

「……逃げてもいいのよ」

「おれは狩人だ。逃げない。だから……」

ふと呑ませた額を離したイザヤは、とんとヒョウジュの肩に、そのまま落ちてくる。

「そばにいて」

小さく呟かれた言葉に、ヒョウジュは微笑む。首を傾かせて、寄り添つた。

「いるわ。わたしをおいていかないで」

「うん……うん、ひよ」

珍しいこともある。眠くなさそうなのに、甘えてくるイザヤが、子どもみたいに見えた。けれども、逃げないでじつして甘えられて、ヒョウジュは嬉しかった。

「いつもひとりなの？」

「うん。ギルがいるから」

「ギルだけ？」

「うん。ギルだけ」

「どうして？」

「ギルは仕方ないんだ。おれから離れようとしたしねえし、置いて行こうにもついて来る。隠れても見つかるから。だからギルだけ」

イザヤは、ひとりで害獣を駆除する。片刃の双剣と、黒犬ギルだけを相棒に、ひとりで害獣に立ち向かう。

ふつうなら、狩人はあまり単独で動かない。移動中であつた場合は仕方ないとしても、それでもないかぎり、狩人はそのとき集まつた人数で組分けし、単独ではなく複数で害獣駆除に当たるものだ。だから狩人の詰所が、各地に点在している。その地に永住している狩人もいるので、彼らは情報を交換しながら、状況に応じた戦法と戦略で、害獣を駆除していた。

そんな中で、イザヤはいつもひとりだ。

「どうして、ひとり？」

「誰かが一緒つていうのは……怖いから

「……なら、わたしはどうなるの？」

「ひよは剣を握らねえし、握らせる気もねえから、いいの」

「わたしも戦える」

「ん。でも、握らせねえよ？」

にか、と微笑むイザヤから、本気が伝わってくる。ヒョウジュはシスイから剣を習っていたので握れるし扱えるのだが、どうやら荷物に隠れている小剣を使う機会は「えられそうにない。

「戦えるのに……」

「だめ」

「でも」

「だめ。はい、この話は終わり！ ひよ、ちょっとここで待つな。この辺り見てくるから」

話から逃げるよう、イザヤは先を走っていく。役に立たないだろうというのは百も承知でついてきてはいたが、真っ向から禁止されるとは思つていなかつただけに、重いため息がこぼれた。

近くに大きな岩を見つけてそれに腰かけ、丘の上にひとり立つて周りを見渡すイザヤを眺めた。

「イーサの間合いに入ると、斬られるぞ」

「えつ？」

急な声に吃驚した。振り返るといつのもにがギルが、戻つて来ていた。

「行商のおふたりはどうしたの？」

「街の入口近くまでおやんと送つてきただよ」

「そう……お疲れさま、ギル」

しつかりとその役目を果たしてしてくれたギルを労つて、柔らかい頭を撫でた。くすぐったそうにしたギルは、けれどもすぐにその灰色の双眸を、イザヤの後ろ姿に移した。

「イーサがひとりで戦うのは、害獸と一緒に人間まで斬りそうになるからだ」

「どこから話を聞いていたのか、ギルはそう言つた。

「イーサは強いけど弱い。だから、ひとりで戦うんだ」

「……ギルは？」

「おれは人間じゃない。だから一緒に戦える。イーサにおれは斬れない」

「人だけ、なの？」

「イーサは人間が嫌いだから」

「え……？」

あんなにここに微笑んでいるのに、と思う。だがしかし、そういうえば先ほどの狩人に對して、狩人は親しげであつたのに、イザヤはそれを拒絶するような言い方をしていたし、一線を置いているような態度だつた。

「どうして、人が……」

「前は違つた」

「前？」

「眠る前。あの頃は逆に、人間が好きだつた。どんな人間でも、イーサは好きだつた。けど……起きてからのイーサは、人間が嫌いになつてた」

ギルが言つ眠る前というのは、きっと、イザヨイだつた頃のイザヤのことだろう。確かに話に聞けば、イザヨイという騎士もイザヤがそうであるように穏やかで笑みを絶やさず、そして人間を好いていた。

やはりイザヤとイザヨイは、同じ魂でも、違う人間なのだ。

「なにが、あつたのかしら……」

「今のイーサには憎しみがある」

「……人に？」

「恨みもある。だから一緒に戦えないんだ。斬り殺しかねないから瞬間的に、ゾッとした。イザヤにそんなことができるわけもない」と、そう思っていたのに、思えなかつた。あの笑顔の下には、きっと隠されたものはあるのだと、気づいてしまつた。

過去をちらりと話してくれたとき、イザヤがなんと言つていたか。苦しみも悲しみも、つらさも、イザヤはわからないと言つていたではないか。今でもわからないと、そう苦笑していたではないか。もし、わからないのではなく、わかりたくないのなら。

「ギル……イザヤは」

「そうだよ。イーサは無意識に、人間を殺そうとする」

「……そんな」

イザヤはわかりたくないのだ。苦しみも悲しみも、つらさも、わかれたくないのだ。わかつてしまつたらどうなるか、人間を無意識に殺そうとする自分を自覚しているから、抑えつけているのかもしれない。

「イーサは弱い……強いけど、弱いんだ。前のイーサもそつだつたけど……誰もそれをわかつてくれない」

ショボンと耳を垂れさせたギルを、ヒヨウジコロを歯みしめながら、そつと撫でた。

「なにがイザヤを、そうさせてしまったの……」

「わからない……起きたときのイーサは、もうそうなつてたから」

真っ直ぐと前を見据え、ヒョウジュに背を向けるイザヤを、ヒョウジュはギルと一緒に長いこと見つめた。

イザヤは強い。

それは狩人としての強さで、人間としての強さではないだろう。なにかが彼を、そう歪めたのだ。

「なにがあつたの…… イザヤ」

その肩には、なにを、背負わされているのだか。怖いと、そう言つたのは、害獸に対する怯えではなく、人間に対する怯えだといつなら。

その笑顔の下で、どれだけ、泣いているのだろう。わたしのところで、泣いてくれたらいいのに。

「ひよ、宿に行こう。やっぱ移動してるわ、害獣！」

丘を走り下りてきたから、ヤガヤガ三ツのドリルは房でぐる。

「ソニーから少し先にいるっぽい。おれたちの移動はまた明日に……、どうした?」

ヒョウジュの顔色に気づいたイザヤだったが、ヒョウジュはなんでもないと、首を左右に振った。

「わたしのことは、気にしないで。それより、移動を明日にしてしまっていいの？ 今からでも追いかけたほうが」

「ひよに野宿させたくねえもの」

「野宿、楽しそう。だって、イザヤと一緒にだもの」

「うー……でも、なあ」

「わたしはだいじょうぶ。イザヤが一緒なら」

「うーん、と唸ったイザヤは、やはりすぐにでも害獸を追いかけたいのだろう。街や村に近い場所で目撲されただけに、いつ襲撃があるのかと人々は怯えて過ごさなければならぬからだ。

「やっぱり、駄目だ。そもそも陽も落ちるし」

「わたしのことは気に」

「気にしてるわけじゃねえよ。害獸がここを移動してるつてことは、村への危険度も下がってるつてことだ。詰所にはおれ以外の狩人もいるし、そんなに焦らなくともだいじょうぶだから」

「でも……」

一緒にいたくて、ついて来てしまったけれども、やはり足手まいになるだけだ。それが悔しい。

「じゃあ、ひよ、ギルに乗つて」

「ギルに？」

「陽が落ちるまでも少し時間がある。ギルがもう駄目だつて言つまで、行けるところまで行つてみよ」

イザヤのその妥協案は、ヒョウジュにはとても嬉しい提案だった。

「乗れるかしら」

「でかいから。おれでも乗れるし」

ギルは大きい。大型の犬の三倍はある。

「いいぞ。乗れ、ひよ」

少し不安だつたが、ギルが乗れと背中を差し出してくれるの、ヒュウジュは恐る恐る腰かけた。

「首に手を回して。わむとしがみついたら、あとは田へ黙つてな」

言われたとおりに、ギルのふわふわした首に腕を回して、しがみつぐ。顔を埋めて目を閉じた。

「行ぐぞ。ギル、ひよを落としたら、ただじゃおかないからな」

とたん、ぐんと後に引っ張られる感覚がし、慌ててヒュウジュはさらりと強くギルにしがみついた。

「ひや、あ……っ」

「ひよ、喋るな。口を閉じろ」

「で、もつ」

「いっから口を閉じろ。歯を食こしばれ。風を身体に感じろ」

ギルの助言に、できるだけ沿つよつて努力はしてみるが、なかなか難しい。そもそも、走るだなんて思つてもいなかつたので、突然のことに心臓がばくばくし、手が震える。落ちないようこしがみつくのが精いっぱいだった。

05 : 握った手のひらは震えて。3 (前書き)

* 残酷描写がちらりとあります。ご注意ください。

ギルの背中に乗せられての移動は、思った以上に快適だった。ギルが揺れないように走ってくれたおかげもある。

だから。

それを見つけることができた。

「小物だ……六、七、八……九体だな」

茂みに身を潜めて、イザヤが、その数を確認する。両手はすでに、右側の腰に下がられた双剣にあつた。

「あれが……」

害獸。

小物だ、トイザヤは言つたけれども、それでも体躯はギルほどある、焼け爛れた赤黒い獸だ。歩くそばから黒い霧のようなものが発生し、辺りを暗く、じめじめした空氣にしている。黒い霧は、あれは穢れだらう。穢れが視認できるほど、そこは穢れに満ちている。

ヒヨウジュは、害獸を見るのは、これが初めてだ。あんな生きものだったなんて、知らなかつた。もっと、自分が知つてゐる形から離れたものだと思っていた。

「だいじょうぶか、ひよ」

心配げな顔をしたイザヤに、ヒョウジュはギルにしがみつきながら「うへへ」と頷いた。

「すぐに駆除する。穢れはつらにだらうけど、少しの辛抱な

ふつと笑んだイザヤに、頬を撫でられた。けれども、すぐにそのぬくもりは去つてしまつ。

「ギル、ひよを頼む」

「数が多い。イーサひとつは……」

「だいじょうぶだ。おまえは、ひよを」

「……わかつた」

「行つてくるよ、ひよ」

「……」と笑つたイザヤが、身を翻して茂みから飛び出す。

思わず追いかけそうになつて、しかしそうに、人型を取つたギルに捕まつた。

「ひよは、見るな」

そう言つて、ギルはヒョウジュに、イザヤと同じ顔を見せる。

「けど……っ」

「見るな。イーサならだいじょうぶだ」

せう血つい、ギルはヒョウジュの視界を、胸に抱きしめて隠してしまつ。

とたんに聞こえた害獣の唸るような叫び声に、身体がびくんと震えた。

「ギル、ギル、イザヤを助けて。イザヤを」

ギヤああ、と聞こえる悲鳴が、イザヤのものになつたら、どうしよう。

その不安に苛まれ、ヒョウジュは震えながらギルにしがみつき、自分の愚かさを恥じた。

イザヤの危険をこんな間近で感じたくない。走れば血くどいといふ。イザヤが、こんな世界にいるだなんて信じられない。いつも仄かに笑つてゐるイザヤから、笑みが消えてしまつ。

いやだ。

イザヤがいなくなるのは、いやだ。

ひよ、と呼んでくれる人が、いなくなつてしまふ。

ひよ、と呼んで微笑んでくれる人が、いなくなつてしまつ。いやだ。

「いや……、イザヤ、イザヤ」

聞こえ続ける害獣の呻き声、ザシコつと剣の斬れる音、ぼたぼたと滴るなにかの音、草花が踏み倒され荒らされる音、イザヤの僅かな息遣い。

怖いと思った。

イザヤの恐怖が、恐ろしかつた。

「消え失せろ、害獸どもっ！」

怒鳴つたイザヤの声に、ヒョウジュはハッと顔を上げる。イザヤと同じ顔をしたギルも、イザヤのほうを見ていた。

「おれを引っ張り込むんじゃねえ！」

その、声が。
なぜだろう。
悲しく聞こえた。
寂しく聞こえた。
泣いているように、感じた。

「イザヤ……」

なんでそんな声を上げているの。
なにがそんなに、苦しいの。

ヒョウジュの頭は、害獸に立ち向かうイザヤへと、流れる。
その瞬間に、最後の一體であつたらしい害獸が、イザヤの双剣で
真つ二つにされた。噴き出すとこりよりも破裂したように、害獸の
血らしき黒いものが飛び散る。

駆除はあつというまだつた。

それが、イザヨイと同じように「イーサ」と渾名されるイザヤの、
狩人としての実力なのだろう。

肩で息をしたイザヤは天を仰いでいた。

手の甲から、血を滴らせてくる。

ヒョウジュは茫然と、それを見つめた。

「ああくせ、疲れた……まじ痛え……しつた、最悪」

ぼそぼそと天に向かって言つながら、幾度も深呼吸して、漸くイザヤはヒョウジュを振り向く。

その一瞬だけ、ゾッとした。

瞳の、曇りに。

まるで穢れに侵されたかのように、虚ろな双眸に。

愕然として見つめていると、イザヤのほうが幾度か瞬きをする。

「ひこよ……？」

ぱちぱちと瞬かせているうちに、少しずつ、焦げ茶色の双眸に光りが戻つてくる。ヒョウジュは急いで駆け寄り、その頬を撫でた。

「もう、だいじょうぶ。怖いものは消えたわ」

そう言つたのは、言わなければならなことと思つたからだつた。

言つたとたんにイザヤの雰囲気は和らぎ、いつものふわふわとした笑みを浮かべてくれる。

「ひよ、無事？」

「ええ」

「怪我、ない？」

「イザヤのほうが怪我をしてくるわ」

「ん？ ああ……そういえば痛えな

まるで今気づいたかのように手の甲の傷を見たイザヤからは、先ほどまで感じた虚ろさが消えていた。

「あつちに小川があつたわ。傷を洗い流して、手当てしましょう」「やうだな。ギル、ここは頼んだぞ」「

ああ、というギルの適当な返事を聞いてから、ヒョウジュはイザヤを引っ張つて小川があつたほうへと移動しつつ、双剣を鞘に戻してもらつ。

あの虚ろな眼はなんだつたのだろうと、疑問は残つているが、なにはともあれ怪我の治療が先だ。

しかし、小川を見つけて傷を洗い流したあと、イザヤの顔つきが徐々に強張つていく。布で傷口を拭いながら、手のひらに天恵の力を付加させて穢れも一緒に祓つていたら、イザヤの手が震え始めた。

「ひよ……

まるで信じられないものでも見たかのような声を出すイザヤに、ヒョウジュはそつと己れの手を重ね、傷口に薬を塗る。包帯を綺麗に巻いてから、震えるイザヤの手を両手で包んだ。

「怖かつた……？」

ヒョウジュは怖かつた。
イザヤが、傷つくことが。

「じめん……おれ、なさけねえ

かつこわるい、と声を絞り出し、包んでいた手を逆に取られて、引っ張られた。ヒョウジュの両手を胸に抱きながら、イザヤは身を丸める。

「ひよ、「じめん……」じめん、触らせへ、ひよ」

俯いて、ヒョウジュの両手を抱きしめるイザヤの表情は、ヒョウジュからは見えない。もう触れているのに、そのことをなぜ謝るのかわからなくて、ヒョウジュは自分から身を寄せた。

「ひよ……」
「だいじょうぶ」

だいじょうぶだから、と繰り返し囁くと、イザヤが顔を上げる。泣きそうな顔をしていた。

「……ひよ、抱きしめたい」

そんな確認なんか要らないのに。

そう思いながら肩の力を抜けば、すぐに両手は解放され、代わりに強く暖かい抱擁を受けた。言葉もなく、ただただ抱きしめてくるイザヤに、ヒョウジュは寄り添つ。

いつからだろ？、と思った。

いつからわたしは、この人を、好いているのだろう。

なんで好きになつたかはわからない。ただ、気づくとそばにいたいと思うようになつっていた。心が感じるまますべてを受け入れたら、好きという感情が生まれていた。

だからヒョウジュは、イザヤを婚約者に、と打診してきた祖父母

の言葉を素直に受け入れた。

結婚なんてするつもりは今でもないけれども、イザヤとなり、家族になりたいと思つた。

イザヤの家族になりたいと思つた。

イザヤがそれを、どう受け止めているかは、わからぬけれども。

けれども、こうして抱きしめてくれる。

ヒョウジュに怖いと言つてくれる。

ヒョウジュのそばで眠つてくれる。

好かれていると、思つてもいいだらうか。

それならとも、嬉しいのだけれども。

「じめん、ひよ。やつぱり、怖い思いをせらるだけだつた」

「じめん、と、もう幾度も謝られてる。怖い思いをしてるのにお互いさまなのに、それは申し訳なくて、ヒョウジュは歯を噛んだ。

「足手まといになつて、『じめんなれ』」

「え？」

「でも、一緒にいたいの。イザヤを傷つかせたくないの」

「……ひよ」

「『じめんなれ』」

我儘だとわかつてゐる。けれども、好きな人のそばにいたいと想う気持ちは、どうしようもできない。怖い思いをして、それだけは変わらない。

まだ手を震わせてくるイザヤを、ヒョウジュが、安心させてやりたかった。

「……なあ、ひよ、おれ」

と、イザヤがなにか言いかけたとき、じにからか馬の蹄の音が聞こえてきた。

言葉を途切れさせたイザヤはそいつを見て、いややうな顔をしたかと思つたら、ため息をついた。

「一回も一緒にさせてくんねえのかよ……ソツの嘘つき」

そつこぼれた言葉の意味がわからず、イザヤが見てくるまつに視線を向ける。

竜旗だ。

「……国軍?」

そんな、ヒョウジュは落胆する。

城を抜け出して、まだ一日も経っていないのに。

「見つかっちゃった」

はは、とイザヤは苦笑し、ヒョウジュを促して立ち上がる。その様子から、国軍が現わることとは予測していたようだつた。

「イザヤ……」

「行けたら、カジユ村のタカ爺つて、おれが少し世話をなつた爺さんのところまで行こうと思つたんだけど、もつ無理っぽいな」

「……わかつていたの?」

「コソに、言つておいたから」

やはりイザヤは、ヒョウジュが強制的に城へ連れ戻されたことを、想定していたようだ。

「いやよ。わたし、いや。イザヤと一緒にいる」

「うん。害獣を駆除したら、帰るから」

「いや。一緒にいる」

連れて来てくれたのに、一緒にさせてくれたのに、ここまでそばにいたせてくれたのに、今さら帰るなんていやだ。

「なあ、ひよ。おれが帰つてくるの、待つてくんねえかな」

「いやよ……一緒にいたい」

「ひよ」

「いや……」

いやだ、と幾度も首を左右に振り、近づいてくる国軍の音を拒絶する。けれども、否定し続けてもいられない。

「ヒョウジュー！」

遠くから、兄ナガクモの声がする。ナガクモを大将に、国軍は明確な目的で城から来たのだ。

「兄さまが来るなんて……いやよ、イザヤっ」

「おれもやだなあ……でも、まあ仕方ねえや」

「仕方なくないつ」

「ひよ」

ふふ、とイザヤは笑んだ。その手は未だ震え、ヒョウジュが手の

ひらを握つても震え続けているのに、いつもより仄かに微笑む。

「帰つたら、また、な」

「え……？」

なにを、と思つまもなく、イザヤの顔が近づいて。

「ひよは、おれのだから」

近づいたと思ったイザヤの顔が、ゆっくり離れていく。

「幾度でも、攫ひよ」

唇を掠め取られると、そう吸ついたときも、イザヤのぬくもりすら離れていく。

「……、イザヤ……」

呼んだときにはもう、その後ろ姿は手の届かないところにあって、茂みから現われたギルの背に乗つてしまつともう、あつとこつまにその姿は見えなくなつてしまつた。

「イザヤ……」

果然と、ヒヨウジユはイザヤの顔を口ずれた。

口づけされた。

してくれた。

行つてしまつたイザヤの、直前までの仄かな微笑みを思い出しつつ、

触れられた唇を両手で覆い隠して蹲る。

嬉しかつた。

泣きたいくらい、嬉しかつた。

しかもイザヤは、ヒョウジュを「おれのだから」と、「幾度でも、攫つよ」と言つてくれていた。

一緒にいたい、一緒に行きたい、そう思つ心と、イザヤが残していつた言動に葛藤を起こしながら、ヒョウジュは到着したナガクモに心配されて肩を抱かれるまで、詰まる胸の想いに身を焦がした。

ほんの少しだけイザヤと一緒に連れて歩いてもらつて、一日。翌日には夢だったかのように城へ戻ったヒョウジュは、イザヤが言い残していくことを胸にその帰りをひたすら待つている。

あれから一日が過ぎた今でも、イザヤは帰らない。昨日から降り続いている雨が、イザヤを凍えさせていなければいいけれども、と少し不安になる。雪が降り出してもおかしくない季節なだけに、この時期の雨は暖かいほうだが、それでも身体には悪い寒さを伴っているものだ。ちゃんとどこかで休んでいて欲しい。

不安を胸に、リツエツが「帰つてきましたよ」と伝えにきてくれるのを、今か今かと待つていたときだった。

「入るよ、ヒョウジュ」

先触れもなく兄たちが部屋を訪れるのはいつものことだが、扉も叩かず入られたのは初めてだった。

「……アオヅキ兄さま」

イザヤの帰宅かと浮足立つていたヒョウジュは、アオヅキの入室に肩を落とす。

「ちよつと話、いいかな」

「ええ……エーヴル、エーヴル」

アオヅキはひとりではなく、アオヅキを補佐する文官と武官のふたり連れていた。ヒョウジュは彼らにも適度に休むよう促し、侍女に頼んでアオヅキのお茶を用意してもらつ。

用意されたお茶を一口、ゆっくりと飲んでから、アオヅキは口を開いた。

「聖國のことは聞いたかい」

「ヴァリアス帝国、ですか？」

「そう」

「……皇帝陛下が、病に倒れたとは、お聞きしましたが」

少し前、祖父母が帰国してまもなくだつただろうか。このリョクリョウ国、聖國とも呼ばれているヴァリアス帝国の皇帝が、病に倒れたという報が届いた。公にはされていないそれは、属国にはすぐ知らせられている。唯一の皇太子がその玉座を継ぐだつと言われていた。

「昨日、崩御されたそうだ」

ああやはり。神の国、主上國の皇帝も、病には勝てない。いや、勝つて欲しくもないというのが、リョウクリョウ国的心情だ。

「……害獸の被害は、減るでしょうか」

「それを期待している。ヴェナート陛下の治世が二十年弱も続いたことだしね。減ってくれないと困る」

アオヅキは忌々しげにため息をついた。

なぜ兄がこんな態度なのか、本来なら主上國に対し不敬であるこ

とだが、ヒョウジュは注意しない。

理由は聖国の天恵、そしてその影響を受ける害獣の存在だ。

リヨクリヨウ国にヒョウジュのような天恵者がいるように、聖国にはさらに多くの天恵者がいて、皇族には特有の天恵があった。聖国の皇族特有の天恵は、この大陸の均衡を保ち國土を安定させる力であり、また世界の調和を支えるものである。

その聖国の天恵が、ヴァリアス帝国皇帝ヴェナートの治世になつたとたん、歪められた。狂いが生じ、大陸の均衡が乱れ始め、世界の調和が崩れ始めた。

害獣という世界の濁みや塵と戦い続けるリヨクリヨウ国は、聖国の影響と余波に直撃され、害獣被害が増えたのだ。

「彼がいつたいなにをしたのか、今もそれはわからないままだが……これでわが国も平穀を取り戻せるなら、彼の死を心から嬉しく思うよ」

「……そう、ですね」

なぜ聖国の天恵が歪められたのか、狂いが生じたのか、その原因はわかつていらない。ヴェナートはそれらを否定していたし、歪みや狂いが生じているという証拠が聖国では明らかにされず、リヨクリヨウ国では害獣被害の増加、他の属国では自然災害の多発や賊の増加であつたために、どの国も聖国だけを責めることが憚れたのだ。

ただ、リヨクリヨウ国は害獣という世界の濁みや塵と戦い続けているゆえに、ひび割れた調和の影響を受けるのは当然で、それらを司る聖国に責任があると追及することができる。できずにいるのは、リヨクリヨウ国という最北端の小国が、ヴァリアス帝国という世界三大国の一つに、戦を仕掛けるなど無謀の極みであるからだった。

「皇太子殿下が賢帝となつてくれることを、祈るよ」

歪みや狂いを生じさせた皇帝ヴォナーートが崩御した、変革期と呼べるだるつ今、リヨクリヨウ国は慎重に次代皇帝を見定める必要がある。

「及ばずながらわたしも、祈らせていただきます」

「そうだね……ヒヨウジュも、王族のひとりだ」

「はい」

「だからね、ヒヨウジュ」

「……はい？」

ふとアオヅキは、ヒヨウジュをじっと見据えてくる。ヒヨウジュと同じ空色の双眸が、細められたとき。

「嫁いでもらうよ

「……え？」

「ヴァリアス帝国次代皇帝となる、皇太子サライ・ヴァディーダ殿下に、嫁いでもらうよ、ヒヨウジュ」

瞬間的に、ヒヨウジュは耳を疑い、兄の言葉を疑つ。

「……なにを、おっしゃつて」

「おまえを嫁がせる、と言つたんだよ」

なぜ、ヒヨウジュは瞠目した。

「わ……わたしには、婚約者が

「あの狩人との話なら、初めから存在しないよ。誓約書もなにもない、ただの口約束だ。そもそもおばあさまの……王太后さまの独断であつて、陛下は認めてもない」

「そんな……」

田の前が、真つ暗になつた。真つ田になつた。アオヅキの言つて
いることを、理解したくなかった。

「明日、陛下がヴァリアス皇帝の戴冠式に出席すべく、國を出る。
ヒョウジュは陛下と一緒に、ヴァリアス皇帝の妃候補として、聖國
に行つてもらつよ」

「そ……そんな急につ」

「急なことではないよ。おれとナガクモは、ずっとそれがいいと陛
下に進言していたし、陛下も悪くない話だと理解を示してくれてい
た」

それにして、ヒョウジュは拳を握る。

「今までのよつたこと、一言もおつしゃらなかつたではありますま
んかつ」

「まあね。だつて可愛いヒョウジュのことだ。政略結婚なんてさせ
たくないけど、幸いにもヴァリアス皇帝となるサライ殿下は賢帝を
期待できる人柄でね。前に一度お逢いしたとき、彼ならヒョウジュ
を幸せにしてくれるかもしれないと思つたんだ」

「ですが、わたしは……っ」

「ヒョウジュ、おまえは、王族なんだよ」

グッと、言葉に詰まつた。

確かにヒョウジュは、王族の端くれだ。國のために在らねばなら
ない。たとえ外見で不気味がられよつとも、恥み嫌われよつとも、
そんなものは王族という言葉の前には無意味だ。國を一歩出れば、
ヒョウジュの外見は田立ちもしないのである。世界を捲せばじこ
でもあるのだ。

弊害は、じこもない。

「いやです、わたし……いやつ」

「ヒョウジュ」

「いやよつ」

心の裡で、イザヤを呼ぶ。そばにいて、わたしをここから連れ去つてと、呼ぶ。

「わたし、ひとりでいいもの……イザヤがいるからいいもの……嫁がない。どこにも行かない……イザヤと一緒にいるの。イザヤがいいの」

心の叫びを吐露すれば、アオヅキにはため息をつかれた。

「……いつからそんなに、我儘になつたのかな」

イザヤと出逢つてからだ。イザヤと出逢つて、ヒョウジュは我儘を覚えた。イザヤのそばにいたいから、イザヤの家族になりたいから、ヒョウジュは我儘になつた。

「いや……いやよ、兄さま……どうして」

「おれは狩人が嫌いだからね」

「だからって」

「あの狩人におまえを嫁がせるくらいなら、おまえに恨まれたほうがマシだよ」

睨むよつて、冷えた空色の双眸に射られる。

「なんで……どうして、兄さま……っ」

「あの狩人はおまえに天恵を使わせる。おまえが背負つた天恵を。

おれは、それが許せない

アオヅキが授かったわけではないのに、なにが許せないのか、ヒョウジュにはわからない。

「わたしの、勝手よ……自ら満足よ。なにがいけないの」

「おまえを否定させる天恵なんか、あの狩人に使う必要はない」

その瞬間、ヒョウジュは、兄の言葉に息を詰まらせた。

好きにはなれない、けれども嫌いにもなれない白い髪。この髪のせいだ、ヒョウジュは不気味がられ、怖がられ、嫌われた。色を失くした者だと、忌避されてきた。

アオヅキは、ヒョウジュの心を、悲しんでくれていたのだ。

だから、害獣のいない国へと、天恵を使わずに済むところへと、逃がそうとしている。外見のことでとやかく言わることのない世界へと、送り出さうとしている。

「兄さま……」

「いいかい、ヒョウジュ。もう一度と、その天恵は使うな

強くそう言いつと、アオヅキは座つていた椅子から立ち、離れていく。

「兄さま、わたし……」

「ヒョウジュ、おまえは王女だ。陛下に、国に、従つ必要がある」

最後通告のように言い放つと、アオヅキは振り返りも立ち止まりもせず、連れきていた文官と武官を促し、部屋を出て行った。

ぱたん、と扉が閉められてまもなく、ヒョウジュは両手で顔を覆

い隠して身を丸める。

「イザヤ……イザヤ、イザヤ……っ」

嫁ぎたくない。イザヤ以外の人と、家族になりたいなんて思わない。イザヤがいい。イザヤのそばで、笑つていい。ああ、こんなにもわたしは、イザヤが好きだ。こんなにもイザヤが恋しい。

「わ、わた、し……っ」

あなたと生きたい。
あなたと死にたい。
あなたと、生きていきたい。
それがわたしの願いで、わたしの素直な心。

ぼろぼろとこぼれ落ちる涙をヒョウジュは止めるひともできず、声を上げずに泣き続けた。

07 : 広がる空は壁をつぶす（前書き）

ギル視点です。

ハッと、イザヤが顔を上げた。その急性さに、珍しくギルは驚いて、飛び跳ねる。

「な、なんだよ、どうした、イーサ」

あまりにも急だったせいで、それでも獸としての誇りが少し傷つけられた気がして、ギルは思わず睨むようにイザヤを見つめてしまう。ギルのその様子など気にもせず、といつか見もせず、イザヤは一点を見据えて動かない。

「イ、イーサ？」

イザヤが俊敏さを見せるのは、害獣と対峙しているときだけだ。それ以外はぼんやりとしていたり、なにを考えているのかひたすら微笑んでいたりするため、反射神経を疑いたくなる。それだけに、急性に動いて、とたんに硬直したイザヤのそれは、ギルには意味不明だった。

「ひょ……が

「ひょ？ ひょなら城だろ」

ヒョウジュはイザヤの好い人だ、という認識がギルにはある。それは間違いない。イザヤはヒョウジュに惚れていて、どうしようも

ないくらいだ。見ていればわかる。ヒョウジュの前で、とたんに情けなるのだ。ヒョウジュの前では情けなるイザヤの姿は、見ていて楽しいし、面白い。眠る前、イザヨイという名だった頃もそういう姿は見ることができたが、報われることがなかつた。

だからギルは、今がとても楽しくて面白い。イザヤヒョウジュが互いに想い合つてゐるから、なおさらだ。

そのヒョウジュを城から連れ出して、害獣駆除につき合わせたのは三日くらい前になる。遭遇した害獣に思つた以上の時間がかかつたせいで、イザヤは連れて行きたかった場所にヒョウジュと行くことができず、ヒョウジュは城に帰つてしまつた。

残念だ、トイザヤは肩を落としていたが、漸く復活してきたところで、つい数刻前に害獣の一団を駆除した。まあヒョウジュのところに帰るぞ、となつて、足止めをくらつてゐるところである。

イザヤがしくじつた。

眠る前のときに比べるとやはり剣の腕が落ちてゐるために、イザヤはよく傷を作る。あちこち傷だらけだ。とくに脇腹と腕の傷が多い。治りきらないなにうちから傷を作るせいで、いつでも身体は包帯に巻かれている。

数刻前に駆除した害獣から受けた傷は、やはり脇腹と腕だ。痛いくせに痩せ我慢してくれて、少し前に気づいたばかりである。ふらつて倒れたから気づいた。血の匂いがするなどは思つてはいたが、黒い服で見た感じがわかり難かつた。ここでも獸としての誇りを傷つけられたギルである。

なので、荷物から薬と包帯を取り出して治療していの最中に、ギルは一度めの、獸としての誇りを傷つけられた。

「あ、わ、ちょ、イーサ、動くな。血が止まつてないんだぞ」

硬直を解いたイザヤが唐突に立ち上がつた。止血したばかりの傷

がそのせいで開き、血が滲んで包帯が汚れる。

「おこ、イーサ」

「ひよ……」

「だから、ひよは城だ。どうしたんだ、イーサ」

「ひよが……ひよ、ひよ?」

ふらふらと歩き出したイザヤが、ヒョウジュを呼んで彷徨つ。そろそろ熱を出し始めて頭が危なくなってきたのかと、ギルはため息をつきながら治療の道具を片づけ、汚れた服に火をくべて燃やしてしまつと、新しい上着を持つてイザヤを追いかける。

「風邪引くぞ、イーサ。服くらい着ろ」

「ひいよ? ひいよ……ひいよ?」

「ひよは城なのこ……ああ、そつちは城じやない。城はあつちだ、イーサ」

ヒョウジュを探し求めて歩くイザヤは、立ち止まつてくれそうもない。仕方ないので、ギルは人型を維持したまま、歩きながらイザヤに服を着せ、先ほどまでいた場所に戻つて荷物を持つと、火の後始末をしてからイザヤを追いかけた。

「ひいよ……?」

「そつちは城じやないんだけど……どこに行くんだ、イーサ」

ヒョウジュなら城にいる、と言つてゐるのを聞かず、イザヤはどんどん城とは反対方向へと進んでいく。

このまま歩き続けると、夜がくる。夜は審獣の動きが活発化し、危険も多い。どこか村か街に身を寄せなくてはならない。

だが、イザヤは村にも街にも向かわない。

「「」の道……道というか方向……聖國？」

極端だが、聖國がある方向へ、イザヤは歩いている。中継地点はいくつあつただろと考へながら、とつあえずギルはイザヤが進む方向へついて行く。

さすがに、一時間もイザヤがヒョウジュを呼びながら歩く姿を見続けると、ヒョウジュがそちらに近づく気がしてきた。

「おれ、負けた……犬なのに」

イザヤの本能に負けた気がして、悲しくなつた。いや、もともとイザヤの本能は卓越している。眠りから目覚めて剣を握るようになつた今も、それは変わらない。ギルが害獸の気配に気づくと、イザヤも一緒に気づいているくらいだ。

「イーサ、わかつたから。そっちにひよがいるんだな？　もうわかつたから、少し休め。身体、つらいだろ」

前を歩くイザヤの肩を掴んで、漸く立ち止まる。こつそ氣絶させて近くの街にでも行こうと、ギルは手刀をかまえた。

しかし。

「ギル」

「うおっ……なんだ、正氣だったのか」

てっきり熱にやられて本能が際立つているのかと思ったが、いきなり振り向いたイザヤの双眸は曇つていなかつた。だが、様子がおかしかつた。

「ひよが国にいねえ」

「……は？」

「いねえんだ……どこにも」

「……城じやない、のか」

穢れをヒョウジュに祓つてもらつていいせいが、ヒョウジュがどこにいてもイザヤはなんとなくその居場所が感じられるらしい。国にいない、ということは、城に帰つていらないということなのか。いや、そんなはずはない。害獣の駆除を終えたとき、イザヤは「帰るか」と言つたのだ。イザヤが今帰る場所は、ヒョウジュのいるところでの、リョクリョウ国王都である。怪我の治療で立ち止まる前まで、確かに王都へ向かつていた。ヒョウジュは城に帰つていたはずだ。

「国を出たのか、ひよは」

「ああ……なんでだ？」

「おれが知るか。けど、ひよは王女だから……そういう関係でなにか、あるんじゃないのか？」

「待つてろつて言つた」

「王女にそれがきくのか？」

「ひよなら待つてくれる」

「……それなら、なにか事情があつて、国を出たんだろうな」

「事情？」

「おれは知らないぞ」

人間のやつていることなど、ギルには到底理解できない。なにか困つていれば助けてはやるが、国政だの国土だの、獸で魔であるギルには関係のないものだ。

「……まあやんに話を行く

へりつと、イザヤは進行方向を変えた。

「行くつて、今からか？ もう夜だぞ」

「歩き通せば明日の夜には城に着く」

「もうだけど……その怪我じゃ無理だ。休まないと」

「時間がない」

唐突に、イザヤは走り出す。慌てギルはそれを追いかけたが、イザヤは怪我人だ。走ってもギルは簡単に追いつく。無茶だ、と思つたとおり、走り出しつづけにイザヤは肩で息をして、速度が落ちた。

「まひ、無理だろ？ 少し休むくひい、いいじゃないか

「いやだ……」

「イーサ

「いやだ！」

なぜこんなに焦つているのだろう。

ヒョウジュが国にいなくとも、彼女はもともと王女だ。ギルは知らないが、なにかいいろいろなものをヒョウジュは背負つていて。他国に赴く用事があつてもおかしくはない。そういう事情があつて國を出ただけのことだらう、イザヤが焦る意味がわからなかつた。

「もう無理だ、イーサ。また血が滲んできてる。手当てしない」と

ギルはイザヤの前に回り込んでその走りを止めようとするが、いやだとイザヤは突つ撥ねでがむしゃらに前へと進もうとする。

「ひよが……ひよがいない……いやだ……ひよが」

ああもう、なんて惚れ方だ。こんなに真っ直ぐ惚れていながら、どうしてそれを口にしてやらないのか不思議だ。照れて逃げ回つていないで、確実に捕まえておけばいいのに、なんだか情けない。

仕方ないなあと、ギルはため息をついた。

「イーサ、運んでやるから、ちょっと休め。おれが運んだほうが早い」

ギルは獣だ。魔という生きものだ。天恵を授かつた魔の力は、人間の比ではない。イザヤひとりくらい、背負つて夜の間に城へ行くことは簡単なことだ。

それに、滲んだ血の匂いが気になる。それまで確かに治癒力が上回つていて気にならなかつたのに、やけに匂いが鼻を突く。いやな感じがしてたまらない。

だから、ギルは再びイザヤの前に回り込むと、今度こそ手刀をかまえてイザヤの後ろ首に衝撃を当えた。

「てめ、ギル……つ」

「ちゃんと連れてつてやるから」

走つている勢いのままイザヤを背負い、それまでの速度以上に宙へと舞い上がる。背負つたイザヤは、その怪我もあって、もうぐつたりとして氣絶していた。

できるだけ揺らさないよう、とは心がけるが、あれだけ焦つていたイザヤを考えれば、ここは急いだほうがいいだろう。

ギルはひたすら走る。体力的に疲れるることはまず滅多にないので、

小休止すら挟まず城へと走り続けた。

息を切らすことなく、イザヤを背負つて王都へと帰つたのは、空が白み始めた時刻だった。

アウレニア大陸最北端のリヨクリヨウ国から、中央の聖国まで、どんなに足の速い馬を使っても一旬はかかる。だが、四駆の車という機械を使えば、半旬で行くことが可能だ。

聖国の属国であるリヨクリヨウ国は、その技術を授かることもできるゆえに、旧型でも車という機械を手に入れている。ただ、聖国では貴族でも車は貴重で、そう頻繁に使われるものではない。最北端のリヨクリヨウ国では聖国以上に車は貴重であるし、年中雪に覆われているような国では車よりも馬が重宝される。王族でなければ車を使う機会などないようなものだ。

滅多に使用されない車が王族を乗せて国を出たのは、雪が降り始める少し前、聖国の領土に入り皇都ヴァンリに到着した頃には、リヨクリヨウ国の大雪は白くなりつつあった。

「帰路では車を使えぬか」

「状況にもよります。どちらにせよ長居はできないでしょ」「が」「そうだな。害獣被害のこともある。聖国に長居はできません」

宰相ロク・シエンと、父である国王ツキヒトの言葉を横に聞きながら、ヒヨウジュはぼんやりと窓の向こうを見ていた。

華やかで美しく、活気ある城下町を見たのは昨夜のことと、止まることなく聖国の皇城入りをしたのは夜更けのことだ。これがイザヤと一緒に旅であったなら、どれだけ楽しかったことだろう。今は見るものすべてが色褪せていくように、心が躍らない。

眺めるなんて気持ちすら起きず、ただ見ていろだけしかできない自分が、悲しかつた。

「ヒョウジュ？」

呼ぶ声が、イザヤではない。

「……はい、父上さま」

振り向いたヒョウジュの前には、心配そうな顔をした父王がいる。そんな顔をするくらいなら、ヒョウジュに強引なことをしなければよかつたのだと、今さらだが思った。

「具合でも悪いのか」

「いいえ」

「では気分が？」

「いいえ」

父王の顔が歪み、いつのうひどくヒョウジュを心配する。

「やはり気が乗らぬか……」

そうやせでいるのは父王だ。兄王子だ。

しかし言ったところで、ヒョウジュに過保護な父王が、今回のことをなかつたことに対するはずもない。ヒョウジュが聖国の皇帝に嫁ぐというのは、それほど大きな意味がある。ヒョウジュひとりの判断で、父王が決めたことを覆すのは難しい。父王が決めたことは、国民の総意であるのだ。国を背負う王族の端くれでも、ヒョウジュにそれを無視することはできない。

今日はこれから、皇帝となる聖国の皇太子との謁見がある。そこで初めてヒョウジュは皇帝の妃候補として顔を合わせることになり、また挨拶をすることになる。

気が乗らないどころか、重い。帰りたくて仕方ない。イザヤに逢いたくてたまらない。

イザヤはもう帰つてきていることだらう。もしかすると、また害獣駆除の依頼で出かけているかもしれない。ヒョウジュが国に、イザヤが帰つてくる場所にいないことを、彼はどう受け止めるだらう。イザヤに逢いたい。

イザヤを想うと、胸が痛い。

父王や兄王子を恨みそうになる心を抑えるのが、今はやつとだ。

はあ、とため息をつくと、父王がびくつとする。ヒョウジュの機嫌を損なわせたくないという気持ちが、ありありと伝わってくる。もつ無駄なことなのに、ヒョウジュが緩く首を左右に振つたとき、その時間が来たことを宰相が告げた。

「では行くか……ヒョウジュ」

「くくりと頷いて、父王に差し出された手を取る。しずしずと歩いて、皇太子が待つてこよこの部屋まで行つた。

「静かだな」

「……そうですね」

戴冠式を目前に控えているといひ、皇城内はとても静かで、それなのに先帝が崩御したといひ悲しみが感じられない。喪に服しているふつでもない。むしろ静謐な空気によつて新しい風が送り込まれ、その時代が動き出すべくして準備を整えているようだつた。

「ここの先に、皇太子殿下がおられます」

案内をしてくれていた文官が足を止めた場所は、謁見が行われる場所とは思い難かったが、喪も明けきらいうちに戴冠式が開かれることを考えれば、華やかであるべき戴冠式が質素かつ簡素になってしまうのもわかる。そんな、静かな場所だった。

「……人払いがされているのか？」

静かさに眉をひそめた父王の言葉に、文官が顔を上げる。若い文官は問い合わせず、どうぞ、と扉を開けてしまった。促されでは、中に入らざるを得ない。

部屋に入ると、まず目に付いたのはその部屋の明るさ、そして清浄さだった。ヒョウジュが吃驚して息を詰めるといつくらい、柔らかな空気が漂っている。

そして、謁見の場とは思えないその部屋には、先に来ていた人物が、窓辺に置いた長椅子に腰かけていた。

淡い金の髪、碧い瞳、均衡が取れているのはその容姿だけでなく体躯もで、しかし随分と線が細い青年が、こちらに気づいてにこりと微笑んだ。

「よくおいでくださいました、リヨクリヨウ国王」

その声を聞いた瞬間、僅かだがヒョウジュは、イザヤが重なった。なぜ、と思うまもなく身体が反射的に礼儀を取る。

この人が皇太子、サライ・ヴァーディーダ・ヴァリアス。

父王に、兄王子に、嫁ぐように言われた人。

父皇を失くし、若き皇帝となる人。

リヨクリヨウ国を含め多くの属国を従える、主上国の次代皇帝。

そんな人が、なぜイザヤと同じような声をしているのだろう。声の質が似ているのではない。声から知れる感情のようなものが、似ている。イザヤに逢いたいあまりに、耳が狂い始めたのだろうか。

父王が儀式的な挨拶を済ませる間も、当たり障りのない会話をしている間も、ヒョウジュは顔を上げることなく声の復讐をして、ぐるぐると考えていた。

ג עפּוֹתָהָן, עפּוֹתָהָן?

- 10 -

「そろそろ暇を願うか……いかかした?」

いえ……なげてもあらめぐり

このままここに終わったのだが、ところへ、ララウジュにはあ
りつけられなかった。

「リョクリョウ王、もう少しだけ、よいだろうか
「ああ、かまわぬが……姫は下がらせてもよいのか?
「ええ。ただ姫にも一言、お伝えしたいことが
「姫に?」

わたしになんどうつ、ヒョウジュが顔を上げたとき、それは二度めの拝顔だつたわけだが、視線が合つた青年はやはり微笑んでいた。

「案のう」ではない
「え……？」
「それだけだ」

なんのことか、さっぱりだ。だが、それ以上の言葉はないようで、

怪訝に思いながらもヒョウジュはその場を辞す許しを得て、父王を残して部屋を出た。廊下に控えて待つてくれていた侍女と、滞在している部屋まで戻る。

青年、皇帝となる皇太子の言葉は、その道中ずっと考えていたが、やはり答えは見つからなかつた。

「姫さま?」

「……なんだつたのかしら」

「はい?」

「不思議なお方だわ」

「……失礼ですが、皇太子のことですか?」

ええ、と頷いて、部屋に入るとすぐ長椅子に腰かけた。

「とても空気が澄んでいたの……驚いた。聖国は、やはり聖国と呼ばれるだけのことがあるのね」

あの皇太子が聖国の育んだ皇帝なら、心配されるリョクワの國の害獣被害は減るかもしない。歪み狂つた聖国の大恵も、修繕されるのではないだろうか。

父王や兄王子たちの気苦労も、きっと救われる。

「姫さまにそれだけのことを言わせるのなら……わざと皇帝になられますね」

「私の言葉はそれほど重くないわ」

「ですが、姫さまのお言葉ですもの」

ここと微笑む侍女に、ヒョウジュは苦笑する。

自分はどこまでも王女なのかと思うと、それは悲しいことだったけれども、侍女を始めとした祖国の者たちの笑顔は、なによりも得

難い喜びだ。

祖国のためにも、ヒョウジュは聖国に輿入れしなければならないだろう。民を護り、国を背負う立場にあるヒョウジュにしか、それはできない。

それは、わかっているけれども。

「ねえ、アビ」

「はい？」

「わたしね……」

イザヤと一緒にになりたいのよ、と言いかけて、やめた。

いつもそばにいてくれる侍女も、護つてくれている近衛も、ヒョウジュがイザヤのところへ行くことをあまりよく思っていない。たぶんそれは、兄王子の気持ちと同じように、イザヤが狩人だからだろう。狩人の寿命は長くない。いつも死と隣り合わせだ。そんな狩人と一緒になるよりも、大国の妃に收まつたほうがいくらか幸せだ。ヒョウジュの場合はとくに、天恵を使わずに穏やかな生活を得られる可能性がある。

けれども、ヒョウジュは思つ。

どんなに平和でも、天恵を使わずに平穏にいられても、心が傷つかないということはない。

そこがたとえどんな場所でも、心に傷を負わないで済むなんてことはない。

それならヒョウジュは、イザヤに、傷つけられたい。イザヤの傷を、受け入れたい。

「……」めんなさい、なんでもないわ。お茶をいただける?」

「？　はい、少々お待ちください」

ねえ、イザヤ。ヒョウジュは心で呼びかける。

ねえイザヤ、わたし、あなたのところに行きたい。国とか、民とか、自分の責任を放棄しても、あなたのところに行きたいと思つてしまつ。今の立場から逃げてしまいたいと思つてしまつ。きっとあなたは、許してはくれないことだらうけれど。

「ねえ、イザヤ……わたし、あなたが好きよ」

窓から見上げた青い空は、自分の瞳と同じ色。空は素直な色を艶やかに広がらせているのに、自分は、嘘をついている。

イザヤを待つていてると言つたのに、待つていられなかつた。

イザヤと一緒にになりたいのに、ほかの人のところへ嫁ごうとしている。

イザヤに、嘘つき、と言われるのを怖がる自分は、なんて自分勝手で卑怯なのだろう。

「でも……でもね、わたし、あなたが好きなのよ」

誰かに恋をすることが、こんなにも胸を焦がすことだつたなんて、知らなかつた。

その苦しみを教えてくれたイザヤに、ヒョウジュは感謝する。

あなたを好きになつて、よかつた。

だからイザヤ、と心で呼びかけたとき、侍女がお茶を用意して運んできてくれた。

「ありがとう、アビ」

「いいえ。聖國でも美味しいと有名のお茶を」用意しました

「そう。ありがとう」

「……、姫さま？」

にこりと侍女に笑いかけて、ヒョウジュは心を押し隠した。

08 : ぬかるぬまをつゝ。3 (後書き)

* 一句……一ヶ用くらいだと想ひて貰うと嬉しきです。
本当に10日間のことですが(

09 : 広がる空は壁をつべ 4 (前書き)

時間を少し遡り、ギル視点です。

空を仰いだイザヤが、叫ぶ。

嘘つき、と。

その叫び声は大きくはなく、むしろ小さな悲鳴だ。

嘘つき、嘘つき、嘘つき、嘘つき、と。

幾度も繰り返された言葉は、次第に風に流れ消えていく。
誰かに向かつて叫んでいるというよりも、なにか別のものに向かつて叫んでいたように、ギルには感じた。

「魔犬ギルギティツを相手に、本氣でやるつとは思わない。ギルギティツには恩がある。手は出さない。その温情に報いろ、狩人」
突きつけられた刃など、今のイザヤには無意味だ。話も聞いていない。

いや、聞いていられない。

ヒョウジュといつ、愛する娘を奪われたイザヤが、平静でいられるわけもないのだ。

「……おまえたちは、またイーサを、利用するだけ利用して、眠らせるんだな」

ギルは、イザヤからヒョウジュを奪った王子を見据え、小さく息をつく。

イザヤの心をわかつてくれないのは、二十年前も今も、なににつ
変わらないことらしいとわかると、ただただ悲しい。

「ギル、違うのよー」

そう声を張り上げたのは、王太后ユキイエ。ヒョウジュと曰の前
の王太子の祖母であり、イザヤを異世界で育て、連れてきた初老の婦
人。

「なにが違うんだ、ユキ。二十年前も今も、人間はイーサをわかつ
てくれないじゃないか」

あんなに言ったのに、と思う。

言わなければわからないこともあるんだよ、と教えられたから、
だから言い続けてきたのに、やはり誰もわからうとしてくれないで
はないか。

イザヤは、イザヨイと呼ばれていた時代も、強くて弱い人間だっ
た。イザヨイのときにはユキイエがそれをわかつてくれた。イザヤ
である今は、ヒョウジュがそれをわかつてくれていた。

それなのに、と思う。

「……ひどいよ、ユキ」

なぜ裏切るのだ。

「イーサは、ユキが好きで……ひよを好きになつたのに

イザヨイだつた頃は、ユキイエに恋慕していた。今のイザヤがヒ
ョウジュに向けているそれよりも淡いものではあつたが、恋い慕つ

ていた。歳の差なんて関係ない。身分なんて関係ない。優しさと愛を与えてくれた人を、ただただ好いた。ただただ、愛した。だから国を護り、民を護り、その命を削つて戦い続け、最期にはひとりで眠つたのだ。

神に願い祈り、その身に授かつた天恵を差し出してまでも眠りから目覚めさせ、異世界でイザヤを育て、この世界に連れて戻したのは、なんの意味があつたのだろう。

「なあユキ、なにが望みだ？　なにがしたいんだ？　イーサをどうしたいんだ？」

「……わたくしはイザヤを幸せにしたいだけよ」「じゃあなんで……イーサからひよを奪つたんだ」

知つていただろうに。

イザヤの反応は素直だ。隠しようもないくらい、素直だ。ヒョウジュに一日惚れして、気づくとどうしようもないくらい惚れていって、彼女のために国を護ると決意したイザヤのその姿は、誰が見てもわかるほど素直な反応だつたはずだ。

「ヒョウジュは王女だ。たとえその狩人が、イザヨイの魂を持つていようが、ヒョウジュとは比べものにもならない」

「アオヅキ！」

「王太后さま、今は、時代が違うのですよ」

「今のわが国があるのは、イザヨイの功績があつてのことよ。イザヨイがいなければ、わが国は滅んでいたわ」

「イザヨイのその功績は認めます。ですが、その狩人は魂を持つているというだけのこと。今はイザヤという、ただの狩人に過ぎません。リツエツが後見人であるうと、狩人は狩人。貴族でもなんでもない」

王子の言葉は、イザヤを想つユキイエの心を両断し、自身も握つた剣を光らせる。

ギルは再び、ため息をついた。

二十年前にも、こんな光景を見た気がする。また同じことが繰り返されるのかと思うと、もうこの国を見限つてもいいのではないかと自棄を起こしそうだ。

イザヤを見れば、空を仰いだまま動きもせず、腹部からの出血も放置されたままだ。来てくれたのがユキイエだけであれば、今頃は治療も終わっているはずだったのに、王子が来たせいでこれだ。立つたまま気絶しているのではないだろうかと、そう勘違いを起こすくらい、イザヤは立ちぬくして空を仰いでいる。その横顔は伸びた髪に隠されて見えない。

「……イーサ」

もう、行こう。ここにいたって、ヒョウジュには逢えない。突きつけられた刃は王子のものだけではなく、城の兵士のものだつてある。ギルがいることでその剣がイザヤを刺すことはないだろうが、それでも、その剣が為す意味は変わらない。

動かないイザヤの肩を、ぽんと叩いたときだ。

「……ははつ」

小さく、イザヤが笑い声を上げた。

「イーサ……？」

「ギル、戻れ」

「……なに？」

「黒犬に、戻れ」

人型を維持したままだつたギルは、イザヤのその言葉に首を傾げつつ、とりあえず言われたとおり黒犬の姿に戻る。持つていた荷物はその反動で地に転がつた。

ふらりと、イザヤが動く。

「おまえらの嘘に、おれがつき合つ必要はねえんだよな」

そう言つて、にやりを笑つた顔を、王子に向けた。その口調と態度に、兵士たちが警戒して剣を構え直したが、イザヤは動じない。王子は不機嫌そうに顔を歪めた。

「さあ……」

「おれ、バカだからさ。そういうの、けつこいつ簡単に信じるわけ。でもバカだからって、なにも考えてねえわけじやねえの。面倒だから考えねえつてことはあるけど」

「……なにが言いたい」

「ひよはおまえらの人形じやねえ」

顔つきが変わつた。ぎらりと、イザヤは王子を睨みつけた。

「ひよは、おれがもう」

そう言つと、地に転がつていた荷物を蹴り、王子の視界を塞ぐ。意図を感じ取つてギルは瞬間的にイザヤに駆け寄り、その重みを確認するとすぐ、空へと高く跳躍した。

「イザヤ！」

「つ追え！ 追つて捕獲しろ！ 城から……国から出すな！」

「コキイヒの呼ぶ声と、王子の命令している声が下から聞こえる。だがそれらはすぐに、聞こえなくなつた。

「ギル、おれ少し休む。できるだけ遠くまで移動してくれ」

「……だいじょうぶか?」

「怪我は大したことねえよ。痛えけど。それより心のほうが、もつと痛えし」

「……そつだな」

城の屋根伝いに跳躍を繰り返し、城壁の上で一旦止まると、イザヤを背負い直すために再び人型を取る。獣の姿であればイザヤが望む以上の速度でここを離れることはできるが、怪我人のイザヤの痩せ我慢もそろそろ限界だ。眠るというよりも気絶に近い状態になるであろうから、支えなければならぬ。

「ひよからもらつた薬、なくなつちまつたな……」

「拾つてくるか?」

「いや、いい。あつてもたぶん眠れねえから」

「……ひよ、聖国にいるからな」

「今はとつあえず眠れそうだけどな」

ぐすくすと笑つたイザヤは、まるでどいかの螺子が緩んだか、外れてしまつたかのようだ。タガが外れた、とも言つのかもしれない。

「適当にだらだらしてゐから、とにかくここを離れてくれ

「わかつた」

イザヤを背負い、ギルは再び跳躍する。ぐつたりと体重をかけてくるイザヤは、自分で自分を支える気すらない、というかできずに、

短い呼吸を繰り返す。

とにかくここを離れて、どこかで身体を休める必要があるだろ？
荷物も手放してしまったことだし、それらも新しく調達しなければ
ならない。

「ギル……」

「ん？」

「おれ……ひよが好きだ」

「そんなの知ってる」

「べもなく言つと、背中のイザヤは笑つた。

「帰つてきたら、言つつもりだつた。そこで、つき合つてつて、言

おうと思つたんだ」

「つき合つ？ 結婚じゃないのか？」

「結婚の前に、おつき合つてものがあるだろ」

「……おれ大だし」

人間の事情は、獣のギルには理解できない。そもそも、子孫を残
そうという気も起きないギルには、好きだなあと思つだけでそれ以
上のことがないために、よくわからぬ。

「ギルにもいいやつが現われてくれたらいいなあ

「おれにはイーサとひよがいる。それでいい

「おれ、おまえの子ども、見てみたいんだけど

「……おれ、魔だし」

「魔つて、子孫残さねえの？」

「さあ？ われは欲しいとか思わないだけ

「ふうん……」

背中の重みが、少し増す。完全に力が抜けてきたのだらう。
だいじょうぶか、と訊くと、まだ平気だ、と返事がくる。

「聖国には、どれくらいで行ける?」

「人間の足だと、一旬はかかるな。馬を使えば一旬か……そのくらいだな」

「おまえの足だと?」

「たぶん、一旬はかかるない。休みなく移動すれば半旬くらいで行けると思つけど」

「十日くらいか」

「もう少しかかる。イーサを乗せて移動したら、確實に半旬はかかる」

「……ひよに追いつけるかな」

「追いつかなくても、攫えればいいだろ。」の前みたいに

「はは……そうだな」

力なく笑ったイザヤの熱い吐息が、後ろ首を擦る。」のままでは本当に危ういかもしれないと、ギルはイザヤを支える腕に力を入れ直し、跳躍する足にも踏ん張りを利かせた。

「ギル……」

「ん」

「ギル……つ」

「……ん」

「ひよに逢いたい……つ」

「わかつてる。連れてつてやるから、少し我慢しろ」

「ひよ……ひよ……ひよ……つ」

恋しああまりにぐずぐずと泣き出したイザヤに苦笑しながら、ギルは速度を上げ、宥めながら聖国へと急いだ。

質素かつ莊厳な戴冠式が行われた。

玉座に鎮座するは若き皇帝、サライ・ヴァディーダ・ヴァリアス。その傍らには『天地の騎士』を従え、彼は堂々たる姿で戴冠した。祝いの席となつた夜会では皇帝を賛辞する言葉が絶えず、また彼の玲瓏な容姿を絶賛し、歳頃の娘たちを浮足立たせていた。幾人かの少女は妃候補として後宮入りすることが決まり、またヒョウジュもそのひとりに数えられている。数日の滞在でそれぞれ皇帝と謁見し、その未来を決められるらしい。

そんな、華やかな式典が明けた翌日、リヨクリヨウ国王を含めた属国の国主たちは、名残惜しさをそれぞれ感じながら帰国の準備を始め、早いところでは既にはもう出立していた。

リヨクリヨウ国王シキヒトは、長居はしないとは言つていたが、もう数日留まるといつ。父王が滞在している間は後宮入りしなくともよいと許可され、ヒョウジュは気が重いながらも聖国に留まつた。しかしながら、滞在している部屋で、ヒョウジュはほとんどひとりだ。言つてしまえば、やることがないためである。父王は皇帝に呼ばれたり、国と繋がりのある商人のところへ行つたり、或いは視察をしたりと、聖国にいられる間にできる政務に忙しい。ヒョウジュもたまに呼ばれるが、それでも部屋でおとなしくしている時間のほうが多かった。

祖国では部屋に幾日も籠もつていたといひで甚にはならなかつたヒョウジュであるが、異国でも同じといつわけにもいかない。頼んで図書館の蔵書を読ませてもらつことができてからは、蔵書を片手

に露台に出て読書に耽ることもあるが、頭を過ぎるのはいつもイザヤのことばかりで、せっかくの珍しい書物を無駄にしてばかりだつた。

そんな日を三つ過ぐと、四日めを迎えた午後のこと。

妃候補となつたヒョウジコは、皇帝と謁見することになった。場所は皇帝が所有する宮廷内の一 角、縁を強く感じる庭だ。

縁の強さと、その清浄さにやはり感激したヒョウジコは、呼ばれた場所に早く来ていたこともあって、用意されたお茶の席を少し離れてゆつたりと歩く。

「皇城内に、森……す」こわ

「さすが聖国ですね」

共に来ていた侍女アビと、もの珍しく見てしまつ。

リョクリョウ国 の城では、こんな空間を作ることはできないし、またそんな贅沢を欲する王族もいない。癒しといえればせいぜい、寒さを皮肉つて いる温室くらいだ。害獣駆除を深刻に考える国で、聖国のような華やかさを求めることはまずできない。

「綺麗だわ……同じ大陸の上にある国とは思えないわね」

「わが国にも綺麗な場所はたくさんありますよ」

「……、やうね」

これは聖国独特の美しさ。リョクリョウ国に だつて、綺麗な場所はたくさんある。それを言つアビに、やはりどんな国でも祖国を一番に想つものなのだと、ヒョウジコはまつと息をつく。

「惑わされて戻れなくなるぞ」

ふとそんな声が、ヒョウジュの歩みを止める。

振り返るとそこには戴冠したばかりの若き皇帝がいて、慌てて礼を取つた。

「申し訳ございません。美しさに見とれて、席を離れておりました」「ああいや、それはかまわない。ただ座つて茶を飲むよりも、こいつ歩いていたほうが気も休まるだろつ」

くすくすと笑つた皇帝は、後ろにふたりの騎士と、侍従をひとり連れていた。

その笑い方もせつだが、なんだか全身から優しさやら穏やかさやら、まず皇帝とは思ひ難いものが垂れ流されてゐるようだと思つ。まるでイザヤを落ち着かせたような人だな、と思つて、また自分がイザヤのことしか考えていないことに寂しさを感じた。

「姫は、縁が好きか?」

「え……?」

「おれは好きだ。おれはこの縁に育てられたからな」

「……そう、なのですか」

若き皇帝は、ふわんと笑ひ、ヒョウジュがそれまで眺めていた縁を見つめる。森のようになつてゐる縁の奥は、その先がどうなつてゐるのかが見えない。皇帝にはそれが見えてゐるよつて感じた。

「縁は、好きか?」

「……はい。わが国は一年を通して寒く、作物はおろか草花も育たない時期もありますから、いつも溢れている姿を見ると安堵いたします」

「そつか……貴国ではもつ雪が降つてゐるとか」

「ええ。大地はすでに白くなつてゐることでしょ。聖国ではそれ

ほど降らないとお聞きました

「同じ大陸にあるのに、だいぶ違うな。世界は不思議だ」

ふつと、皇帝は歩き出す。

戴冠式のときもそうだったが、真っ白な衣装はリョクリョウ国を覆う雪のようで、柔らかく風に揺れる淡い金の髪はまるで雪に反射した太陽のようだ。綺麗だなど、素直に思つ。

だからだらうか。

聖國に嫁ぐのはいやだと思うのに、この皇帝との会話はいやではない。皇帝が持つ雰囲気がヒョウジュにそう思わせているなり、兄王子の判断は間違いではないのかも知れない。

けれども、と思つ。

彼はイザヤに似ているけれども、イザヤではない。家族になりたいだなんて思わない。

やはりわたしはイザヤがいい。

そう思いながら、ゆつたりと歩く皇帝の後ろに続いた。

歩いている間、とくに余話はない。話しかけられることもなく、ただ縁の中を歩く。

そういえば戴冠した祝いの口上を述べ忘れていたことに気づいたときには、用意されていたお茶の席へと戻つていた。
どう述べればいいだらうかと、迷つたその一瞬である。

「騒がしいな……」

と、皇帝が席に座ることなく周りを見渡した。同じじよひにふたりの騎士も、唐突になにかを警戒し始める。

「陛下、廷内へお戻りください

「……いや、待て」

「ですが」

「待て」

騎士たちの警戒は、しかし皇帝を落ち着かせたまま、動かさない。ヒョウジュには、皇帝や騎士たちがなにを警戒し始めたのか、わからなかつた。

「あの……陛下？」

「……迎えかな」

「え……？」

「ラク、違うか？」

皇帝は、同じように落ち着いている侍従にわざわざ聞づ。なんの「ひとか、ヒョウジュにはわざわざ」だ。

「派手な登場ですねえ。まあ、気持ちはわからなくもないですが」「す、いいな」

「ここいつのを、無謀と言つんじょうね」

「わづだな。そういうことだから、……マー、田を廻つてくれ」

ヒョウジュにはわからなこと余話が、皇帝と侍従、そして騎士たちの間で交わされる。

彼らが感じているものがわからなかつたヒョウジュは、だがアビと身を寄せ合つて様子を窺つてゐるうちに、その音に気づいた。僅かにだが、騒がしい気がする。

「なに……？」

「」の騒がしさはなんだろう。なにが起きてこことうのだらう。

彼らはなにを警戒し、そしてなにを寛大に見守っているのだらう。怪訝に思いつつ、なにか情報はないのかと周りを見渡した、そのときだ。

「ひよー！」

「……、え？」

幻聴が聞こえた。

自分を呼ぶ、イザヤの声を聞いた気がした。

「やはづ、じゅぢゅの姫の迎えだな

皇帝がヒョウジュを振り返り、くすりと笑つ。

「迎え、とは……？」

「おれは、案ずるな、と言つたはずだぞ」

それは確かに聞いている。けつきよく意味がわからないままだつた言葉だが、今も、その意味はよくわからない。

ただ、今この事態は、どうやらヒョウジュが原因らしい。迎えといふのは、ヒョウジュを迎えてきたということだ。

それなら、幻聴だと思ったあの声は、現実。

ハッヒヒュウジュは田を見開いた。

「イザヤ……っ？」

来て、くれた？

ここに？

本当に？

「案するな。おれは妃など欲していない。娶るつもつすらない。今も、じれからも。だから姫は、自由だ」

「……陛下」

アリーヴ意味の、案するな、といふ言葉だったのか。

「辯相たちに気圧されて、やむなく後宮は開けているが……そもそも父上の側妃を捌くまで、後宮は開けているしかないんだ。それだけのことなのに、ほかの貴族たちは勘違いしたいらしくてな。おれが妃を求めていると、勝手に思い込み続いているわけだ」

「……それは、もしや、わが父も……？」

「いや、リョクリョウ王は真摯に、姫を妃にと進言してきた。おれのところなり姫は幸せになれる、と。だが、その中のうちに断らせてもうつた。悪いがおれは、おれがここにいる限り、姫を幸せになどできないからな」

皇帝のその言葉に、すとん、となにかが落ちる。

それが自分の安堵だと気づいたのは、喧騒が近くまで迫ったときだった。

「ひこよー。」

今度は素直に受け入れることができた声を聞いて、ヒョウジュは込み上げてくるものに空色の双眸を潤ませた。

「イザヤ……っ」

その姿を捜して、視線を彷徨わせる。

「じ、じ、じ、じ、じ、じ。」

逸る心臓を持て余しながら、その姿を捜す。

そうして。

「ひこよー。」

庭へ下りられる廊下から、恋しくてならない人が、姿を現わした。

「イザヤー。」

呼ぶと、彼はヒョウジュに氣づく。

視線が絡んだ瞬間、ヒョウジュの目許は涙で溢れた。

来てくれるとは思わなかつた。

こうしてまた逢えるとは思つていなかつた。

約束を破つたことを罵るのではなく、ひよと、そう呼んでくれるとは思わなかつた。

「ひよ……」

やはりどうしても怪我をしてしまうイザヤは、最後に逢つたときよりも傷が増え、腕や腹部だけでなく、その頬にも血を滲ませていた。だがその血も、ヒョウジュを捜し当てる瞳から流れた涙に、さらに滲んで流れ落ちる。

立ち止まつたイザヤが、くしゃりと、顔を歪めた。

「ひよ……ひ……ひこよ」

両腕を伸ばし、駆け寄つてくるイザヤに、ヒョウジュも腕を伸ば

して駆け寄る。

ぶつかるよにして、抱き合つた。

とたんに包まれたイザヤの匂いと、血の匂い、そして恋しい、

くらつと眩暈がある。

「イザヤ……」

「ひよ、ひよ、ひよ……」

ぎゅうぎゅうと、力強く抱きしめられて、ヒョウジユはその女猪

に圧へ息を震わせた。

「再会に水を差すようド悪にんぐですナビ……ちよつといこーですか
？」

そんな声にハツとしたと、ヒョウジコセイの場がビリドアつた
かを思い出し、慌ててイザヤの胸から顔を上げた。

「あの、すみません」
「誰だ、てめえ」
「イザヤ」

声をかけてきたのは、皇帝の隣に冷静な顔で控えていた侍従だ。
イザヤが牙を向けようとしたのを、ヒョウジコは慌てて宥める。

「だいじょうぶ、だいじょうぶよ、イザヤ」
「ひよ……でも」
「だいじょうぶ」

流れている涙を拭つてやりながら、だいじょうぶ、と繰り返す。
涙腺が壊れてしまったのか、イザヤの涙はそれでも止まらない、
ぽろぽろと流れ続けた。

「なんか、あてられますねえ」

肩を竦める侍従が、人好きする笑みでにこにこと話しかけてくる。それはイザヤを警戒させたけれども、腰にある双剣を抜かせることはなかつた。

だから。

「逃げますよ、おふたりさん」

そう告げた侍従に、ヒョウジュもイザヤも田を丸くした。

「え？」

「いえ、こっちの都合なんですけどね。もうちょっと静かに登場してくれたらよかつたんですけど、ここまで派手にされては事態の收拾が面倒ですから、隠れてもらいます」

侍従は、はらはらと見守っていた侍女アビのこともせばて寄せる
と、皇帝を振り返つてにこりと笑う。

「じゃ、先に行きますよ」

「ああ」

軽い挨拶が交わされたと思ったら、次の瞬間。

ふわりと身体が浮いた。

それに驚いてイザヤにしがみつくと、イザヤもヒョウジュを強く抱き竦めてくる。

なにが起こつたのだ、と思つたときには、それはもう終わつていた。

浮遊感が消えたと思つてイザヤの胸から顔を上げたら、見知らぬ部屋にいたからだ。

「さすがに二人も運ぶと、座標が少しずれますねえ……ふむふむ」

その弦のは、もちろん侍従からこぼれた言葉だ。

「……あの？」

「ん？　ああ、いきなりすみません。おれの天恵で、移動させても
らいました。走っていたら間に合いませんし」

「天恵……？」

「空間移動の天恵ですよ。無属性ですから、見たことないと思いま
すけど」

聞いたことのない天恵だ。それでも、確かにその力は働いて、あ
の庭から見知らぬ部屋に一瞬にして移動しているのだから、その天
恵は存在する。ヒョウジュの天恵も珍しい部類に入る」とを考え
ば、侍従の天恵だってあってもおかしくはない。

「さて、先に彼の手当てをしましょうか。だいぶ無茶をしているよ
うですし」

そうだった、とヒョウジュはパツトイザヤから離れようとして、
しかしイザヤが放してくれず、その胸に逆戻りしてしまう。

「イザヤ……っ」

「あ……「」めん。腕、動かねえ」

「え？」

「だつて……ひよが、いるから」

イザヤは「」れの身体に起きた現象に困惑しながら、震えている両
腕をどうにかしようと動いた。だがそれはヒョウジュも一緒に揺さ
ぶることになつて、けつぎょくヒョウジュを抱きしめた腕は解けな

かつた。

イザヤのそれを見ていた侍従が、あはは、と笑う。

「身体は素直ですねえ」

だいぶ緊張感のない笑い声に、警戒を露わにしていたイザヤも呆気に取られたのか、途方に暮れた顔をした。

「……笑い」とじやねえんだけど

「心配しなくていいですよ。ここには関知されない場所です。おふたりのことは、サリヴァンが責任を持つてお護りしますから」

「は？ 護る？ なんで？ おれ、ひよを攫いに来たんだけど」

ヒョウジュはイザヤの言葉にぎょっとした。まさか、迎えに来たと語つのではなく、攫いに来たとは思わなかつたのだ。

「おやおや、ヒョウジュ王女殿下を攫いに来たなら、ますます護る必要がありますねえ」

「はあ？ なんで？」

「王女殿下にはお伝えしたんですけどね、うちの皇帝陛下、お妃さまを娶るつもりはないんですよ。おれとしてはお嫁さんくらい欲しいなあと思つんんですけど、なにぶん今は身体的にも精神的にも忙しいもので、今すぐ欲しいとは思つていません。なので、王女殿下を含めた候補の方々は、近日中に実家へお返しする予定なんです」

「え……じゃあ

「はい。王女殿下は、わが国のお客人です」

それは本当か、と侍従に確認したあと、イザヤはヒョウジュにも本当かとその瞳と揺らしながら訊いてくる。皇帝からその言葉を直接聞いていたヒョウジュは、ふつと微笑んで頷いた。

「ひよ……ひ

感極まつたらしこイザヤに再度抱きしめられて、ヒョウジュの微笑みも深まる。

ほつと安堵したのと、イザヤがひよいてくれている現実と、それらを言葉にできない喜びに胸が詰まつて、止まりかけていた涙が一筋類を伝つた。

「よかつた……よかつた、ひよ。ひよ。」

「イザヤ……」

「おれ、ばかだから、いつも逃げて……ひよに、本当に逃げられたのかと思った」

「……本当、ばかね。わたしは一緒にいたいって、言つたはずよ」

「ひよ、ひよ……ひよ」

ぱんぱん、と両手を叩いた侍従にたびたびの喜びは中断されるも、確かにまずはイザヤの怪我だ。黒い服はいたるところに血を滲ませているし、ボロボロであるし、頬の傷はまだ血も止まっていない。腕にいたつてはぐつしょつして、ヒョウジュの衣装を赤く染めているほどだ。

「よし、じゃあ手当をしますか。どうやつたらそれだけ傷を作れるのか、不思議ですよ」

ぱんぱん、と両手を叩いた侍従にたびたびの喜びは中断されるも、確かにまずはイザヤの怪我だ。黒い服はいたるところに血を滲ませているし、ボロボロであるし、頬の傷はまだ血も止まっていない。腕にいたつてはぐつしょつして、ヒョウジュの衣装を赤く染めているほどだ。

「アビ、『めんなさい。許してくれる?』

咽喉もとで手のひらを組ませて見守つてくれていた侍女アビに謝ると、それまでイザヤにあまつよい顔をしていなかつたアビが、涙で幾度も頷く。

「じゃあ侍女さん、隣の部屋にある棚の一番上に道具があるので、お願いしていいですか？ おれは医師を呼んできますから」

「棚の一番上ですね」

「とりあえず止血すればいいと想つます。腕、ちよつと危なそりです」

「わかりました」

侍従に頼まれたアビは、一目散に隣室へと走つていぐ。侍従はそれを見送つてから、医師を呼んできますと、部屋を出て行つた。

「イザヤ、とりあえず座りましょ。それからゆつへつ、身体の緊張を解いてあげて」

イザヤを促して、どうにか近くの長椅子にふたりで腰かけると、イザヤが部屋を出て行つた侍従を追いかけるかのように視線を流した。

「……なんで、護つてくれるんだ？ 医師まで呼ぶつて」

「それは……わたしが、客人だから、かじら」

「おれは侵入者だぞ」

「自分で言わないで」

「……ごめん」

「でも、嬉しいわ」

「……ほんと？」

「だつて、わたし、イザヤがいいもの」

「え……？」

きょとん、トイザヤが目を丸くしたとき、身体の緊張が解れてくれたのか、ぐつぐつしていた身体に距離ができる。それを少し寂しく思いながら顔を上げ、見つめてくる焦げ茶色の双眸に「」れの姿を映した。

「姫さま、お持ちしました」

「……ありがと、アビ」

言おうと思つた言葉はアビが戻つてきたことで遮られてしまつたが、言ひ前にはまずは治療だと自分に言い聞かせ直して、アビに道具を広げてもらひ。

止血用の硬い大きな布を受け取ると、まずは腕の傷を見せてもらう。

「……なんてこと」

「あ……じめん」

腕の傷は、今まで以上に深そうだ。巻かれていたのだから包帯は真っ赤に染まつていて、包帯の意味すら成していない。

「ギルは……ギルはビリしたの？」

今までトイザヤの怪我は最小限で済ませていたのだ、と呟ついた。それはギルの存在があつたからだらうと、姿を見せないギルのことを問う。

「すげえ疲れさせちまつたんだ……おれ、ひよが聖国に行つたって

聞かれたとき、腹に怪我してたから動けなくて、それで、出遅れて……ギルに無理させて、半旬でここまで来たから

一瞬、ギルが害獣かなにかに倒されてしまったのかと冷や冷やしたが、そつではないと知つてホッとする。無理をして疲れているだけなら、聖國のどこかで休んで待つていいのだひづ。

「ギルはまだいじゅうぶ?」

「呼べば来る。ここから逃げるときのために、城壁の上に待機させてるかい?」

「なら、呼んで。わたしとイザヤの無事を、教えてあげて」「無事なことだけ知らせる。なんかのときのためにも、ギルの存在は知られたくないねえし」

まだ逃げるつもりでいるらしく、イザヤに少し笑つて、古い包帯を取り去り止血し、汚れた血を拭つ。剣で斬りつけられたらしい傷はやはり深く、上腕をきつく縛つて漸くその流れを止めることができた。

ヒョウジュに治療されている間、イザヤはアビに頼んで窓を開けてもらつと、口笛を吹いた。音階をつけた口笛は音楽のようで、歌のようにも聞こえるそれは、ギルにさまざまな情報を伝える役割を担つているらしい。

「無茶をしたのね」

「だつて……ひよが」

「わかつてゐ。ありがとう、イザヤ」

「……ん」

ふんわりと微笑んだイザヤは、そのとき漸く流れつぱなしだった涙を止め、ヒョウジュの手のひらに拭われると猫のよつと擦り寄つ

てきた。

「ほんなどんなに仲がいいの? なぜリョクリョウ王は聖国に姫を連れてきたんだらうな?」

といつ声は、皇帝のものだ。侍従と、侍従が呼んできたらしい医師だといつ青年も一緒に、それぞれが苦笑している。

「誰?」

「聖国の皇帝陛下よ」

「じゃあ……ひよが」

「もうその話は終わつよ、イザヤ」

「でも……」

ほんの少しだけ皇帝を警戒したイザヤは、けれども皇帝が医師の青年に声をかけて、強引に治療を始めさせたので、戸惑わせて警戒を薄れさせてしまつ。

「國主のサリヴァンだ。そう呼んでくれ

「サリ、ヴァン?」

「ああ。きみは?」

「……イザヤ」

「……きみがイーサガ?」

「え、なんでその渾名……」

「実はリョクリョウ国の中太后から、少し前に親書が届いた。王にも伝えておいたぞ」

「王太后……ユキちゃんか?」

サリヴァンと呼べ、と言つておいた皇帝は、懐を探つて親書とやらりを出す。

「要約すると、わが国の姫には心に決めた人がいる、ゆえにその幸せを願いたい、どうかご協力を、と」

ふつと笑つた皇帝サリヴァンは親書を広げて見せて、そのままそれを侍従に渡す。

「おれは王太后に協力することにした」

その楽しそうな言葉には、ヒョウジュもイザヤも呆気に取られてしまう。

ヒョウジュの輿入れは、王太后コキイヒによつて上手く、駆け落ち設定にされたらしい。

「だから護るつて……ああ、そういうことか」「きみたちにはいいことだらう? おれにもいいことだ。妃候補がひとり減つてくれただけでなく、その者は真にいとしく想う者と一緒になる。これほどいいことはない」

そこには打算のようなものが含まれているが、皇帝の言つとも確かだ。悪いことなどなに一つなく聞こえる。

「でも、おれ……侵入者」

「それは気にするな。城の者たちの警戒心を煽るために、おれが芝居を打つたことにした。場内警備の訓練だな」

「へ……?」

「そばにいた騎士が証言するだらう。陛下と侍従だけは騒ぎの中にありながら冷静だつた、と。もちろん王太后の親書の実を知つていたのは、おれとラクだけだからな。事実だ。だから、姫と謁見する今日に来てくれて、本当のところは助かつた。どうやって誤魔化す

か、考えあぐねていたからな

しつかりと、その策は練られていたらしい。今日という偶然が為したことでもあるが、僅かな日数でその策を考えただけでもす”いことだヒヨウジコは思ひ。さすがは賢帝を期待される皇帝だ。

「内密になるが、おれは王太后に協力する。親書にある言葉が本物であるとわかったからな。ほとほりが冷めるまで、ここにいるとい」

「……なんで、協力するんだ」

「言ひただろひ。これほどこことはない、と」

「あんた皇サマだろ」

「だから？」

「國のためを考えれば、こんなことって思わないはずがねえ」

信じられない、トイザヤはその言葉をぶつけむ。悪い意味ではなく、なぜそこまでして考えてくれるのだと、そういう単純な疑問だ。ヒヨウジコも、同じようにその疑問がある。

「國にはなに一つ問題が起きてこないのに、か？」

「は？」

「きみたちのことで、わがヴァリアス帝国はなにか問題でも起きたか？」

そう問われると、先の言葉を考えれば、出でくる答えは一つだ。

「……起きてねえ、かも」

流れられ言い包めらいでいるだけかもしけないが、問題は起きていないように感じる。

「そうこうことだ。国に害をなしたわけでもない者を、なぜ咎める必要がある。そんな無駄なことに割く労力は持ち合わせていない」「でも、裏を考えりや……国つて、国政つて、そういうもんがあるだろ？」

「疑り深いな……おれは無駄が嫌いなんだ。それで納得しろ」「納得しろって、無理だろ、それ。おれとあんた、初対面だぞ」「それがどうした。おれなんか、外に出てまだ一旬も経つてないんだぞ。逢う奴みんな初対面だ。どうじょうもないじやないか」「……外に出て？みんな初対面？」

「あー……いや、それはおれの都合だ。気にするな」

なにかを誤魔化した皇帝は、しかしまじつこて、侍従のわざとらしい咳払いで助けられた。

「皇帝になるぞ、と推されて、まだ一旬しか経っていないんですよ。それなのに今はもう皇帝ですし、先帝の崩御は急なことでしたから」「そうだ。聖国の先帝の崩御は、病に倒れてからすぐであった。それゆえに皇太子の戴冠が急がれ、ヒョウジュにも急な話が舞い込んだのだ。

「まあそういうことだ。王には伝えておくし、なにかあれば知らせる。きみたちのことはおれが責任を持つから、好きにするといい

「……信じていいのか」

「信じなくてもかまわないが、そうなるとおれはきみたちを護つてやれない。城から出たとたんにきみたちは國の人間に捕まるだろう。それらを含めて、好きにするといい。ほとぼりが冷めるまで滞在するなら、それなりに面倒は看る」

じひらがいいかと訊かれたら、ヒロウジュは迷わずイザヤと一緒にこられる未来を選ぶ。だから、皇帝の提案には縦に頷いた。だがイザヤは、皇帝の言葉を最後まで信用し切れないらしい。

「本当に、おれとひよを護るのか」

「……これだけおれの本心を曝したんだから、もうこいだろ」

しつこくへりこ疑うイザヤに、皇帝は苦笑をこぼして背を向けると、扉のまづへと歩いて行く。その後ろ姿を、イザヤが呼びとめた。

「最後に一つ」

「……なんだ？」

「国と国が……戦争、なんてことにな」

自分の行動がどれくらいのものであるか、イザヤはわかつていたのだろう。その不安と心配を抱えていたのだろう。それゆえに、しつこくへりこに疑っていたのかもしれない。

「きみたちの出方にによつては、起きるかもしれないな

「え……」

「おれの面目が潰される。つまり、聖国を踏み潰すところになる。生憎だが、そうされてしまつたら最後、おれはわが國の者たちを抑えることなどできな」

皇帝にそう言われば、さすがのイザヤも疑い続けるわけにはいかなくなつたよつて、ふつと息をついて肩を竦めた。

「ほとぼりが冷めるまで、ここに隠れてていい？」

ほつかり笑つたイザヤに、皇帝はやはり苦笑しただけだ。

「わう派手に動くなよ」

やう言つて、皇帝は部屋を出て行つた。侍従も、あはは、と緊張感なく笑つてから、「じゃあまたあとで」と皇帝を追いかけて部屋を出て行つた。

ヒョウジュはまつと息をつべり、同じまつと息をついているイザヤを見つめて、微笑んだ。

12 : 偽りだらけの世界のなかで。3(前書き)

* R指定っぽい……かもしませんので、『注意ください』。

イヤヤ視点です。

ヒョウジュの隣で眠つていたけれども、ざつしても腕の痛みが引かなくて、それで起きた。

ぐるぐると包帯に巻かれている腕は、見たところ血も滲んでいない。気のせいだと思い直してまた眠つてみるけれども、やはりじくじくといつ痛みで目が覚める。

「……骨にじつてたからな

ざつくじと剣で斬られた腕は、指を動かせることすら奇跡だと、治療してくれた医師が言つていた。それでも、ちよつとした衝撃を加えると動かなくなるかもしれないから、直つたら指の運動をさせたほうがいいといつ助言をもらつている。

ヒョウジュは、じうして剣の傷があるの、と訊かれた。

皇城に侵入したとき、出逢い頭に騎士に斬られたと素直に答えたら、ヒョウジュは真つ蒼になつて唇を震わせた。

その色っぽさに誘惑されて唇を掠め取つたら、赤くなる前に怒られただけれども。

だから、怪我をしている今だと怒られるから、ヒョウジュが眠つてからこつそり、色っぽい唇を舐めた。ついでに色んなところを舐めて、ひつそりと印をつけてみる。

ヒョウジュの白い肌に、その赤いものは目立つた。

満足して眺めていたら、もつと誘惑されてしまう。

胸許の服を引っ張つて、肌着をずり下して、白い肌をじつと見つめた。

「おこしゃり……」

舐めたいし、吸いたいし、触りたいし。
色っぽい顔はもつと見てみたいし。

「……えいじよりか」

本氣で迷つて、じばらく見つめながら考え込む。
とつあえず舐めつて吸つて、印をつけておいたか。触つた、こと
にせなると思つたけれども、そこまでにしておいたか。
痛む腕を庇いながら身を屈めて、ペロつとおみを舐める。ちゅ
つと口づけて、舐めたところを吸つ。

「ん……」

ふるりと震えたヒョウジコロにんまつと笑つて、起きなこじりに
氣をよくして違う場所も舐めて吸つた。

数度繰り返して、ふふん、と満足する。
いっぺん印がついた。

「んー……もつしゃり」と?

まだ白ごとのものがたくさんある。やつ細つともつとたべせん印を
つけたくなるものだ。

「やめろ変態」

と、頭を「ン」と叩かれて、挫折した。

「なにすんだ、ギル」

人型のギルが寝台の脇について、同じ顔を引き攣らせながら立
ちしていた。

「ひよの意識ないじゃないか。なにやつてるんだ、イーサ」
「いいだろ、べつに……起きてるときだと舐めさせてくれんねえし」
「イーサは怪我人だろ。当たり前だろ」

「ひよはおれのだ」

「だからって眠つているときこやるな」

「こん、とまた叩かれた。

「なにすんだ。邪魔すんな。もつと舐めらせろ」

「だからやめろ」

「じん、と三度めに叩かれたときは、さすがに痛む腕に響いて、声
もなく腕を抱えて身を丸めた。

「痛むくせにひよに手え出すからだ」

「おまえが殴らなけりやいいだけのことだろ、あほ」

「あとでひよに怒りれるぞ」

「……、あ」

「は? 気づかなかつたとか言つつもつか? どれだけバカになつ
たんだ、イーサ?」

ついかり忘れていた。舐めたくて吸いたくて触りたくて、それだけだったから、起きたあのヒョウジュの反応なんて考えてなかつた。

「……怒る、かな」

「怒るだろ?」

「ひよはおれのだ」

「イーサは?」

「おれは……ひよのだよ」

「怒られるしかないな」

「なんでもうなる」

怒られることが確定なんて、どうこうことだ。

ヒョウジュはイザヤのもので、イザヤはヒョウジュのものなの。

「ひよは元気?」とあるんだが。伝えたのか?」

「……まだ」

「血のこと血つてからこじるよ、イーサ」

「う……」

確かに、ギルの言つとおりだ。

ヒョウジュがこの手に、当たり前のようにならなかったときと同じように、戻つて来てくれたから、それが嬉しくてまだ言つていらない。

ヒョウジュが好きだ。

といつ、言葉を。

「はあ……だめだ。ひよのそばなのに眠れなくなつたまつた」

「だらうな」

寝台を離れて、布団をヒョウジュにかけ直すと、とせとせと長椅子のほうに移動する。どうとどうと転がつてから、長くため息をついた。

「せつかくひよが無防備なのに……もっと舐めてえなあ

「言つ」と言ってからにしる

「おまえ、獣のくせに、なんで人間の理性に味方するんだよ

「人間は万年発情期だ。その知識はある」

「身も蓋もないな、おい……

「違うか?」

そのとおりだよ、顔を引き攣らせつゝ、ギルがどこからか持つて
きてくれた毛布に身体を埋める。

ヒョウジュがそばにいてくれるなら眠れるけれども、今日まち
つともう眠れそうにない。

「腕、痛えなあー……」

ヒョウジュに触れていられたら、この痛みも消えるだろうか。
ヒョウジュはいつも痛いところを治してくれる。癒してくれる。
だからどこかが痛むと、ヒョウジュのそばにいれば治つた。
今回は、どうしても痛むけれども。

「相変わらず痛そうに見えないんだが……頭はだいじょうぶか?」

「ひよを抱きたくてもうがねえ

「もう少し殴つておけばよかつたか……」

真面目に言つぎルに、ははつと笑う。

「殴るなら、気絶させてくれ。痛くて眠れねえんだ」

毛布のぬくみを頬に感じながら、はあ、と息を吐き出す。その熱さに、ギルの言うとおり頭が危なくなってきたかもしれないと思つた。こうして理性が働いているつむじヒヨウジゴのやせを離れていないと、なにをするかわからない。

そんな自分に、イザヤはくすりと笑つた。

「なんだ？」

「いや……おれも、男だったんだなあと思つて」

「……今まで女だったのか」

「いや違えよ」

なにか衝撃を受けたような反応をしてくれたギルに、あほかと突つ込んでおいて、また笑う。

「ひよが、好きだ」

「ああ」

「すごく、好きだ」

「見ていればわかる」

「ひよがおれ以外のものにならなくて、よかつた」

「そうだな」

「おれ、ひよの家族になりてえ」

「……おれはイーサとひよがふたり一緒にいる姿が、すごく好きだぞ」

「そこにおまえの家族もいたら、最高だな」

以前なら家族に、夢なんて持たなかつた。祖父母がいればそれでよかつた。それだけで満足していた。それ以外を望みもしなかつた。

けれども、今は違う。

ヒョウジュが自分以外の誰かのところへ嫁ぐと、聞いたその瞬間に襲われた恐怖。

自分以外の男の腕にいるヒョウジュを想像して、息が止まつた。手足の感覚が薄れた。目の前が、真っ暗になつて、真っ白になつた。呼吸を思い出してから知つたのは、自分が恐ろしいほどヒョウジュに囚われているという、想いだつた。

今も、それは変わらない。

ヒョウジュを娶るつもりはないと言つたあの皇帝の言葉を、未だ消化しきれていないのは、狂いそうなほどヒョウジュをいとしく想う己れを御し切れないからだ。

だから、考える。

どうすればヒョウジュを、誰にも奪われずに済むのかを。

「なあ、ギル」

「ん?」

いつのまにか黒犬の姿に戻つたギルを、そばに寄せて長椅子に乗せる。寄りかかつて枕にすると、ふわふわとした黒毛に頬をくすぐられた。

「この世界でも、純潔は重んじられるのか?」

「まあ……たぶんな」

「そうか……なら、いいかな」

「? なにを考えている」

「おまえが怒ることを」

「なんだそれ

決めた。

そうしよう。

だつてヒョウジュは自分のものだ。もう誰にも渡せない。熱のせいを考えが危うい自覚はあるが、そんな今でなければそれもできない。

だから許してもらおう。

じりりと反対側に転がつて、寝台で眠るヒョウジュを見つめる。

「好きだよ、ひよ」

「ひとつと笑うと、イザヤはふわふわする頭で、ヒョウジュが目覚めるその時間までしつかりと眺め続けた。

朝目覚めて、驚いたのは、隣で寝ていてるはずのイザヤの姿が消えていたことだった。

「イザヤ……っ？」

慌てて起きて、そのままヒュウジュの声に気づいたイザヤの、のんびりとした声を聞く。

「なに？」

その間延びした声はあまりにものんびりとしていて、見ると長椅子で毛布に包まつたイザヤが、ここにこと笑っていた。

「…………どうして寝台にこなこの

イザヤがいなくなってしまったのではないことにほつと安堵したヒュウジュだつたけれども、いるのに寝台を離れているのは許しがたい。

イザヤの怪我は、けつこう深刻だ。もしかすると指が動かなくななるかもしれない、医師は真面目な顔で言っていた。どうやら斬られ方が悪かったらしい。すっぱりと綺麗に斬られたのではなく、引つかかるかなにかして抉るように斬られていたことで、身体に異常をきたす可能性が高いのだとその医師は説明してくれた。

だから、ふらふらと動ける怪我ではない。高熱が長く続き、起き上がることさえしばらくは難しいだろうと、医師に診断されていた。それなのに、イザヤは寝台を抜け出して、長椅子にいる。

「疲れねえから、起きてた」

「起きてって……ずっと？」

「うん」

「こ、とイザヤは笑つ。笑い続けるイザヤに不気味さを感じたのは、これが初めてだ。

「ここに来て」

「やだ」

「イザヤ」

「腕、痛くて眠れねえもの。そ、行きたくねえ」

「我儘言わないで」

「やだ」

ふふ、と笑いながら寝台に戻ることを拒絶するイザヤに、仕方ないでのヒョウジュは自分が寝台を離れた。

そばに行こうとしたら、なぜかイザヤに逃げられる。

「動かないで、イザヤ」

「着替えておいで、ひよ

すつと、イザヤは後ろを指差す。

扉が叩かれて、アビが朝の挨拶をしながら入ってくぬといりだつた。

意外と頑固なイザヤの説得には、まず自分のことをやつてしまつてからにしたほうがいいのかもしれない。

仕方ない、ヒヒョウジュは動いた。

「おはよ、アビ。急いで」

「は、急ぐ?」

「イザヤを捕まえなければならぬの」

「はい? ……、まあ!」

寝台を抜け出しているイザヤに気づいたアビも、まずはなにをしなければならないか、わかつただろう。捲くし立てるヒヒョウジュに倣つて、素早く朝の支度を整えてくれる。

「姫さま、これ……を……」

顔を洗って髪を整えて、衝立の向こうで寝間着からドレスに袖を通そうとしたところで、アビが真っ赤な顔をして視線を逸らした。どうしたのだろうと首を傾げて、ふと、虫刺されのような発疹があることに気づいた。

「これ……」

なにかしら、と視線を胸許に落とすと、その発疹はたくさんあつた。どこまで広がっているのだろうとこりへりい、たくさんだ。しかし、痛みはないし痒みもない。

着替える手を止めてしばりく考えて、そういえば昨夜、やけにくすぐつたい感覚がしたことを思い出し、ハツとなる。ぼつと頬に、熱が集中する。

「あ……さか」

怪我人だから動けない、といつか数日は動く」ともままならない

だろうと聞いていたから、その隣で休んだの。
なにもされないだろうと、思っていたのに。
これまでだつてそんなことはなかつたから、あり得ないと思つて
いたの。」

けれども、眠らないで、あんなところで毛布に包まつていたのな
ら。

この発疹は、膚に吸われて作られたものだ。

「衣装を変えてちょうどいい

「首まで隠れるものをこの用意します。少々お待ちください」

肌着を手繰り寄せて、両腕で胸許を隠すと、アビはヒラウジューの
意を汲んでくれて素早く別の衣装を用意してくれる。首まですっぽ
りと隠れるドレスは一着しかないが、仕方ない。

着替えて衝立から出で、のほほんと長椅子に座つてこるイザヤを
恨みがましく睨んだ。

「わたしになにしたの」

「んー？」

「なにしたの」

「ん」

「いい、トイザヤはなにともなかつたかのように笑う。

これまでこの笑顔は続くのだろう。熱のせいで、思考回路がおか
しくなつてしまつてこるのでないだろうか。

拍子抜けさせられるトイザヤの笑みに、自分が怒つてこるのか恥ず
かしがつているのか、わからなくなつた。

「ひよ、ひよ」

おこでおこで、と手のひりで呼ばれて、素直に感じのほし癪に障ったけれども、イザヤのこの笑顔を前に怒つていいだけ無駄だとヒュウジュは覺る。

はあ、とため息をつくと、イザヤの隣に腰かけた。そのとたんに、イザヤはヒュウジュのまつに身体を倒してきて、膝を枕にすると長椅子の上で丸くなつた。

「……罪の?」
「うと」「なら寝台に」「やだ」「イザヤ……」「ううでここ。ううがいい」

やせりぢうしても寝台では寝つてくれないイザヤに、ヒュウジュは苦笑をこぼした。

イザヤの額に手のひらを当て、その体温を調べれば、やはりひどい高熱だ。こんな状態でよく起きてこられるものだと、逆に感心させられてしみう。アビに冷水は頼んであるが、大量に用意してもらつたほうがよやかうだ。

「どうして、こんなに無茶をするの……」「……ん」「熱が高いわ」「ん」「ん」「少しでも眠らないと、楽にならないのよ」「んん」

「……んむつ、頑固者」

「ふはつ」

「笑い」とではないわ

「ひよ、可愛」

「かわ……つ、イザヤ」

怒つても呆れてもふわふわと笑つて嬉しそうにするイザヤには、さすがのヒョウジュもお手上げだ。寝台に移動してくれないなら、仕方ない、ここで休んでもらひませかないだらう。

ふつと息をつくと、イザヤの頭を撫でた。

「ねえ、イザヤ。わたしね……あなたのそばにいたいわ

「……うん、いて」

「ずっと、ずっと一緒にいたいの」

「うん……いたらいい」

「イザヤは？ イザヤも、そう思つてくれるる？」

「おれもひよと一緒にいたいよ」

本当に、イザヤも同じように思つてくれていいのか。

ただただ笑つているイザヤから、その本心を感じることはできない。ましてこんな、熱に浮かされている状態では、それが本音とも言い難い。

それでも、自分と同じように戯つてくれている言葉を聞くと、とても安心できた。

だから。

イザヤがふと動いて、その柔らかい微笑みが迫つても、ヒョウジュは逃げなかつた。

「イザ、ヤ……ん」

服の上からでも感じじるイザヤの唇が、胸許から首筋を辿りて耳朵をくすぐる。ぎゅっと抱き込まれると、ただもつまつとして、自分からすり寄つた。

なんで涙が出来やつになつてこるのだろうと思つたとき、感じていたぬくもりが唐突に去つた。

「怪我人が姫さまになにをしていろつー」

出でいたアビが、イザヤを引つ張つて、その行動を諫めようとしていた。

「ああー……なにするんだよ、アビ」
「あんた、怪我人でしようー」
「おれはひよに触りたいんだよ」
「自分の状態をまず把握なさいー」
「ひよに触りたい」
「そうじゃないでしようつー！ んもうー」

アビのそれはヒョウジュが呆気に取られるほどで、ヒョウジュから引き剥がされたイザヤは長椅子を転がり落ちて不満そうにしていた。

しかし、アビに叱られても、それでもめげないのがイザヤである。長椅子をよじ登つてくると再度ヒョウジュの膝を枕にして、両腕でヒョウジュにしがみついてぴつたりとくつつくと今度こそ瞼を閉じ、動かなくなつた。

「油断も隙もあつたものじゃない。……昨夜はギルさまが諫められたからよかつたもの」

「え？」

「ああいえ、」ひびの話です。まあ姫さま、朝食ですよ。昨日お世話いただいたお方はラクウイルとの言つて、皇帝陛下の侍従長だそうです。その侍従長どのが、滞在期間中は責任を持りますと、いろいろと整えてくださつたんですよ」

アビは手際よく、動かなくなつたイザヤをよじとして、朝食の準備をしてくれる。アビを手伝うのは見憶えのない女官で、彼女たちは侍従長だという人が寄こしてくれたらしき。

やこで氣になつたのは、父王のことだ。

「アビ、父上はまだしているかしら」

「侍従長どのお話ですと、とりあえず皇帝陛下のお言葉を待つておられるとか。姫さまにお逢いしたいと願い出てまつてひづですが」

「やつ……そりよね

これからどうなるのだろう。

今さらだが、ヒョウジュは少しだけ不安になる。もちろんイザヤと離れるつもりなど一度とないが、このままではいられるわけがないところは、よくわかっている。國に帰るにしても、ヒョウジュはまつ、王女ではござられない。いや、王女でいたくない。

「……アビ

「はい？」

「いめんなさい」

「……なにを謝られておいでなのですか？」

「わたし…… イザヤと一緒にいるわ」

離れるつもりは、別々に生きるつもりはないと、やうやくすると、きょとんとしていたアビも神妙な顔つきになる。

「わたしは、姫さまについて行きます。それだけです。ですから、気になさらないでください」

「アビ……」

「正直、わたしはこの方が…… イザヤさまが気に入りません。ただそれは、その態度が煮え切らないからです。姫さまを想う気持ちが本物であることはわかつています。だから、それでいいんです。無茶ばかりして姫さまを心配させるこの方を、わたしは敵視しなければならないだけですから」

初めて聞くアビのふとした本音は、今までイザヤに対して取つていた行動の理由だ。そんなふうに自分を想ってくれていたとは知らず、ヒヨウジユは苦笑した。

「許してくれていたのね、アビ」

「わたしは姫さま至上主義ですから」

ふふ、と笑うアビに、ほつとする。

イザヤとのことは反対されてばかりで、誰もいい顔をしなかつたけれども、いつも身近で世話をしてくれているアビが認めてくれたのは、思つた以上に嬉しいことだ。

「ありがとう、アビ」

「どういたしまして。まあ姫さま、食べてしまいましょう。そこのぐうたら狩人の治療は、姫さまがやらなければなりませんからね」

下からイザヤの、誰がぐうたら狩人だ、という声がして、ヒョウジュはアビと笑った。

それから朝食を摂つたあとは、なぜかそのときになつて動き始めて逃げ回つたイザヤをアビと捕まえ、様子を見に来てくれた昨日の医師に手伝つてもらつて怪我の状態を確認すると、服用したほうが多いという薬をもらつた。頑として薬は飲もうとしなかつたイザヤだが、さすがに逃げ回つて疲れたのか、やはり寝台には移動しなかつたが長椅子で丸くなり、おとなしくしていた。

眠つたのはヒョウジュが部屋にひとり残つてからのことで、人目を搔い潜つてギルが姿を見せたときだ。

「久しぶり、ひよ

「ええ。とても疲れていたそうだけれど、もう？」

「平気だ。もともと造りが人間と違うからな。ちょっと疲れただけで、動けないほどじやなかつたんだ。それより……ひよ、なにもなかつたか？」

「わたしはだいじょうぶ。ただイザヤの怪我が……けつこうひどいの」

柔らかいギルの黒毛を撫でながら、寝苦しくないのかと思つ恰好で眠つているイザヤを見つめる。包まつた毛布に顔は埋まつて見えないが、ちらりと見える額には汗が滲んでいた。

「瘦せ我慢も限界だな……ひよ、イーサが起きたら、腹も見ろ。たぶん治つてないから」

「腹？ そういえば……」

「いい腕の医師だ。言えばわかるだろ。ついでだから、治してやつてくれ」

「わかつたわ。でも、だいじょうぶかしら」

「今まで動いてたんだろ？ なら平氣だ。ただもう痩せ我慢はできないだろ？ から、できるだけ鎮痛薬とか、そういう薬は飲ませたほうがいい。苦しむイーサなんて、見たくないだろ」

笑顔を見続けられるのはいいが、それが痛みを我慢していられるものなら、つらいものだ。

神妙に顔くと、ギルのそばを離れ、冷やした濡れ布を絞つてイザヤの額にある汗を拭う。数度繰り返しても、その熱が引けることはない。

「ひよ、おれは近くにいる。なにかあつたら名を呼んでくれ

「一緒にいてくれないの？」

「まだ油断できないから」

イザヤはまだ逃げる算段でいるが、どうやらそれはギルも同じらしい。どうにかそういう手段を取りらずに無事帰国したいものだと思いつながら、ヒョウジュは露台から出て行つたギルを見送つた。

「……ギル、来た？」

毛布から顔を覗かせたイザヤが、眠そうなどこりも興合の悪い顔をしながら、起きていた。

「来たのはギルよ。だいじょうぶ。もう少し眠つて

「ん……ひよ」

ぽんぽん、と長椅子を叩くので、ふつと微笑んで座ると膝にイザヤの頭が乗る。

「疲れた」

「でしょうね。あれだけ逃げ回るのだもの。カリステル医師が驚いて呆れていたわ」

「男に触られたくねえもの」

「怪我を診てくれた医師よ。我儘言わないで

「ん……」

ゆうくじと頭を撫でれば、瞼を閉じてくれたイザヤの、少し乱れた呼吸が伝わってくる。

早くよくなつて、と祈りながら、まもなくして眠り始めたイザヤを、ヒヨウジュは撫で続けた。

14 : 偽りだらけの世界のなかで 5 (前書き)

イザヤ視点です。

『世界は嘘だらけなんだよ。真実なんて、どこにあるかわからない。だから、すべてを信じる必要はないんだ』

誰かの言葉に、イザヤは耳を傾ける。閉じていた瞼をゆっくりと開けば、田の前にほんわかと微笑んだ青年がいた。

『それならなにを信じればいいかって？ 簡単だよ。自分が決めたことは、信じないと。信念だね。こうと決めたら、それを貫く。たまに挫けるけど、それはそれで、人生だからね。気長に考えたらいい』

青年は微笑みながら、足許に絡みついてくる子どもたちに話して聞かせ、強請れて一緒に遊んで笑って、また語りかける。ときには伝説を聞かせ、その真似ごとを身ぶり手ぶりでやつて見せ、子どもたちを笑わせていた。

温かな光景だなあと、イザヤは眺めていた。

それで気づいた。

これは、夢だ。

自分は眠つて、夢を見ている。なんの夢かはわからない。田覚めたら忘れてしまいそうな、そんな夢だ。

『またおれと一緒に遊んでくれる？ そう、ありがとう。またね』

太陽が傾き、闇色に空が染まつてると、青年は遊んでいた子どもたちを帰し、全員の姿が見えなくなるまでばいばいと手を振り続けていた。

すとん、と手のひらが落ちたとき、場面が変わる。

青年の手には、片刃の双剣が握られていた。その瞳は、穏やかに微笑んでいたものから一変し、険しく、そして悲しそうに、それらを見つめていた。

『なんてことを……世界の調和を、たつたひとりの人間が崩すなんて』

子どもたちと笑い合っていた青年は、真っ赤に燃え上がる平原を見据え、今にも泣き出しそうなほど顔を歪める。

よく見ると、青年が見据えているのは害獣の群れだった。共喰いまでし始めたほど数が膨れ上がった害獣に、イザヤは慄く。

なんて数だ、なんて恐ろしさだ、なんて悲しい光景だ。

『穢れが、国を呑み込む……ああ駄目だ、駄目だよ。もう見ていられない。見たくない。見たくないんだよ、こんな世界』

青年は双剣を握り直すと、駆け出して単身で害獣の群れに突っ込んでいく。やめろ、と思わず声を張り上げたけれども、イザヤの声に青年が振り向くことはない。

ああ、これも夢なんだ。

青年を引き留めようとした手は空振り、宙を彷徨う。

イザヤがそうしているうちに、青年は害獸を一本ずつ確実に、恐ろしいほどの強さで倒していく。斬られた害獸から黒い泥のようなものが飛び散り、青年を黒く染めていった。

『こんな……こんな世界だから、嘘と偽りだけになってしまったんだ』

害獸に囮まれてもなお、青年は怯まない。悲しそうな瞳で害獸を見つめ、剣を握り、操り、倒していく。その腕に迷いはなく、確かな力で害獸を斬り、穢れを浴び、薄蒼の瞳に悲しみを深める。

素直に泣けばいいのに、と思つた。

青年は、一帯の害獸をすべて斬り伏せると、がっくりと膝をついて天を仰ぐ。

『おれの世界を、壊さないで』

青年は泣かない。

けれども、その心は泣いていた。
悲しくて、寂しくて、切なくて。

どうすればそれらが消えてなくなるのか、懸命に考えている。

その想いが、伝わってきた。

『偽りだらけの世界のなかで……コキをまだけが、おれの世界なんだ』

恋しい、いとしい、失いたくない。

笑つていてほしい、笑いかけてほしい、泣かないでほしい。

そんな想いが、イザヤの胸を締めつけた。

『奪わないで……っ』

青年は双剣を地面に突き刺し、頑垂れる。

溢れた感情に、イザヤのほうが泣きたくなつた。泣いて樂になつたかった。

けれども。

泣いてもどうにもならないと、わかっていた。
だから青年は泣かない。

イザヤも泣かない。
泣くのは、救いがあつたあとでも、できる」とだ。

『神よ……偉大なる天上の王、聖王よ……疲弊するわがいとしき大地を、いとしき世界を、優しき慈雨のなかに閉じ込めてくれ

青年は泣く。

温かく、優しく、穏やかな雨を。

それは心が流す涙の代わりなのか、それとも世界の涙なのか。
すべてを洗い流す、天上の涙なのか。

『天上の王よ……っ』

青年がいつそつ強く、願つたとき。

ぱつり、ぱつりと。

青年の上に、ゆづくじと水滴が落ちた。

15 : ゆめこみた。1 (前書き)

* R指定っぽい…… ので、『注意ください』。

まともに眠っているイザヤを見るのは初めてだつた。声をかけたり、ほんの僅かな物音でもすぐに起きていたから、なにをしても起きないイザヤというのは初めてだ。

「本気で眠つているわ……」

頬を抓つても、近くで会話を交わしていても、イザヤは身動き一つせず、ヒョウジュの膝を枕にして眠り続けている。額に滲んでいる汗を拭つてやつて、それで気づいたことだつた。すびすびと、可愛らしげに寝息が聞こえたから。

「珍しいことですか？」

「ええ。わたしのそばでは眠るけれど、熟睡しているわけではないのよ。少しでも音がすると、すぐに目を開けていたわ」

「……珍しいですね」

アビは好奇な視線でイザヤを眺めたあと、水を取り替えてきますと、部屋を出て行く。

アビを見送つてから、少しだけ痺れてきた膝をどうじょうつかと考え、しかしイザヤと離れたくなくて、ヒョウジュはじつとその寝顔を見つめ続ける。

苦しそうに見えるのは、高熱のせいだらう。まるで自分を護るかのように身体を丸めているのも、傷が痛むせにに違いない。イザヤ

はこつも傷だらけで怪我だらけだ。痛まない部位のほつが少ないだ
ら。ひ

穢れに侵されているわけではなきそつだけれども、ヒョウジュ
はイザヤの頭を撫でながら、ふと、頬を伝つたものを見た。

「……泣いているの？」

夢でも見てこりのだろうか。

悲しい夢を。

怖い夢を。

悪い夢を。

「だいじょうぶ……だいじょうぶよ、イザヤ。わたしがいるわ

頬を伝つた涙をそつと拭つた、そのときだった。

「おれのせかいは……」

眩きながら、イザヤが目を開けた。

「イザヤ？」

だいじょうぶかと、その顔を覗き込めば、ほんやりヒョウジュ
を見つめたイザヤがふんわりと微笑んだ。

「ひよ

とたんに、胸がきゅつとなる。
切ない想いに、ヒョウジュも微笑んだ。

「まだ痛い？ 薬、飲む？」

「ひよがいるから、いい」

相変わらずの瘦せ我慢には、苦笑がこぼれる。食事に薬を混ぜておいたほうがよさそうだ。

「夢……見てた」

「ゆめ？」

ぴつたりとヒョウジュにくつついてきたイザヤは、ぽつり、ぽつりと、眠りながら見ていた夢のことを聞かせてくれる。大雑把な説明ではあつたが、それは確實に、イザヤがイザヨイと呼ばれていた頃の記憶で、現実にあつたことだとすぐにわかつた。

「黒に近い赤髪って、リヨクリヨウ国にはいねえよな……誰だつたんだろ？」

「黒に近い赤髪の部族なら、もつ滅んでしまつたわ。コウガ族といひの」

「「ひがぞく？」」

「身体能力の高い部族で、彼らの特徴がそつだつた。けれども短命な部族で、害獣被害が多かつた時代に滅んでしまつたの。彼らの能力は重宝されていたけれど、寿命には勝てなくて、害獣の数も多かつたから。二十年くらい前のことね」

「ふうん……なんで、そんな奴の夢なんて、見たのかな」

それは、イザヨイがコウガ族であつたからだ。コウガ族の、最後の生き残りだつたからだ。

「コウガ族の混血なら今でも子孫はいるが、純血のコウガ族はイザヨイで最後だつた。イザヨイが生きていた時代でも、その特徴的な黒に近い赤髪は珍しがれていたと聞く。またイザヨイ自身、自分

以外のコウガ族を見たことがないと、言つていたらし。

今リヨクリヨウ国で、イザヨイと同じ部族の純血を見かけることは、なくなつていた。

「おれになにか、訴えたかつたのかな……なんもしてやれねえんだけど」

「イザヤに、憶えていてほしかつたのかもしれないわね」

「憶える？」

「世界は悲しこことばかりで、偽りだらけ……けれど、それだけではないといつて、見つけて欲しいのかもしれないわ」

ヒヨウジュが聞いた話では、イザヨイの死に顔は安らかなものだつたといつ。眠るようにして亡くなつていたと、史実にも残されている。

だからきっと、イザヨイは後悔なく、命を削つたのだろう。

だからといつして、イザヤとして転生ができたのだろう。

イザヨイの死は、当時の国には大打撃であつただろうが、無駄なことではないのだ。彼が命をかけたからこそ、国は護られ、王族は護られ、民は護られた。

イザヤに出逢えたことは幸福なことだと、ヒヨウジュは思つ。

イザヨイがいてくれなかつたら国は護られず、またヒヨウジュがイザヤに出逢つことも、なかつたのだから。

膨らむ想いにほつと息をつくと、身体を起こしたイザヤが体勢を変え、ヒヨウジュに顔を近づけてきた。

「ひよ」

「なあに？」

熱に浮かされて潤んだイザヤの双眸が、じつとヒヨウジュを見つ

め。

じうしたのだから、思ったその瞬間、ヒュウジュは押しつかり
れた強烈な息を詰め壁にした。

「んふ……っ」

唇を塞がれてくる。

熱い体温を、胸に感じる。

そう理解したときには、ぬるつと舌が、歯列を割つて入ってきた。

「イ、ザヤ……っ」

ボツと頬に熱が集中する。

嬉しいけれども恥ずかしくて、幸せだけれども怖くて、胸がどき
どきと煩いくらい跳ね上がった。

その胸を、下から掬い上げられるように揉み込まれる。

「んあふ……っ」

胸を締め上げる衣装ではないせいで、譲られていなに胸はイザヤ
の手のひらの感触を直に受けてしまう。

どうしよう、どうしよう、どうしよう。

頭がそう混乱して、手足をバタつかせてしまう。ヒュウジ
ュは小さな悲鳴を上げては胸を吸われた。

「ひ……ふ」

絡められ続けていた胸が離れたときには、もうヒュウジュは息も
絶え絶えで、なにをされてもうたのかもわからなくなってしまった
りしてしまっていた。

「ひよ……やわ、ら、かい」

はふ、と微笑んだイザヤが、首筋に顔を埋めてきて耳後ろをくすぐる。びくっと震えて肩を竦めたヒョウジュだつたが、やわやわと胸を弄られているせいで逃げることができず、むしろ徐々に力が抜けていつて動けなかつた。

「たべ、たい……ひよ、たべたい。いい？」

「イザ……つ……ヤ」

「これ、たべてい？ やわらかくて、おいしそう。たべたい

すんすんと鼻を鳴らしたイザヤが、背中に腕を回して衣装の留め具を外そうとする。

そうなつて漸くハツと思考回路が再始動したヒョウジュは、イザヤがなにをしようとしているのかもやつと理解して、慌ててイザヤの胸を押し返して止めようとした。

「だめ、イザヤ……つ……怪我が」

「たべたい」

「イザヤつ」

今は怪我の治癒を優先して欲しい。触れられて、いやなわけではないのだ。

だからと思つて止めようとしているのに、イザヤはどうにそんな力があるのか、ヒョウジュがもがいてもまったく動かない。そういうしてこむつむ、背中の留め具は外され、現われた肩に噛みつかれた。

「イザヤー！」

振り絞ったヒョウジュの声に、漸くイザヤがぴたりと動きを止め、潤んだ瞳でじっと見上げてくる。

こんな状態なのに、好きだと思つてしまつ、イザヤの優しい瞳。自分を欲してくれている、直情な眼差し。くらくらと眩暈がした。

「ひどい、怪我なの……つ……熱が、高いの……つ……だからお願ひ

ヒョウジュの切な願いに、イザヤはただじっと、見つめてくるだけだ。

その顔が、幸せそうな微笑みに包まれたとき。

「たべさせむ」

願いもむなしく、ヒョウジュは再びイザヤに肩を噛まれた。

16 : ゆめにみた。2(前書き)

イザヤ視点です。

旦那のソファに腰を下すと、泣き声がソファに流れだせ
た。

こんな顔をさせたいわけじゃない。
こんな悲しくなるようなことをしたいんじゃない。
泣かせたいんじゃない。

やう思ひのに、身体がそう動いてくれない。聞ひのことを聞いてく
れない。

じりじり、じりじり、じりじり。

苛立ちが募る。
自分を殺したくなる。

やうして、やうして、泣き声でいたヒヨウジュの瞳から、光り
が失われてしまった。

「ひよ……。」

違うんだ。
こんなこと、したいんじゃない。
もつと幸せを感じられる、そんなことをしたいんだ。

「び、びっくりさせるなよ、イーナ」

「……、へ？」

聞こえた、ギルの声に、イザヤは幾度か瞬きをする。
真つ暗な視界は、しかし端のほうが明るく、また「われは寝台に横になっていた。

「……、あれ？」

ヒョウジュを組み敷いて、泣き叫ばせていた気がするのだが。
どう見ても、そんな状況に自分はない。

「どうした？」

「……ギル？」

「ああ。なんだ、寝ぼけてるのか？」

首を動かし、明るいほうを見ると、人型となつていて、ギルが寝台に腰かけ、蠟燭の明かりで本を読んでいた。

「……あれ？」

どういうことだらう。

首を傾げたら、自分と同じ顔をしているギルもまた、同じようになつて、首を傾げた。

「なんだよ？」

「え……ええ？ ひよ、ひよは？」

「隣の部屋で眠つてゐる。イーサが無茶するから、侍女が怒つて寝室を別にしたんだ」

憶えてないのか、と訊かれて、やつらまでのことを鮮明に思い出す。

「お、おれー！」

勢によく寝台から半身を起しあと、ギルは大きく身体を揺りして驚いていた。

「だ、だから、びっくりせらるなー。なんだよ、イーサー！」

「……おれ、ひよを！」

「ひよがどうした。押し倒そうとして、侍女に殴られたばかりだろ、イーサー！」

「え……？」

「憶えてないのか？」

怪訝そうにしたギルが、事細かに、それを教えてくれる。ヒョウジュを押し倒したのは、一度田を覚ましたときで、しかしそれをアビが殴つて止めたことだ。

それから三日が経過してこるといつ。

「じゃあ、夢……？」

「は？ 夢？」

ヒョウジュに乱暴をして、泣かせていたのは、夢だということだ。ほつと、身体の力が抜ける。

「おー、イーサー？」

ぱたりと寝台に倒れ込んで、長く息を吐き出した。

ヒョウジュを泣かせていない。悲しませていない。
よかつたと、心から安堵した。

「……イーサ、頭だいじょうぶか?
だいじょぶじやねえ」

熱のせいでいかれている。その自覚がある。たすがにこれは不味
いと、イザヤは頭を抱えた。

「やべえ、おれやべえよ
「……そう言えるなら、もうだいじょうぶだな
「だいじょぶじやねえつてー。」

ヒョウジュを組み敷いて、無理やり抱いだとした。いや、抱いて
いた。そんな夢を、眠りながら見ていたのだ。
たすがにやばー。

「ん、熱も下がってきたな。そろそろ痩せ我慢もできるだろ」

イザヤの頭を無造作に撫でたギルが、そんな適当な診断を下す。
それを扱いのけて、イザヤはギルを睨んだ。

「もう我慢なんかきくかよ
「ん。いつものイーサだ」
「はあつ? 意味わかんねえしー」
「怪我続きで、ちょっとどこかかなり頭おかしかったからな。そ
れだけ元気ならもうだいじょうぶだろ
「だから、だいじょぶじやねえって言つてんだるー。」

勝手に納得しているギルに、こくり「だいじょうぶじやない」と

言つても、けつきょく聞いてくれなかつた。「いつものイーサだ」と、満足そうに頷かれて、意味がわからなくてイザヤが憤慨しても、ギルの態度は変わらない。

怒鳴り過ぎて疲れてきた頃、腹部と腕に激痛が走つた。

「いて……つ……てて」

「あ、まだ動かないほうがいいぞ。怪我の治り、ちょっと遅いらしい

い

あれから数日が経過しているのに、傷はまだ塞がつていらないらしい。かなりひどい傷だつたようだし、痛みで眠れそうになかった意識が、強制的に眠らせられていたくらいだ。そう簡単には治らないだろう。

そういうえば指の動きが鈍い。

「……ギル」

「うん?」

「指が……」

「……そとか

すべて言わなくとも、ギルにそれは伝わつた。

ほつと息をついて、動きの鈍い右手を握つたり開いたりしてみる。左手の動きも鈍くなつていて、これは右手の分の力を使って疲れているだけか、或いは数日も剣を握らずにいるから鈍つているのだろひ。

ふと、このまま手が動かなくなれば、狩人で在り続けられなくなるのかもないと、思った。

そうすれば、このどこから湧いてくるのかわからない激しい憎悪も、消え失せてくれるだろうかと思った。

人間に憎悪を向けている自分に、苦笑がこぼれた。

「どうした

「ん……いや、こんなに人間が嫌いで、憎いとか思つてるわりに、ひよとか、ばあちゃんとかじいちゃんとか、好きな自分がいて……おかしいなと思って」

「心を許してる人間を、殺したいとか思うのか」

直接的なギルの言葉に、唇が歪む。

いとしい人を殺したいだなんて、思わない。

だのに、人間を憎く思う。

どうしてこんなに人間が嫌いで、憎いのか、イザヤはわからない。

ただ、失望して いる自覚はある。

だから嫌いで、憎いのかもしれない。

好きでいたいのに。

ヒヨウジュや、祖父母と慕つて いるふたりのように、好きであつたいのに。

「おれは、たぶん、壊れてるんだ」

ぎゅっと、拳を握る。力を込めると、傷がある右腕が痛んだ。

「人間を好きでいることに、疲れたのかもしんねえな」
「……おれは、どうしてそこまでイーサが人間を護ろうとするのか、わからない。嫌いなら、護る必要なんてないだろ」

「諦められねえんだ」

「人間を?」

「好きになりたいから」

「……無意味だな」

イザヤの想いを、ギルはあっさりと切って捨てる。それはギルが人間ではなく魔という獣だから、というわけではなく、ギルの性格だ。

「そんなに、頑張る必要はないと思つんだけど」

「頑張る?」

「嫌いなら、嫌い。それでいいだろ。それ以上は、疲れるだけだ」

今、イザヤがそうであるように。

ギルは肩を竦めてそう言つと、イザヤが瞬きをしたその一時の間に、黒犬の姿に戻つた。

「ほら、もう少し休め。熱は下がつてきたけど、油断できないんだから」

ぐいぐいと巨躯をイザヤに押しつけてきたギルは、寝台の中に潜つてくると、柔らかな黒毛をイザヤに提供してくれる。温かなぬくもりに、イザヤはすり寄つた。

「疲れそうにねえんだけど」

「なら、目だけでも閉じておけ。身体を動かすな」

「退屈だ」

「そうでもない。この城には……得体の知れない人間がいる

「え……?」

「わりと近くに……でも気配が掴めない。ふらふら動いてる

危険人物がヒョウジュの近くにいる。そう思つと、ぞわりと全身が凍いた。

「害があるよつては思えないけど……注意は必要だ。だから身体を休めて、こやとこいつ動きのよつにしておけ」

「……ああ」

やはり、ここから逃げたよつがよさやつだ。眠れなくなつたイザヤは、だがその警戒に、身体を休めよつと、キルの言つとおり瞼を閉じた。

夢オチ……『メンナサイ。

朝食の時間、寝室を分けられたイザヤの許を訪れると、彼はすでに起きていた。寝台の端に腰かけて、どこか遠くを見るよつた双眸でヒョウジュを見る。

その不思議な双眸にヒョウジュは軽く不安を覚えたが、すぐにふんわりといつものように微笑まれて、なんだかわけのわからない感情に胸を締めつけられた。

「ん、おはよ」

「……おはよ。まだ眠っていたほうがいいわ」

「わいこいや。ずっと横になつてんのも疲れるし、退屈だから」

緩慢とした動作は、やはり高熱が続いていたことと、未だ塞がらない傷の影を引きずつていて。油断しないことと氣を引き締めて、ヒョウジュはアビに朝食を運んできてくれるよう頼むと、イザヤのやばに歩み寄つた。

「じつしても横になるのはいや?」

「やだ。つまんねえもん」

イザヤは、こと寝台で眠ることに関しては、頑固だ。怪我をしたときだけ身体を横にする場所だ、といつ認識しかないのではないかと、やつと思つせどに拒絶する。

見ることが嫌いなのだから。」

「見ることもイヤヤことって、恐怖なのだから。戦うことを見れ、去ると同じこと。」

ヒュウジコはまたまた、やう感じじる口があった。

「怖いの？」

「え？」

「眠るのが、意識を手放す」ことが、恐ろしいの？」

囁つて、イザヤは珍しく、少しだけ動搖したようて瞳を揺り、唇を震わせながら笑つた。

「な、なんの、」口だよ

あからざめとも震える動搖で、ヒュウジコはやうと息をつべ。

「やう……怖いのね

どうして今まで気づけなかつたのだろう。

戦いに恐れ、怯え、震える手のひらを見てきたのに。怖こと素直に叫びイザヤのやばい、誰よりも長くこたのこ。

「なにをやんなに頑張るの

ヒュウジコは腹部にあつた手のひらをぎゅっと握り、イザヤを見つめる。

「なにをやんなに……我慢するの」

「……ひよ、なに言って

「イザヤはもうひとりではないわ」

真っ直ぐ見つめたイザヤが、大きく目を見開く。

ああ彼は。

彼は、やはり孤独だったのだ。

「わたしにそばにいてとイザヤは言つて、わたしもそばにいてと言つたわ。ずっと一緒にいたこと言つたわ」

「ひよ……」

「ひとりではないのよ、イザヤ」

イザヤの恐れや怯えは、孤独だ。孤独を感じていたから、孤独を感じたくない、孤独になるまこととして「怖い」と口元に、必死に抗つていたのかもしれない。

どうしてこんな簡単なこと、もっと早く気づかなかつたのだろう。

孤独は、ヒョウウジュも抱えているものだとこのふう。

「……ひよ」

ヒョウジュと回じよつこじつと見つめてきていたイザヤが、両腕をヒョウジュに伸ばしてきました。

「ひよを、おれこくれるのか?」

その問いかけは不思議で、ヒョウジュは首を傾げた。

「わたしはイザヤのそばにいたいと言つたわ」「だから。ひよは、ひよをおれこくれるのか?」

じうこの意味だろ？

解釈に困ったヒョウジュだったが、とりあえず頷いて、伸ばされてこむ両腕に誘われて手のひらを添える。ぎゅっと握られた手のひらは、引っ張られることとなかった。

「ひょは、おれのなんだ……？」

「イザヤの？」

会話が噛み合わない。

そう思っているのはヒョウジュだけだったようで、次の瞬間、いきなり握っていた手のひらを引っ張られてヒョウジュは前のめりによろめいた。

「イザヤ……っ？」

危うく転びかけたところを、イザヤの胸がしっかりと抱きとめてくれる。しかし、そのままイザヤが寝台に倒れたので、けつきよくその衝撃をヒョウジュは受けたこととなつた。幸いにも痛みはどこにも感じなかつたが、問題はイザヤの身体である。

「イザヤー！」

イザヤの怪我は腕や腹だけではない。細かいところでは背中や脇、肩にだつてある。つまりは全身怪我だけで、怪我のない部分のほうが少ないのだ。

ヒョウジュは慌ててイザヤの上から退けようとしながら、だが腕に絡んだイザヤの腕が離れることはなかつた。じつにかこつにかその腕から逃れると、寝息が聞こえてくる。

「……え？」

見ると、イザヤが眠っていた。

それは珍しくもない光景ではあるのだが、なにかが違う。

「……イザヤ？」

呼びかけるが、もちろん眠ったイザヤが反応するわけもない。どうやら完全に眠っている。それを見るのはこれで二度めだ。しかし、なにかが違う。

ヒョウジュは黙してじっと、イザヤの寝顔を見つめ続けた。

どれくらい見続けていたのか、ヒョウジュのその真剣な解析が、小さな声に破られる。

「ひょ……ひょひじゅ」

情けないほど弱々しく聞こえた声に、ふと顔を上げる。

「……、父上わせ」

数日ぶりの父王が、泣きそうな顔をしながら、呆れたようにため息をついている宰相と並んで、開けられた扉の前にいた。

「そ……そなたは、ひょ、その騎士と……」

「はい？」

「！ は、早過ぎるであらひ……」

なんのことだか、わっぱりである。

急に慌て始めた父王にヒョウジュは小首を傾げつつ、そういえば

寝台に座り込んでいたと思い出してそこを降りると、眠っているイザヤに毛布をかぶせる。イザヤの怪我は油断ならぬるので、足許のまづこ避けられている上掛けもかぶせて整えた。

「 ハラウジュー。」

と、大きな声で父王に呼ばれたときは、静かにして、と唇に人差し指を当てた。

「 やつと眠つてくれたのです。起ひやしないでください。」

軽く睨むと、それだけで、もともとハラウジューは甘く弱い父王はぐつと押し黙つた。

少しでもなにか喋らしかねると騒ぎかねない父王を隣室に押しやり、呆れている宰相と並べて座らせると、ヒョウジュもその向かいにある椅子に腰かける。

朝食をいただきながら話をしよう、とこいつになつたので、宰相はともかく、父王の分の朝食も卓には並べられていた。だが、朝食に手を伸ばすのはヒョウジュだけで、父王はぎゅっと握った拳を震わせながら、ヒョウジュからの言葉を待つてはいる状態だった。わが父ながらなんだか情けない、と思つてしまつ。

「皇帝陛下から、なにか御達しがありましたか？ それとも、おばあさまからですか？」

そう切りだしたとき、父王はあからさまにびくついた。つまり、皇帝からも祖母からも、なにかしつら言葉があつたということだらう。

「そうですか。それで父上わまは、なにをおつしゃりにいらっしゃりへおいでなれつたのでしょうか？」

「ヒョウジュ……父に向かつて、それは」

「わたしは申し上げました。お忘れですか？」

父王の言つたことを切り捨て、ヒョウジュは容赦なく睨みつけた。父王は困惑したよつて顔を歪ませたが、少しずつと諦めたようにため息をついた。

「あの迷子……いや、狩人とのことは、本気なのか」「わたしがおばあさまに振り回されないとでも?」「母上ならやりかねん。おまえを丸め込むことなど、あの人には容易いことだ」

「それは失礼というものです。わたしは自分の目で確かなものを見て、感じて、判断しました。わたしはイザヤと共に在り続けます」「……ヒョウジュよ、考え直さぬか」「いやです」

あんな、心がすたずたに引き裂かれるような想いは、もう一度と味わいたくない。今回のことでのヒョウジュはそれを思い知った。ここで父王が諦めてくれないのなら、本気で、一生の願いでもって聖国のある皇帝陛下に助力を求めようと考えている。

ひとりでひつそりと生きよう、などと思っていた頃が懐かしい。ほんの少し前のことだというのに、今は、どうしてあんなことを考えられたのかがわからない。それくらい、ヒョウジュの中でイザヤの存在は大きくなっていた。

「それほどまでに、おまえの決意は固いが」「決意しているのではありません。考え直すことなどできないだけです」「ヒョウジュ……」

わが父ながら、とても情けない顔だ。娘の強気に、びりじょりもできなくて途方に暮れている。
少し、おかしな光景だった。

「逆にお訊ねしますが、なぜ父上さまはそれほどまでに、わたしを聖国へ嫁がせようとなさるのですか? 迷子だったイザヤを保護し、

その後見まで用意してくださったのは、父上さまではありませんか。わたしがイザヤと共に在ることの、なにがいけないのですか？」

矢継ぎ早に訊ねると、父王は困惑顔のまま視線を泳がせ、そうして言葉を捜すように俯いた。

「イザヨイは、余にとつて兄であつたのだ」

そんな言葉から始まつた父王の言葉に、ヒョウジュは口を閉じる。

「逢う機会はそれほど多くなかつたが、イザヨイは確かに、余にとつて兄だつた。誰にでも優しく、穏やかに微笑み、狩人とは思えぬほど柔らかな人だつた。むろん剣を握らせれば、とたんに人が変わつたように強かつた。そんなイザヨイが……余には誇りだつたのだ

だがな、と父王は続けた。その行に、ヒョウジュは悪いものを感じじる。

「イザヨイを快く思わない連中が、少なからずいたのも確かだつた。イザヨイはコウガ族だつたからな。その戦闘力に恐れを抱く者がいたのだ。その者らの手引きで、イザヨイは休む暇すら与えられることがなく次から次へと害獸駆除に引つ張り回された。たまに帰つてきたかと思えば怪我だらけ、治り切らぬつらにまたすぐになくなる。それの繰り返しだ」

それは、ヒョウジュは眉間に皺を寄せた。

まるで、今のイザヤのようだ。

「イザヨイをまほあはあたまとおじこさまの義弟でしたのに、どう

して「

仮にも王族のひとり、そういう立場にあるはずのイザヨイがなぜ、ヒョウジュは思つ。

「王族の系譜に、イザヨイの名はないのだ」

「え……？」

「イザヨイにあるのは騎士の謹。王族であるとされておらぬ

「……どうして」

王族の系譜を見たことがあるわけではないが、祖父母が決め、言ったことに嘘はないはずだ。書き記されていないわけがない。

「イザヨイが断つたのだ」

「断つた？」

「自分という存在を見てくれるだけでいい、とな。それほどまでに、優しい人だったのだ。コウガ族の生き残りであつても、血統を重んじられれば、出自もわからぬ己のがその立場にあるのは、そもそも似つかわしくないことだ、と」

ふと、思う。

誰もが一様に、イザヨイは優しかったと言つ。穏やかで、剣など似合わない人だったと言つ。

それなら、祖父母の申し出を直ちに断るのも、当然ではなかろうか。

「イザヨイの優しさに甘んじる、そんな日常が一変したのは、害獣の被害がもつとも多かつた一十余年、王都にまでその被害が及んだときだ。われらはもう国が終わるのだと覚悟した。世界の調和を司る聖國が傾き始めていたのだ、覚悟したのも当然のことだ。だが、イザヨイだけは諦めなかつたのだ。その超人的な力で、王都を護り

続けた。休むことなく、眠ることすらなく、ひたすら戦い続けた

今でも鮮明に思い出す「」ことができる、と父王は言った。その後ろ姿を、剣を構えた立ち姿を、忘れることがないと言った。

「余は、イザヨイの隣に並ぶことも、ましてその背を追いかけることもできなかつた。王太子だつたからな……皆に止められて、拳句閉じ込められた。漸く外に出たときには、すべてが終わつたあとだつた」

「終わった……」というのは、

「ギルギディツツが、その背にイザヨイを乗せて、帰ってきたあとのことだ……目覚めぬ人となつていた」

父王の言葉は、まるで懺悔だ。二十年前、王太子であつたからこそなにもできなかつたがゆえの、悔しさと悲しさだ。

「だから余は決めたのだ。なににも屈せぬと。けして諦めぬと。そうちやつて紡いだ日々が、この二十年余りだ。余はイザヨイが犠牲者であつたと思いたくない」

「犠牲者……？」

「あの狩人は確かにイザヨイの魂を持つであろう。だから保護した。イザヨイはわが兄も同然、わが国にとつての恩人だ。しかし、それと聖國との問題は別なのだ」

父王が、それまでの表情を一変させ、ヒョウジューの父としてではなく、一国のあるじとしての顔で、ヒョウジューを見やつてきた。

「国を秤にかけることなどできぬ。イザヨイが護り通したわが国を、聖國の揺らぎに潰されるわけにはゆかぬ。そのために、今回の縁談を持ち上げたのだ」

それはつまり、ヒョウジュは考える。

父王は、ヒョウジュの気持ちよりも、祖国を想う気持ちを優先させたのだ。きっとそれは、兄王子と同じものだ。

そして、なぜ急にそなことになつたのかといえば、先帝ヴェナートの崩御が世界に轟き、皇太子が戴冠すると決まつたからだろ。皮肉にも、皇太子はヒョウジュとそう歳も変わらない。偶然が重なつたというよりも、二十年も前からそういう動きがあつて、計画が練られていたとしか思えない。

「余はな、ヒョウジュ、新たな皇帝を見極めるつもりで聖国へ来たのだ。もしもヴェナートと同じような人間であれば、わが国の滅びを以つて弾劾せんと考えている」

父王の決意に、ヒョウジュはハッとする。

「……戦争を仕掛けれるおつもりで？」

「わが国は、これ以上の疲弊にはもう耐えられぬ。聖国を軸としたわが国、この大陸にとつて、聖国の歪みは民を徒に苦しめるだけなのだ」

父王の祖国を想う気持ちは、痛いほどわかる。ヒョウジュも王族の端くれだ。民を護りたいと思う。己れの気持ちと、祖国を秤にかけることは、難しいことだ。これが一国の王である父なら、祖国を秤にかけることなどできるわけがない。

「そのお考えは、今も？」

「変わらぬ。おそらく各國の王の思惟も、余と同じであら。聖国に並ぶヴェルニカ帝国の出方によつては、世界規模の戦争にもなりえる」

父王の、王たる者の発言、ヒヨウジコは肅然とした。

「それほどまで……」

祖国の未来を、考えようとしているなかつたわけではない。王女として、國の象徴たる王族のひとつとして、祖国に貢献できる」とをいつも考えてきた。

ただそこに、イザヤといひ、ヒヨウジコを「ひよ」と呼ぶ人が現われただけで。

「おまえに無理強いをさせている」とはわかっている。それでも、余は王だ。國を護らねばならぬ。戦争が無用のものであつて欲しいのは余とて同じことだ」

「……わたしを、皇帝陛下のそばに置く」と、戦争は回避される

と?」

「されぬ場合もある。だが、情報は須らしく各国へもたらされる」所詮、自分は道具である。国政のために使われる、有力な駒である。

わかつていたことだつた。

わかつているつもりでいた。

そのために生まれ、生かされていふとわかつていた。

けれども。

わかつていても、痛い。

許されない自由が、恋しい。

「やつぱり裏切るんだな、おまえたちの國は」

ふとそんな声が、露台のほうから聞こえてきて。

振り向いたそこには、イザヤが立っていた。否、イザヤと同じ顔に化ける魔犬ギルギティッシュが、静かに立っていた。

「……ギル？」

「イーサが唯一欲したものを、おまえたちは奪う。……イーサは強くないのに、どうしてわかつてくれないんだろうな。どうしてそんな裏切りが、できるんだろうな」

はあ、と息をついたギルは、開けられた窓に背を預けて、空を見上げる。

「おれはどんなに時間をかけても、イーサをわかつてくれないおまえたちを理解することは、できないな」

晴れていた空に、雲がかかったのか、部屋の明るさが落ちる。魔であるギルは身にまとうものまで黒いので、一気に暗闇が押し寄せたような錯覚を感じさせた。

「ギル……わたしは

「いいよ、ひよ」

「え？」

「言わなくていい

伝えたい言葉があつたのに、ギルにそう言われてしまつと、口を開くのも難しくなつてしまつ。

「たぶん、人間はそんなもんなんだ。おれは産まれたときからイーサのそばにいて、イーサと一緒にいたから、イーサのことならわかるけど……国とか政とか、よくわからないからな」

なにかを諦めてしまったような、考えることをやめてしまったようなギルの言葉に、ヒョウジュは唇を噛む。言い訳を考えようとした自分が、愚かしく情けない。

「ひよは悪くない。いや、なにかが悪いなんてことは、ビニにもないんだ。おれが求め過ぎた。それだけのことだ」

ふう、と息をついたギルが、窓から離れてヒョウジュたちに背を向ける。立ち去ろうとしていたギルを呼び止めたのは、父王だった。

「ギルギディイツツ……」

欄干の上に乗ったギルが、ちらりとその呼び声に振り向く。ひどく冷めた瞳に見えたのは、獣特有の細い瞳孔のせいだらうか。それとも、イザヤを理解しようとしたしない人間への、諦めだらうか。

「余は、イザヨイへの恩を忘れてはおらぬ……」

「……だから、なんだ？」

「だ、だから……」

「裏切つてなどいない、とか……いつつもりか？　はん、ばかばかしい」

鼻で笑つたギルは、灰色の瞳を細め、嘲笑つかのように父王を見下ろす。

「おまえたちはイーサからひよを奪つた。これ以上ない裏切りだ。国が滅ぶ？　滅ぶべくして滅ぶのなら、ヒツの昔に滅んでいい。そんなことにも気づけないのか」

「ほろふ、べくして……？」

「国を見る。大地を見る。世界を見渡せ。天を仰げ。おまえたちの

脅威とはなんだ

「……なんだと？」

ギルの言葉は、父王を、そして宰相をひどく動搖させた。それはヒョウジュにもわかる、動搖だ。

「ギル、なにを……」

言っているのか、と訊く前に、ギルは肩を竦めるやいなや、欄干の上から飛び去ってしまった。慌てて追いかけても、魔であるギルの姿を追いかけ見つけることはできず、ヒョウジュは露台から晴れ間の覗く曇り空を見上げる。

「滅ぶべくして滅ぶのなら、とうの昔に……？」

害獣の被害は、二十余年前を境に、増加傾向にある。聖国の歪みが、祖国に影響しているせいだ。だが、逆をいえば祖国は、増加した害獣の被害に二十余年も耐え続けていることになる。

それはつまり、ヒョウジュは視線を父王に戻した。眉間に皺を寄せ、握った拳で口許を覆う父王のその癖は、なにか重要なことを考え込んでいるときのものだ。

おそらく父王も、ヒョウジュと同じことを考えているだろう。

祖国が滅びそうになつた二十余年前、イザヨイがいなければ確かに祖国は滅びていた、と。だが祖国は滅びなかつた。

ギルの言葉を解釈するなら、二十余年前が、祖国の滅びのときだつたのかもしれない。

それなら。

祖国の脅威とは、いつたいなにか。
いつたいどこに、あるのか。

ヒョウジュはその答えに、父王の反応から、確信を得た。

18 : 大地を踏む。2（後書き）

ゆっくり更新になつてしまつておりますが、どうかこれからも拙作をよろしくお願ひいたします。
読んでください、ありがとうございます。

足早に父王が立ち去った部屋で、ヒョウジュは呆然としながらも考える。

頭はまだ混乱していた。

それでも、確かなことがあった。

祖国の脅威は、ヒュにはない。
祖国の脅威は、ヒュにもない。

それだけは確かなのだと、ヒョウジュは思った。
もしかしたら、脅威はすでに去っている可能性もある。

「あれえ？」

ふと、少し間抜けた感じの声が露台から聞こえて、ヒョウジュはびくりと肩を震わせた。

「変な気配が二つからしたんですけど……間違えましたかねえ」

欄干に、見憶えのある青年が立っていた。思わずヒョウジュは瞠目する。

「陛下の、侍従長……？」

「へ？ あ……王女殿下のお部屋でしたか。これは失礼しました」

欄干から部屋側に降り、露台に立つた聖國皇帝の侍従長は、丁寧にその頭を上げてにっこり笑った。

「このよつなとこりから、申し訳ありません。ちよつと不思議な気配を感じたもので、さすがにこつ何度も感じますと、確かめたくなつてしまいましてね。追いかけてみたらここに来てしました。

お許しください」

一瞬、ぎくりとする。ギルの存在は知られていない。それなのに、侍従長はその気配を、それも最初から知っていたような様子だった。なんだか得体の知れない侍従だ。

「王女、ここになにか来ませんでしたか？」

「い、いいえ」

「……そうですか。どうしてそんな気配がここからしたんでしょうね。いえ、今もその気配はあるんですけどね。なんでしょうねえ」

どうしよう、と焦らなくていいのに焦つてしまつ。このまま、ギルの存在は伏せておいたほうがいいのか、それとも知られてしまつていいのだろうから黙つていたほうがいいのか、わからない。イザヤは逃げるための手段に、ギルの存在を隠しているのだ。

「王女殿下、そういうの、なにかご存知ありませんか？」

侍従長は笑みを崩すことなく、ヒョウジュになんらかの答えを迫つてくる。

「お答え、できかねます……わたくしには、わかりかねますゆえ
「へえ……なるほど。そういう答え方もありますね。上手いです」

両手を叩いた侍従長は、まるで遊んでいるかのような態度だった。
すべて見透かしているようすである。
この人は、本当に侍従なのだろうか。

「しかしですね」

と、侍従長が唐突に、笑みを深めた。

「隠しじ」とほこけませんよ、王女殿」

ハツとしたときにはすでに遅く、ヒョウジュは歯を噛んだ。

「サリヴァンは言いましたよね。派手なことはするな、と。釘を刺したはずなのに、あなた方はなにをなさる?としているのでしょうか?」

「……なにも」

「してませんか? ならいいんですけどね。ただ、どんな目的があるのか、それくらいは教えて欲しいですね」

もしかすると、すべて、わかっているのではないだろうか。

この侍従長も、聖国の皇帝陛下も、なぜヒョウジュがここに来たのか、なぜ妃候補として連れて来られたのか、各國の王の思惑すべて承知しているのではなかろうか。

侍従とは思えない侍従長の深い笑みに、ヒョウジュは息を飲む。

「……わたしに田的などありません。わたしは、イザヤと共に在りたいと望むだけの、ただの女です」

「つまりそれは、『自身が国とは関係がないと、そういうことです

か？」

「わたしの心はすべて、イザヤにあります」

「……そうですか」

侍従長が笑い方を変えた。不気味にも思えた笑みから、人好きする優しい笑みに。

だから、わかつた。

この侍従長は、すべてを知っている。
わかっている。

リョクリョウ國のみならず、各國の王の思惑をすべて、承知している。

「あなた方の近くに感じる気配に、伝えてください。ありがとうございます、と」

「え……？」

「あなたのsuchな聰明な方と、そして無鉄砲だけど真っ直ぐな方に
出逢えたことは、わが國主にとつて幸いなことです。とてもよい関
係が築けそうで、これからが楽しみですよ」

侍従長は、ギルの存在を不審には感じているようだが、それをヒョウ
ウジュやイザヤにこれ以上問い合わせるつもりはないらしい。むしろ、
安心して欲しい、と言っているような気さえする。

「では、このような場所から失礼してしまったので、帰りも」ひらり
から失礼しますね。淑女のお部屋にお邪魔して、申し訳ありません
でした」

きつちつと頭を下げた侍従長は、欄干に足をかけると、ひらりと

外へと姿を消した。その身のこなしへ、どう見ても侍従とは思えない。

本当に彼は侍従なのだろうか。

首を傾げたところで、どうやらギルのことは見逃してもらえたらしいとわかつて、ヒョウジュはほつと息をついた。

「ひょー！」

「……ギル？」

侍従長が消えたところから、ギルが再び姿を見せた。今度は人型ではなく、黒犬の姿だ。

「変な気配がした。ひょ、無事か？」

露台からこちらに駆け寄つてきたギルに両腕を広げ、その柔らかな黒毛に顔を埋める。

「変な気配つて……侍従長も同じことを言つていたわ」

「じじゅうちょう？ おれが言つてるのは、人間だけど人間じゃない奴のことだ。この近くから感じた。だいじょうぶか？」

どうやら侍従長に対し、ヒョウジュが不思議に思つたように、ギルもなにかおかしな感覚がするようだ。

「あの人、ギルのことをわかつてているわ」

「だろうな。ずっと探し合つだ」

「そうなの？」

「最初は気にならなかつた。おれも疲れてたから」「そう……でも、もうだいじょうぶ。あの人、言つてたわ。ありがとうつて」

「ありがとう？ なんのことだ」
「とてもよい関係が築けそうで、これからが楽しみだそつよ」
「……なんだそれ」

意味がわからない、ジギルは首を傾げ、その顎をヒョウジュの肩口に乗せる。ヒョウジュも、あの侍従長がどんな意味を込めてそれを口にしたのか、それはわからない。けれども、彼が悪意あつてわけではないというのは、わかる。彼はさあざまなことを心配しているのだろう。そんな気がした。

「ヒョウジュギル、あなたに訊きたいことがあるの」
「うん？」

ヒョウジュはその腕からギルを話すと、灰色の双眸をじっと見つめた。

「リョククリョウ国は、滅ぶなら、もう一十年も前に、滅んでいるはずなのね？」
「イーサがいたからそくならなかつただろう」
「わつ……やつぱり、そつなのね」

やはり祖国の脅威は、ビヨンこもない。

「ねえギル、わたしたちは、なにを、怯えていたのかしら？」
「知らない。おれには理解できない」
「……そうよね。わたしたちは、なにもないのに、怯えていたのね」

「ばかだ、と思った。」

父Hも、父王の考えに賛同した者たちも、みんなばかだ。
どうして、気づかなかつたのだろう。

どうして気づけなかつたのだろう。
脅威など、ないのに。

「だから言つんだ。どうしてイーサをわかってくれないんだって」「ええ。みんなイザヨイを……イザヤを、わかつてくれないわ」「ひよはイーサと一緒にいるべきだ。イーサからひよを奪う奴は、おれが噛み碎いてやる」「…………ありがとう、ギル」

おそれらく父王は気づいた。ギルの言葉で、見過しきしてきたものに気づいたはずだ。それをどう修正していくか、父王は見せつけなければならぬ。イザヨイの魂を持つイザヤに、イザヤにつき従うギルに、そして利用しようとしたわが娘に、その結果を見せつける必要がある。

父王は、イザヨイの行いのみならず、その想いを正しく理解できなかつたのだから。

間違わぬいで、ヒョウジュは願う。
イザヨイが護つた国は、今も、護られ続けている。
見誤らないで、と祈る。

滅んでもおかしくはなかつた国が、今も苦しいながらも生き延びてゐるその理由が、今ここに有るのだ。

20 : 大地を踏む。4(前書き)

イザヤ視点です。

田を開けると、そこにはヨウジユの姿はなく。身体を包む浮遊感のようなものに、イザヤは首を傾げる。支えの頼りない感覚に、戸惑いながらも身体を起こすと、ナレは、秋の気配が漂う草原だった。

ああ、夢を見ているのか。

直感のとおり、草原には以前の夢で見た、黒に近い赤毛の男がぽつんとひとり、空を見上げて座っていた。男が見上げている天は今にも雨が降り出しそうな曇り空で、眺めていて楽しそうには到底思えない。それなのに、口許には笑みがある。

ああ、目が笑っていないのか。

男の横顔から見える双眸は、ひどく虚ろだ。まるで、心がどこか遠くへ飛んでしまっているようだ。

「なあ、あんた……」

イザヤは男に声をかけようとして、しかし急に、目の前の光景が歪む。あまりの歪みに眩暈がして瞼を閉じ、眩暈が治まってから田を開けると、そこはこの数日で見慣れた部屋だった。どうやら白昼夢を見ていたらしい。

「……ひよ?」

と、いるはずのヒヨウジユを呼んで。

「なあに？」

と、返ってきた声にほつとある。

頬を抓つて、これが現実であることを確認するヒ、イザヤは寝台から身体を起こした。

ヒョウジュは露台に近いところにある椅子に腰かけて、本を読んでいたようだつた。イザヤが寝台から起きると、立ち上がって本を椅子に起き、そばに来てくれる。

腕を伸ばして、ヒョウジュを捕まえた。

「イザヤ？」

「……また、夢を見た」

「夢？」

「前にも見た。ロウガ族の男の……なんか、楽しくなさそうに、曇つた空を眺めてんの」

なぜあの男の夢を見るのだから。逢つたことはそもそもない、会話だつてしたことのない人間だ。

あれはいつたい、誰だろう。

「ねえ、イザヤ……もし、あなたに前世があるとしたら、どう應つ？」

ふとヒョウジュに、そつ問われた。

「前世、ね……あるとしたら、たぶんおれは、めちゃくちゃ人好きだろうな」

「どうして？」

問われて、にこりと、イザヤは笑う。

「好きになりたいって、よく、思つから」

ふとした瞬間に込み上げる、人間への憎しみがある。けれどもその裏には、搖るぎないしさもある。だからきっと、前世があるとしたら、イザヤは人間が好きだったのだ。

とても、とても、人間が好きだった。

生きている今が、そうしようとすることに疲れてしまつくらいに。

「前世のおれは、獸だったのかもしんねえな」

「……ギルみたいに？」

「ギル？ ああ……うん、ギルっぽいかも。ギルと違うとすれば、不特定多数つてどこかな。ギルはおれとかひよ以外、あんまりよく思つてねえからさ」

ギルのような黒い犬だったかもしれない。いや、そうだっただろう。もし前世があるとしたら、イザヤは黒い犬だった。そんな気がする。

「逢つたことはないけれど、そういう人をひとり、知つてゐるわ」

「え？」

「イザヨイ」というの

ヒヨウジュがふと教えてくれたその名に、イザヤはびくりと眉を動かす。

どこかで聞いたような、いや、その人を知つているような気がしてならない。だのに、はつきりとしない。瞼がかつて、頭がもやもやとする。

「そいつ、コウガ族の……おれの夢で出てきてる奴？」

「どうかしら…… そいつの？」

「そんな気がする。すげえ人好きそうな顔してたし、子どもが好きみたいだった。ただ、世界に泣いて……絶望もしてたな」「絶望……？」

最初に見た夢を思い出して、イザヤは考える。

あのコウガ族の青年は、世界に嘆いていたのだ。

「おれの世界を壊さないで、奪わないでって……叫んでた」

素直に泣けばいいのに、泣くこともできず、心で泣いていた。思い出すと、なぜだらり、胸が締めつけられる。自分も同じようなことを、思つたからだらりか。

「ひよ……ひよは、おれのものだよな？」

「……イザヤ」

「おれだけの、ひよだよな？ われのそばに、ずっとここにくれるよな？」

イザヤの世界は、ヒョウジュドリ回つてこる。

あの頃、この世界に来るまでは、しがみつくなつてやまない。た祖父母と同じように、イザヤの世界はとても狭く、そして脆い。

だから、ヒョウジュがいる世界を、壊されたくないし奪われたくない。

失つたら、絶望する。

護りたい世界を、破壊したくな。

夢の青年が護りたとしていた世界でも。

「ひょ……ひょ、おれのひょ……ひこね

ぎゅっとヒョウジュヒ、しがみつく。

なんて情けないんだと、なんて恰好悪いんだと、思った。

それでも、縋らずにはおれない。

失うかと思ったその衝撃は、今も、イザヤの胸の裡で燻っているのだ。

「だいじょうぶ。だいじょうぶよ、イザヤ。わたしはイザヤの心が
にいるわ。ずっと」

「おれをひとりにしないで」

「わかつてゐる。だから、ね……イザヤも、わたしをひとりにしない
で」

手を伸ばせば、空の瞳が優しくも切なくイザヤを見つめている。
その瞳がいとしきてならぬ。ヒョウジュが好きだ、好きといつ葉
葉では收まりがきかなくなつてゐる。

ああ、どうすればこの心を、彼女に見せてやれるだらう。

いのいとしかね、言葉にならぬ。

「わたしを置いてかないで、イザヤ」

潤んだ空の瞳が、イザヤの頬にぽたりと、小粒な涙を落とす。あ
まりにも綺麗で、あまりにも温かい。

「泣くな……泣くな、ひょ」

「イザヤも泣いているわ……泣かないで、イザヤ」

ぎゅっとしがみついていたのに、ぎゅっと強く、包みこまれた。
柔らかな身体は、もうそれだけで、イザヤを安堵させる。

「ひよ……っ」

誰かをこんなにいとしこと想つたのは、初めてだ。

誰かをこんなに失いたくないと思つたのも、初めてだ。

ヒョウジュに出逢うまでの自分は、ただひたすら生きていただけだったのと、今をひながらに想つ。その日常を、当然としているだけだったのだと。

誰かをいとしき想つひとが、日常の一ひとつに鮮やかな色をつけていくなんて、知らなかつた。

だから。

「逃げよつ、ひよ……」辽から、国から、すべてから

「え……？」

「おれがひよを譲る。すべてから。だから、おれと逃げて、ひよ」

「イザヤ……」

逃げよつ。

夢の青年が、泣けずにいた世界から。ここから。

ヒョウジュを奪おうとする、国から。嘘と偽りだらけの、すべてから。その大地を踏むために。

逃げよう。

そう言つたあとのイザヤの行動は、早かつた。正確には早いのではなく、もともと手荷物がイザヤにはなく、ヒョウジュもまたそれほど持つていなかつたので、荷造りをする必要がなかつただけだ。イザヤは夜を待つて、聖国の皇城を抜け出す算段を立てた。綿密ではなかつたが、ギルがいればどうにかなるものだ。

だが。

「ああやつぱりねえ

と、夜も遅くに現われたあの侍従長が、イザヤとヒョウジュの前に立ちはだかつた。

「そりそろ限界かなあとは思つていたんですけどね」

「……退け」

のんびり笑う侍従長に、イザヤは敵意も剥き出しに威嚇する。どこに持つていたのか、腰には双剣があつて、その柄も握つていた。しかし、侍従長は怯まない。ギルが警戒を露わにしたように、その笑みはどこまでも得体が知れなかつた。

「そり警戒しないでください。べつに邪魔はしませんよ

「？ なんだと？」

「隠れているのも疲れるし、つまらないでしょう。だから、それそろ外に出してあげようかなと、思いましてね」

「……協力するとか、ぬかしてんのか？」

「セツとも言いますね」

各国の思惑やリヨクリヨウ国王の考えも承知しているのだらう侍従長は、威嚇するイザヤを看めるわけでもなく、淡々と「ついて来てください」と囁つた。

「ビリに連れてく氣だ」

「ビリの皇帝陛下の面倒が潰れなことひにする場所へ」

「ビリだつて訊いてんだ」

「つまりサリヴァンのところですよ。なんでわからんですかね」

おれは侍従ですよ、と言つて、苦笑した侍従長はこりひに背を向け、振り返ることなく歩いていく。ついて来ているか確認もしないその姿で、ヒヨウジユがどうしたものかとイザヤを窺つた。

「ビリあるの？」

逃げることに、反論はな。このまま隠れていっても埒は明かず、また過ちに気づいた父王がこれ以上ヒヨウジユを聖國へ嫁がせようと政略的ににかすることもないだろうから、侍女アビには申し訳ないが、ヒヨウジユが消えても大きな問題にはならないはずだ。

「意図がわからんねえ……とにかく、ばれちまつたし、ついてくしかねえんだろうけど」

「イザヤ、汝我のまづまづ？」

「なんともねえよ。頭やばくなるへりこの怪我は初めてだつたけど、初めてだつた分、かなり休んだし」

「平氣?」

「ああ

それなら、あの侍従長の^{ヒツト}おにじよへ。やつ^{ヒツト}、イザヤは怪訝な顔をした。

「信じんの?」

「あの人はずべてを承知しているわ。だからたぶん、陸^{ヒツト}もやつ

「……よくわからねえ」

「説明は歩きながら。行きましょ、イザヤ」

首を傾げたイザヤを促して、暗闇に溶け込み始めた侍従長の後ろ背を追つた。

「わたしが聖國に来たのは、その……嫁ぐためだつたの
「嫁がせねえよ?」
「わかってる。わたしも嫁ぐ気なんてないわ。そうじやなくて、父
上さまや兄をまがそうじよつとした理由よ
「政治的な……なんかだろ?」
「そのなにか、わかる?」

問いかに、イザヤは顔をしかめた。そういうことは考えたことがないらしい。

「大陸の調和と均衡の問題、そう言えばわかるかしら?」

「……おれ、歴史の勉強はしてねえ」

「なんとこいりで残念な生徒を感じたくないが、イザヤらしことこ

えぱらしき姿だ。

「二十年くらい前の害獸被害のこととは？」

「それは少し知ってるけど……その辺りから害獸被害が増えたつて、聖国の先帝が帝位を継いだのが、その辺りのことよ。害獸の被害が増えたのは、先帝のせいだろうと、各國の王たちは考へているの」「は？ なんで？」

「聖国の皇帝が、この大陸の調和と均衡を司るからよ」

「……なんかそれ、聞いたことが……天恵とかいう力だけ？」

「そう。わたしに穢れを祓う浄化の天恵があるように、聖国の皇帝には調和と均衡の天恵があるの」

「その力があるなら、害獸の被害は増えるはずねえんじゃね？」

そのとおりだ。

リヨクリヨウ国に現われる害獸は、言わば世界の塵、濁みだ。そしてそれら塵や濁みは、聖国の均衡と調和のもとに、増えもしなければ減りもせず、ある一定の数で捕捉される。リヨクリヨウ国は、世界を掃除する国として、またその調和と均衡の狭間にある国として、存在しているのだ。

しかし、それが崩れた。

二十年ほど前のことである。

「先帝には、その天恵がなかつたのではないかと、言われているわ

「天恵がないと皇帝になれねえの？」

「ええ。その天恵は帝位を継ぐ絶対条件よ

「……じゃ、なんで？」

「先帝は、実弟を弑しているの。皇弟が天恵受授者だつたと、そういう説があるのよ」

大陸の調和と均衡が崩れたのは、そのせいだと言われている。噂されている程度では済まないほどに、そう密かに囁かれている。これが事実だらうというのは、聖国先帝、ヴェナーの御世を鑑みれば、明らかだ。そもそもそうでもない限り、大陸の調和と均衡が崩れるわけもない。

「先帝が崩御したことで、その帝位はただひとりの皇太子殿下に……サライ皇帝陛下に継がれたわ。その人柄や優秀さは誰もが唸るほど敏腕ではあるのだけれど、それでも各国の王は、信じ切れていいのよ。」

「だからひよが？ おかしくね？」

「わたしが嫁いだところで、聖国の天恵が戻るわけないわ。それはわかっていることなの。けれど、わたしが聖国に入ることで、変えられるなにかはあると父上さまは考えたのよ。」

「……反乱か、或いは革命か……そんなどころ？」

「そうね……聖国を、弾劾するつもりだつたのかもしれないわ。聖国は神の国だから」

「……神？」

「聖国にはいるの。だから、聖国と呼ばれるのよ」

「ふうん……神サマのいる国ね」

「どこか信じられないような顔をするイザヤに、それも仕方ないと思う。ヒョウジュも、聖国に神があられると言から教わってきたが、話に聞くだけで逢つたことはない。本当にいるのかと訊かれたら言葉に詰まってしまう。」

「あの侍従長を信じてもいいと思うのは……陛下に、天恵があると思つたからよ。」

「……まあ、ねえと皇帝にはなれねえしな」

「嘘で塗り固めることだってできるのよ。天恵なんて、なんの印も

ないんだもの」

「それでも、ひよはヘイカに天恵があると思つわけだ?」

「あるわ」

確信を持つて、言つことができる。それはギルが、滅ぶのならとうの昔に滅んでいたと、その言葉があつたからだ。

「リヨクリヨウ国は滅びなかつた……生き延びた……皇帝の代が変わる、このときまで……それが証明だわ」

「ええと?」

「害獸が世界の塵や淀みだと、知つていて?」

「聞いたことある」

「聖國とリヨクリヨウ国は密接な関係にあるわ。世界の調和と均衡を司る国だもの、リヨクリヨウ国はよくも悪くも影響を受ける。それが、害獸の数と比例するのよ」

「害獸が聖國の……あー、なるほど、うん、意味わかつた。おればかだから言葉にはできねえけど、ひよが言いたいことはわかる」

ヒヨウジュが説明したいことを、どうやらイザヤは理解できたようだ。

「つまり、天恵を持つてる弟を先帝が殺したから、二十年前の害獸被害がひどくなつて……天恵もない先帝のせいで、害獸の被害は増加した、んだな?」

「そうよ」

「新しく皇帝になつた奴が天恵を持つてれば、害獸は減る?」

「ええ、確實に減るわ。二十年前の惨劇は繰り返されない」

「ふうん……そういうことか」

「なに?」

「いやさ、ばかなおれでも、けつこうい線いつたなと思つて」

「ここ線？」

「けつあくレクリョウ国は、ひよを傀儡にしたんだよ。國のため」

はふ、と嘲るよつて顔を歪めたイザヤは、随分とこやせつていて。

「ひよが王女だから、なんだよ。その法則がわかりや、どつてひどもできんじやねえか。ひよを利用しなくて、滅ぶなら滅ぶし、滅ばねえなら前に進むしかねえだらうが」

ギルと同じよつなことを、イザヤは言つた。

「もつと早く戻づけよ……國の過ち」

やつ、イザヤが呟くよつて言つたときだった。

「それが過ちだと氣づいていたら、なにが変わつたと思ひへ.

廊下の窓際に、寄りかかるよつて腕を組み立つていてのは、聖國の皇帝だった。

碧い双眸が、なんの感情もなく、じぢりを見ている。

「先帝は考えを改めたか？ 皇弟は生き返つたか？ 狂つた國の天恵は正されたのか？」

矢継ぎ早にくる問いで、ヒュウジュもイザヤも答えられず立ち止まる。

皇帝は続けた。

「聖國にもはや望みはないと、多くの国が主上國たるわが聖國を見捨てた。捨てられたわが國で、欠片でしかない望みを持った者たちが、いなかつたと思うか？」

歯を歪めた皇帝は、皮肉るよつに嗤つ。

「たくさんのお臣民が、皇帝を見放したよ」

「え、と驚かせられる言葉を、皇帝は平然と口にした。

「かくいうおれも、父とも呼ばせてくれぬ皇帝には、見切りをつけていたがな」

「サリヴァン！」

「気にするな、ラク。さすがはリョクリョウ國の姫、そして狩人だ。いい読みだよ」

侍従長に制止を受けても、皇帝は平然としていた。

ついて来い、と皇帝が言つた。またさうじてじく移動するのかと思ひきや、皇帝の足は外へと向かつてゐるよつで、氣づけば深い縁に囲まれていた。

「フヨンリスを呼んでやる。聖鳥が飛び立つ姿でもあれば、おまえたちがどこへ行こうとも、誰も咎めやしまい」

「フヨンリス？ 聖鳥？」

「見ればわかる」

皇帝は天を仰ぎ、呟くよつて「フヨンリス」とその名を呼ぶ。雲一つない夜空は、それだけではなんの変化も見られなかつたが、しかし緩やかな風が吹いたと思つたとたんにそれは目の前に現われた。

『呼んだか』

まづはその姿に、そして言葉に、ヒョウジュもイザヤも驚いた。

「でかつ……なんでこの世界のイキモノつてみんなでけえの？ おれ自分のちつこさに泣きたくなつてきたんだけ……うわ、自分で自分のことちつここ言つちやつた」

「イザヤ、だいじょうぶよ。こんなに大きい鳥、わたしも初めて見たわ」

「ほ？ ひよも？ え、じゃあこいつが規格外？」

大木に並んでも劣らない大きな白い鳥は、動物にも等しく『えら
れる天恵を得て、巨大化したのだろう。言葉を解すということは、
知力も備わっている。そんな動物は、魔と呼ばれているギル以外に
は、ヒョウジュも初めて相見えた。

それにしても、フェンリスというらしいこの聖鳥は、大きい。ギ
ルも随分と大きな犬だが、この聖鳥ほどではない。

『うむ？ 白の国の姫か？』
「え、ひよの知り合い？」
『そちらは赤の騎士じやな』
「えつ？ おれも知り合いつ？」
『……いちいち忙しい奴じやの』

やたらと反応するイザヤは、その手はきらきらとしているから、
おそらくきっと、フェンリスにものすこい興味がある。

「フェンリス。ふたりを乗せてくれるか。行き先はふたりが決める
が」

皇帝がフェンリスを撫でながら口を開くと、赤い瞳がじっとヒョ
ウジュを、そしてイザヤを見やつてくる。

『……かまわぬ』

それは、その背に乗せてもいい、といふ意味なのだ。フェン
リスの答えに皇帝が頷き礼を言つと、皇帝もじつとこちらを見やつ
てきた。

「行け。」この選択がおまえたちをビビり導くかは知らないが、貫き通す意志があるなら、これを利用しろ」

利用しろ、といつのは、フェンリスを、だろつか。いや、そうだろ。逃げようとしていたのだ。先回りをれるようこそ、皇帝が下準備していただけだ。

「……なあ、あんた」

フェンリスに興味を惹かれていたイザヤが、当然だが、怪訝そうに皇帝を見る。

「あんたにとつて、こんなことする意味、あんのか？」

皇帝に対し、それは無礼な口の効き方だ。けれども、注意するはずの侍従長はなにを言ひともなく、また皇帝も気にした様子がない。

「意味があるから、フェンリスを呼んだ」

「いいのかよ？ おれたちを逃がして」

「よくはない。だが、悪くもない。おれはリョクリョウ國の王太后の意見に、賛成しているからな」

「……ひよとおれのこと？」

「おまえたちの仲を引き裂けるほど、おれはおまえたちを知らない」

知らない者に対し、知ったようなことはできない。それはときには必要なことだが、今ほどこんな無駄なことはないと、皇帝は少し呆れたように言った。

「……おれ、あんたのことわりと好きかも」

「は？ なんだ、いきなり」

「おれとひよのこと、否定しねえもん」

「……だから、おれはおまえたちのことを、それほど知つてないわけではないだけだ」

「おれ、ミドリ・イザヤ。リョクリョウ国で狩人やつてる。そんで、ひよの彼氏。ひよはおれんだから、手え出すなよ」

にまつと笑いながらヒョウジュの腰を抱いたイザヤは、皇帝が首を傾げる。

「牽制する意味があるのか？」

ないけど、と珍しくイザヤは悪戯っぽく笑みを振りまく。

「なああんた、名前、サリヴァンだつける？」

「ああ」

「王サマっぽくねえのな」

「……よく言われる」

「あんたがこの国……えと、聖国？ あ、ヴァリアス帝国だ。の、皇帝になつたつてことは、その天恵があるんだよな？」

はつと、ヒョウジュはその話題に瞠目する。まさか「」でイザヤが直接訊いてしまうとは、思つていなかつた。だが、その答えはヒョウジュも知りたいことだ。

「……なればと、思つた」とは幾度もある

皇帝の表情が陰る。しかしイザヤの聞いてこな、是と答えたようなものだ。

「やつ言つなよ。なけりやよかつた、なんてさ」

「……なぜ？」

「あんたがいれば、リョクリョウ国の大魔は、そのつち数を減らす。おれは……」の剣で、ひよだけを護る「」じができるよつてなる」

ふと柔らかな笑みを浮かべたイザヤに、こんなとき、こんな場所なのに、ヒョウジュはどうと胸を高鳴らせてしまった。その音がイザヤへと届いてしまったのか、イザヤはふわふわとした笑みを、ヒョウジュに向けた。

「護るよ、ひよ。なにからも、すべてから、ひよを護るよ」

「イザヤ……」

「だからおれを選べ、ひよ」

強い眼差しがそこにあった。護りたいと黙つてひよのヒョウジュも同じなのに、その強さに心惹かれた。

「わたし、イザヤがいいの。イザヤのそばに、いたいのよ」

国を捨てたいわけではない。捨てよつとは思わない。ヒョウジュは王族で、国の象徴たる存在だ。

けれども、ただひとりの、人間でもある。

狩人に恋した、ただの女でもある。

狩人を愛したのは、王女だからではない。

「サリヴァン！ ありがたく、」のでかい鳥、利用させてもらひつが

「ん。ああ、好きにしろ」

「いつかあんたが困つたとき、助けてやる」

「今のところは必要ない。今はおまえたちだ。いいからひつをと行け。気づかれるぞ」

「サンキュー！」

「さんきゅー？」

「ありがとつて意味！」

「……ああ。礼を言われるほどのことではない。おれの都合もある

いいから行け、と皇帝に促されると、イザヤはヒョウジュの手を取り、ぐいと引っ張つてフェンリスに駆け寄つた。準備が整つたのかと、フェンリスが姿勢を低くしてくれたので、身軽なイザヤが先に乗りあがり、ヒョウジュは衣装に邪魔されながらもイザヤに助けられてフェンリスの背に乗つた。

『強くわれに掴まれ』

そう言われたが、柔らかな羽毛を握るのには気が引ける。

「ギルに乗つたときみたいに、とにかく全身でしがみつけばいい」

腰をイザヤに支えられて、気にするなど言つてくれたフェンリスにしがみつく。

フェンリスが、飛び立つ姿勢に入つたとき、はつと、ヒョウジュはそれを思い出した。

「陛下……」

「ん？」

「アビを……わたしの侍女を、お頼みしてもよろしいでしょうか」

これからは一緒にいることも、今連れていくこともできない侍女アビは、幼い頃からヒョウジュに仕えてくれていた。朝になつてヒョウジュがいることを知り、父王にその積を問われるだらうことを考えると、胸が痛む。図々しいことだが、頼めるものなら、皇帝

にアビの今後を任せたい。

「侍女も近衛も、預かっておく。気に病むな」

「あ……ありがとうございます！」

快い返事がもらえるとすぐ、フェンリスが翼を大きく広げた。

『『『

ばさりと、白い翼が羽ばたく。不快感のない重みが全身を襲つたが、まもなく緩やかになつていく。目を瞑つて重力や風に耐えていたヒョウジュだったが、イザヤが奏でる口笛が聞こえて、そつと瞼を開けた。

「ギルを呼んだ。白い鳥を田印にしろって伝えたから、あとからついてくる」

口笛はギルを呼び寄せるものだつたらしい。

「見ろよ、ひよ。もう、あんなに小さこ」

上昇していくフェンリスの上から、聖国の城が見えた。どんどん小さくなつて、もはや皇帝の姿もない。

「高いところ、平気なんだな？」

「え？」

そういうえば、フェンリスは鳥なのだから、空を飛んでいるということになる。だが、大きな白い鳥は、その背も広く、そしてその大きさから安定感もあって、まず怖いとは思わなかつた。

『われは落とさぬ。安心し』

「信じるべ、鳥。ひよを落としたらただじやおかねえからな」

『われはフェンリスだ。落とさぬと言つた限りは、落とさぬ』

「それつて、故意に落とす」ともあるつてことか?』

『さてな』

「落とすなよー。」

『任せよ』

楽しそうに笑つたフェンリスに、イザヤはしばし揶揄されていた。その光景をヒョウジュは微笑みながら見守つてたが、ふと、こんなに高く飛んでいるのに未だ届きそうもない夜空に、目が奪われた。

「久しづりに見たわ……」

「え? ああ、空?」

「」んなに穏やかな気持ちで空を見たのは、本当に、久しづり

「あー……ずっと、氣い張つてた?」

「ええ、そうね。聖國へ嫁げと言われたことから始まつて……今日まで、空を見上げることもなかつたわ」

風が気持ちいい。空が美しい。ふとした瞬間のその想いが、今はなんだかとてもことおしい。

「……ひよ」

「ん、なあに?」

「ありがとう」

急に強く弓を寄せられたと思えば、イザヤに礼を言われた。

「おれ、ずっと中途半端で……なんも、わかつてなくて……けだし、

ひよだけは、どうしても欲しくて……いろいろ迷惑かけたり、面倒かけたりするけど、でも、おれ、ひよが好きだから」

「……わたしも、イザヤが好きよ」

突然の告白は、けれどもあるつと、ヒヨウジユからせじまされた。

「サリヴァンの言葉をせんぶ信じるわけじゃねえけど、たぶんサリヴァンなら、いい王サマになると思う。だから、リヨクリヨウ国は平和になる。害獣の数が減つて、狩人も、穏やかにはいられねえと思うけど、でも、今までより危険は少なくなると思う。おれ、狩人だけど……ひよ、一緒にいてくれるか？」

「わたしの心は、もうずっと、変わらないの。変われないの。わたし……わたしは王女だけれど、一緒にいてくれる？」

「おれはひよが好きだ」

「……わたしも、同じよ」

「ひよ、おれの家族になつてくれる？」

「わたしはイザヤと家族になりたいの」

わかつて、ヒヨウジユは微笑み、イザヤの頬に手のひらを添える。擦り寄つてイザヤは、泣き笑いにも似た顔で、また「ありがとう」と礼を言つてきた。

「ありがとう、なんて……わたしにはそれが真実で、それ以外がないだけよ？」

「うん……うん、ひよ。おれ、すっげえ嬉しい」

「……わたしも、すごく嬉しいわ。イザヤに、好きと、言つてもうえたもの」

当たり前のように言つてくれたことが、こんなにも嬉しい。この喜びは、言葉に現わすことなどできない。

今さらだが、イザヤに「好きだ」と言われたことがとても嬉しいくて、涙がこみ上げた。

「わたし……つ……す、嬉しいわ」

ヒョウジュが恋したのは、怖がりで臆病な狩人。強くて、とても弱い人。

「好き……つ……好きよ、イザヤ」
「な、泣くなよ、ひよつ」
「愛しているの……つ」
「あ、あい……う、わつ……う、嬉しいかも」

たまらず泣き出したヒョウジュを、イザヤは強く、抱きしめてくれた。

「おれも、ひよのこと、あ……愛してる、よ」

恥ずかしそうに、けれども確かな力が、ヒョウジュを包み込んだ。

白い聖鳥が皇城から飛び立つという僥倖を多くの人々が目にしたその夜、誰に知られることもなく、異界より現われた黒の狩人が北方国の白き姫を攫つた。

22 : それが眞実で。2（後書き）

終わりかけていたのに放置して置いてすみません。
楽しんでいただければ幸いです。

23 : 婚の夜に舞い降りる。1（前書き）

* 視点が視点なだけに、会話だらけになっています。
視点が誰かは文末にて。

「おれが困つていろとき、助けてくれるのではなかつたのか」

と言つたのは、皇帝だつた。
いや、皇弟だつた。

「困つてんの？」

問うたのは、イザヤだつた。

「もう終わつた」
「じゃ、いいじゃん」
「……軽いな」
「だつて、べつに助ける必要なかつただり？　あんた、今めちゃく
ちゃ幸せそうだし」
「まあ……幸せではあるが」
「おれも幸せ」

にか、トイザヤは笑い、皇弟の苦笑を誘つ。

「にしても、あんた、皇弟だつたんだな？　ちりつと見たけど、あ
んた、皇帝にすつげえ似てた。兄弟いたんだ？」
「病に臥せつっていたから、おれがしばらく玉座を預かつていた。お
まえが言つように、おれと兄上はよく似てゐるからな。入れ替わつ

ていても、気づかれない」

「双子？」

「いや。一いつ、兄と歳が離れている」

「あんた今いくつだよ」

「二十七だが？」

「え、マジ？ おれのほうが歳上だったの？ おれ、あんたの兄ちゃんと同じ歳だよ」

「二十九？ おれのほうが歳下だったのか」

「なんつだよ、その意外そうな顔は！」

「いやべつに」

「悪かつたな、ばかっぽい顔で！」

「そりは言つてない」

久しぶりに逢つたというのに、つい昨日別れたばかりのようにふたりの会話は弾む。旧友なのでは、とちらりと思うが、イザヤと皇帝はたつたの一度、逢つて僅かな話をしただけの仲だ。

「え？ ジヤあなたにか？ あんとお、あんた十八だったわけ？ おれが二十歳で？」

「そりなるな」

「……凹む、マジ凹む」

「はあ？」

「おれ、すつげえガキだった……」

「おれもガキだったが」

「そのあんたより、めちゃガキだったんだよー」

「今とさして変わらないぞ」

「うわ凹んだ！ オレ凹むわそれ！」

頭を抱えて蹲つたイザヤに、皇帝はきょとんと目を丸くする。イザヤが問題にしたことを、まったく理解していない顔だ。

「おいサリグアン、もつもつとガキになれよー。おれが可哀想だろつ？ おれ可哀想な子だよつ？」

「具体的に言つと？」

「うわ凹むー。」

イザヤが大袈裟な身振り手振りで転げ回り始めるど、かまわないほうがいいらしいと皇弟は覺つたらしく、卓に用意されているお茶のところへと移動し、ひとり椅子に腰かけた。

「無視すんなよー。」

「あ？ ああ悪い。どこを突つ込めばいいのかわからなくて」「無視しないでくれたらそれでいいよつ？」

「難しいな……」

「簡単だよ！」

「咽喉乾かないか？」

「あ、いただきます」

転がつた反動を生かして飛び起きたイザヤは、皇弟の向かいの椅子に腰かけ、もう冷めてしまったお茶に手を述べた。イザヤの素早い変わりように、皇弟は苦笑している。

「あのときはわからなかつたが、けつこう騒がしい奴だつたんだな」

「あー、あんときなあ、ひよの一大事で頭いっぱいだつたからなあ。怪我もひどかつたし」

もうほとんど指先には感覚がない、といザヤは苦笑しながら右の手のひらをぶらぶらさせる。

「おまえも、動かないのか」

「いや、動くには動く。感覚が遠いだけ。って、おまえもって、あんたも？」

「おれは腕が全体的に……まあ、昔からだが」

「剣握れねえの？」

「ああ」

「……そつか。おれは両手つかえるから、そんな不自由もねえけど「おれもべつに不自由はしていない」」

左手ですべてできる、と言つた皇弟は、そつといえばずっと、動かしていいのは左だけだ。右はほとんど動かしていない。

「そうこやが、あんた、昔から髪、白かつたか？」

「自然といつなつた」

「ふうん……まあ、おれも気づいたら、田え蒼くなつてたんだけどさ。髪も、ちつと色が変わつた」

「ウガ族、だつたか」

「らしいな、この特徴を持つ種族は」

「らしい？」

「おれ、自分が誰から産まれたのかとか、知らねえもん」

「両親を知らないのか」

「そ。おれを拾つて育ててくれたのは、ばあちゃんじいちゃんよ。そのふたりも、知らねえらしい」

「……そうか。おれも、母親の顔は知らないな」

「へ？ そうなの？」

「別々に暮らしていた。そもそも、いることすら知らなかつたからな」

「あー……訊き難いんだけど」

「ん？ ああ、亡くなつている」

「てことは、やっぱ正妃？」

「知つてこるのか」

「歴史の本は、少し前にひよに読ませられて」

少しだけ空気が重くなつた。だが、皇弟のほうがまったく気にした様子がなく、イザヤひとりだけ申し訳なさそうにしている。しかしそれも数秒ばかりで、なにかを思い出すと、ぱんつ、と両手を合わせて叩いた。

「歴史で思い出した」

歴史で思い出すとは珍しいことだ。イザヤは本を読まない。強制的に読ませられてはいるが、自ら進んで本を読もうとする奴ではないのだ。ゆえに、歴史にはまったく興味がなく、強制されて監視について、初めて目にする。

「皇の剣つていう一族、まだいんの？」

「……メルエイラ家のことか？」

「そう、そのメなんとか家」

「メルエイラだ。メしか言えないってなんだそれ」

「すっげえ強いつて、本に書いてあつたんだけじさ。どんくらい強いのかなつて。あと、片刃の剣士だつて書いてあつたからさ」

「なんの歴史書を読んだんだ……確かにメルエイラは強いし、剣は片刃を主流にしている。だが、もう皇の剣とは呼ばれていない」

「じゃあもういねえの？」

「なんで気にする」

「おれも片刃の剣士だから。ちょっと、剣を見せてもらいたくて」

「……呼ぶか？」

「おう呼んで……、えつ？ 呼べんのつ？」

「というか、わつき逢つたと思つが」

「逢つたのかよ、おれつ？」

自らに逢つたかどうかを問うイザヤの姿に、さすがに皇弟も噴き出しへ笑つた。

「やたらと笑う騎士がいただろ？」

「あんたの周りは無暗に笑う奴が多い」

「ラクは違う」

「じゃあ……え、もしかしてあのブラックな笑み浮かべてた兄ちゃんとか、言わねえよな？」

「ぶらつく？」

「黒いって意味。薄い紫色の目をした兄ちゃん」

「黒いというのは当たつているな……そつか、イーサが片刃の剣を腰に下げていたから、ツアインは笑っていたのか」

「え？」

「ツアイン・メルエイラ。メルエイラ家の当主だ」

「あのブラックな兄ちゃんが！」うわ……ちょっとやかも」

「強いで、確かに。天惠者だしな」

「おまけに天惠者かよ。ああでも、剣は見せて欲しいなあ……エン

バルで腕のいい鍛冶師、紹介して欲しいし」

「ああ、片刃の剣を打てる鍛冶師はここでは少ないからな」

「サリヴァンは知らねえ？」

「ひとり知つている。だが場所までは……ツアインに訊いたまうが早いな」

ちよつと待て、と言つた皇弟が椅子を離れようとしたが、イザヤは「いやいやいや」と首を左右に振り、皇弟を呼び留めた。黒い笑みを浮かべていた騎士は怖いらしく。

「おれの剣見て笑つてたなら、すっげ怖い！」

「……手合わせくらいしないと教えてくれないだろ？」

「やだ！ おれ弱いもん！」

「なら……シヨイに訊いてみるか」

「つえい？ 誰それ」

「妻だ。妻もメルエイラの剣士なんだ」

「女の子なのに剣士？』

「強いぞ」

「おれ男の子なのに……」

ショボん、と凹んだイザヤは、いい歳の男なのだが、皇弟は気持ちがわかるのか遠い目をして顔を歪めていた。

「おれは体力監無とよく言われるんだがな……」

「あ、うん、そう見える。おれより弱そう。てか、弱いだろ、あははは」

弱いと決めつけられた皇弟は、田を据わらせた。

「ラク、シャインを呼んでーーー」

「うわちゅねつ？ 待てまで待て！ 黒い兄ちゃんは怖いつて！ つかどこに侍従の兄ちゃんがいるんだよつ？」

「呼べばくる」

「ああ！ そうだった、あの侍従の兄ちゃん変な天惠者だった！」

「ラ」

「呼ぶな！」

頼むから呼ばないでくれ、と反対側にいる皇弟に伸びたイザヤの、なんと恰好の悪い姿か。

「ふはつ、とついに耐えきれず笑つた。

「ギル！ おまえもつせつきからなんだよ！ 寝てたんじやねえの

かよ！

「ぶふつ……う、悪い。だつてイーサ、つるさいし恰好悪いし間抜
けだし、ばかだし」

「つるさい！」

眠れたものではない。実に十年近い再会、おまけにそれが偶然だ
つたせいか、珍しくイザヤが興奮気味で、ぎゃんぎゃん煩いのだ。
仲のいい友だちも少ないイザヤだから、もしかしたら歳の近い皇弟
には友情を感じていて、いやもしかしながらも友情を感じていて、
再会がたまらなくなつたのだろう。

大声を出すイザヤなど、師匠であるシスイ以外を相手に、初めて
だ。

今日はいいものを見た。

きっとイザヤも、今日はいい日だと思つてゐるに違ひない。

あれから九年が経つた。
あと少しで十年になる。

23 : 婚の夜に舞い降りる 1 (後書き)

ギル視点でした。

次話で終幕の予定です。

読んでくださいありがとうございました。

宴の夜に、狩人は異界より舞い降りた。彼は迷子だつた。帰る場所を求めていた。王女が出逢つたのは、狩人が黒犬と共に再び大地に立とうとしたときだ。そしてさまでまな壁を乗り越えて、王女と結ばれた。

「聞こえはいいけど、実際はそんなに多くの壁、乗り越えてねえよな」

達観するには少々年端の足りない少年が、母親から渡された書物を読みながらため息をつく。少年の傍らには、少年より幾ばくか幼い少女が、少年が呼んでくれる本の内容に目を輝かせていた。

「そんなことないよ。王女さまは、王女をまだつたんだよ？ すぐ大変だつたんだよ」

「夢見がちな少女のそれを壊すようで悪いけど、だつてこの黒犬つれた狩人つて、たぶん父さんのことだぞ？ 王女さまって、たぶん母さんのことだぞ？」

「お母さんつて王女をまだつたのつ？」

「あちやー……夢え膨らませるだけだつたか。てか、あのでかい城をなんだと思ってたんだろうね、この子。あれ母さんの実家だよ？」

「お城だよ？」

「お母さん、王女をまだつたんだあ」

「ああだめだこの子、あつち行つちやつたよ」

少年は短くため息をつき、書物を閉じる。少女が、もつと読んで聞かせて、とねだつてきただが、少年は自分で読めと押しつけた。

「ルナ、まだ読めない文字があるの！」

「おれも読めねえよ」

「お兄ちゃんも読めない文字があるの？？」

「誰が自分の両親の恋話なんぞ読みたいものか。書いた奴あほだな」

作者は誰だらうと、少女の渡した書物の背表紙をちらりと見て、その名にがくりと肩を落とす。夢見がちな少女を育てた父の名、つまり己れの父でもある人物の名が書かれていた。

「自分で作ったのかよ！　あの人あほだな！」

おそらくは母も携わっているのだろうが、こんなものを書いている暇があったとは驚きだ。しかもこの書物が店先に並んでいたところを見たことがないことから、この書物は世界に一つしかない。自分たちで作ったのだろう。どこにそんな暇があったのだと、少年はたびたびため息をついた。

「あ、お母さんだ！　おかえり、お母さん！」

人通りの少ない木陰で少女、妹ルナと留守番をしていた少年、キサは、漸く戻ってきた母ヒヨウジュの姿を見やつた。ちょうどルナが、母の懷に飛び込んでいくところだった。

「ただいま、ルナ。キサも、待たせてごめんね」

「それはいいけど」

「あら……イザヤとギルはどうしたの？」

「宿探しに行くつてわ」

「ルナとキサを置いていくなんて……困った人ね」

「いや、おれはだいじょうぶだよ。むしろ父さんのほうが危険だ」

警戒心の強さでいくらか、父イザヤより自分のほうが強い、とキサは常から思つてゐる。実際にそうなのだ。剣の腕は未だイザヤを越せないキサだが、それ以外ではキサのほうが勝つてゐる。だから黒犬、ギルも真つ先にイザヤを追いかけ、キサはルナとふたりで留守番をしていたのだ。

「母さんが戻つてきたことだし、父さんを探しに行くか」

「どこまで行つたかしら」

「見つからなかつたら父さんに探させればいいよ。ギルがついてんだし」

「そうね……じゃあ、街に入りましょうか」

「地図は手に入つた?」

「ええ、だいじょうぶよ」

ヒョウジュは幾分かおつとりしたところがあるから、店先での交渉などは心配するところだが、そのおつとりとしたところを武器にする人だから、買い物をするときはヒョウジュに任せたほうがいい。今回も、聖国であるヴァリアス帝国に入国する際、ヒョウジュの話しが多いに役に立つた。地図も、ヒョウジュに頼めばこの通り、最新版を安価で手に入れられる。ついで新聞も手に入れてきたようだ。さすがは母である。

「へえ、聖国の世継ぎ、皇女誕生だつて。うわ、もう婚約? 産まれたばつかりなのに、もう婚約者。お姫さまは大変だねえ」

「そんな話が載つてゐるの?」

「読んでねえの?」

新聞をヒョウジュに渡すと、キサが読み上げた部分を熱心に読み始める。さすがは元王女、じつじつとは少しでも興味があるらしい。

「ねえねえ、お母さん。お母さん、お姫さまだつたんでしょう？」

「あらあら、ルナつたら。女の子はみんなお姫さまよ？」

熱心に新聞を読んでいたヒョウジュだが、ルナに話しかけられると、ぽいっと呆気なく新聞を道端に放り投げた。本当に少ししか興味がなかつたらしい。

「だからつて捨てるなよ……」

まだ読みたいので、キサは新聞を拾つべく腰を曲げた。しかし、自分で拾つ前に、誰かに拾われた。

「あれ……、ギル？」

新聞を拾つたのは、人型になるとイザヤそつくりの顔になる、黒犬のギルだった。

「父さんを追いかけつたんじゃねえの？ まさか見失つたとか？」
「いや、途中で知り合いに逢つたから話し込んでる。おれはおまえたちを迎えてきた」

「父さんに知り合い？ 話し込むほどの人つていたかなあ」
「ひよも知つてゐる奴だ」
「母さんも？ 母さん？」

振り返るとヒョウジュはルナを抱つこしたところだった。

「あらギル？ イザヤは？」

「知り合いのところに置いてきた。そいつが宿も提供してくれるらしい。迎えに来た」

「そうなの？ 探す手間が省けたのはいいけれど……どなたのところかしら？」

「あの奇妙な気配のあるじ」

誰だよそれは、という突っ込みは、しかしヒョウジュのちょっとと吃驚した顔に阻まれた。

「いらしているの？」

どうやらギルが表現した人物に見当がつくようだ。そんな知り合いがいるなんて、正直驚きだ。そもそも、ギルのその表現を理解できる」とすら、驚きである。

「誰かわかるのかよ？」

「え？ ええ、なんとなく……そう、あの方が……九年、いえ、もう十年ぶりになるのかしら」

思い出を語るように懐かしそうな顔をしたヒョウジュは、訝しむキサに微笑んだ。

「だいじょうぶよ、わたしも知っている人だわ。というより、お世話になったお方、ね

「世話になった人？」

「昔、聖國で人生に関わる経験をしたの。それを助けてくれた人よ

それはまさか、あの書物に書かれているようなことだらうか。あ

れは真実だといふのだろうか。

「母さん、あの話……本当なの？」

書物はルナが大事に抱えている。脚色が多いだろうと勝手に思つていたのだが、そこには真実も埋もれているのかもしない。

「そうよ。わたしは……宴の夜に舞い降りた狩人に、攫われたの」

微笑む母は、とても懐かしそうにしていた。そしてそこには嘘なんでもなく、どこか嬉しそうだった。

「……どうで伯父さんたちの父さんに対する反応がひどいわけだ」

「そうね。わたしたちほ、反対されてばかりだつたから」

「おれでも反対するよ。だつて父さん、ばかだし？」

「わたしには可愛い人なのよ」

「いろいろと笑う母は、心底、父に惚れている。また父も、心底、母に惚れている。それがわかるから、いつも口先だけで父を貶していた。

「あの父さんがねえ……」

剣の腕だけは信頼しているし尊敬もしているが、それ以外はてんで、父を父とは思えない。それでも、王女だった母を攫うくらいの度量を、父は持っていた。その勇気だけは忘れずに憶えておこう。そして母を想うその心も、疑うことなく信じ続けよう。

「お母さんはやっぱり王女さまなのねー」

「あらルナ、あなたも王女さまよ？ わたしはイザヤの王女さまだ

から、いつかルナもそつなる日がくるわ

「ルナも王女さまっ？」

「ええ、そうよ」

「お兄ちゃん、ルナも王女さまだつて！　お兄ちゃんは王子さまだね！」

いやおれは王子なんて柄じゃないけど、とキサはルナの言葉に半ば呆れたが、まあ楽しそうだからいい。

「ルナにとつてお兄さまは王子さまなの？」

「そう！　お兄ちゃんはルナの王子さま！」

「よかつたわね、キサ。ルナはあなたの王女さまよ」

なに言つて居るのだが、と母にも呆れたが、それもいいか、と思つ。

キサはルナの、実の兄ではない。だからルナは、キサにとつて実の妹でもない。

未来を望んでいいのなら、許されるのなら、この手で永遠にルナを護りたいと思つくりては、ルナを可愛いと思つて居る。

「まあ、ルナがあれを王子さまだつて言つてくれるなら、それもいいかもしけねえな」

「お兄ちゃんはルナの王子さまよ！」

「はいはい。とりあえず、父さんのといひに行ひいがっ！」

書物に真実が埋もれて居るのなら、あんな経験をしたいと思わなくもない。だが、あれば父の物語で、母の物語で、自分のものではない。今ここにある物語が、キサにとつてはいといいものだ。

ああもしかしたら、だから父は、自分の物語を書物にしたのだと

うか。いとしく想つ日々が、器からじぼれ落ちてしまつのがいやで、形に残したのだろうか。

「キーサ、行くぞ。荷物を持って」

「ん、ああ。……なあギル」

「なんだ」

「おれは父さんが羨ましいかもしけねえ」

「なんだそれ」

「母さんに、毎日、好きだつて言つてる」

「……いつまでも恥ずかしい奴だ」

「はは。ギルつて、魔のくせに、たまにすげえ人間っぽいよな」

「おまえはイーサに似過ぎだ」

「育ててもらつてゐからなあ」

ははは、と笑いながら、置いていた荷物を肩に背負つた。半分はギルに持つてもうひとつ、先を歩き始めている母ヒルナを、追いかけた。

24 : 宴の夜に舞い降つる。2（後書き）

これにて【宴の夜に舞い降つる。】は終幕となります。

ここまで読んでください、ありがとうございました。

お気に入り登録してくださいました旨を、ありがとうございました。

番外編は……キサヒルナのことを、少し描きたいたいなと想っています。
経緯ですとか。

その際はどうぞよろしくおつきあいなく、よろしくお願ひいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2236o/>

宴の夜に舞い降りる。

2011年10月19日22時38分発行